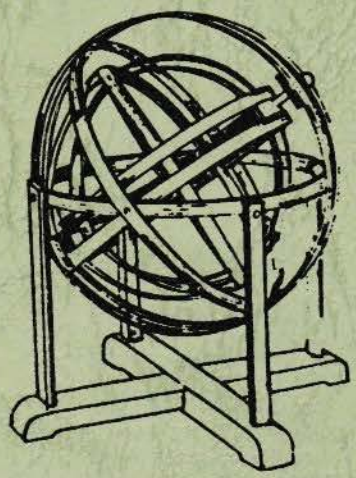
学聖・谷秦山

―その生涯と秦山学大成への道―

没後300年　特集号



谷秦山製作と伝えられる渾天儀の図

香美史談会

学聖・谷秦山　発刊ご挨拶

香美史談会会長　　上村　敬介

今度、皆さま方のご支援とご協力によりまして、谷秦山先生没後 300 年特集号を発刊することができました。

秦山先生の生涯と秦山学大成への道はまさに「いばらの道」であり、非凡な才能の開花は、病弱、困乏、迫害、冤罪蟄居という苦難を乗り越える闘いでもあり、その生涯は波瀾万丈でした。

これらにつきましては香美史談会の前身であります「土佐山田史談会」による「秦山特集号」において、先輩諸氏が判りやすく記述されていますが、今回の校訂では、さらに判りやすく読みやすいように努めました。

ご案内のように、秦山先生の業績は土佐南学の大成と古典及び国史研究の端緒を開き、郷土史学の基礎を築かれたこと、大義名分を明らかにして、国体を論じ、尊王を説き、郷土の子弟を導いたこと、後世の日本人に一つの道をひらこうとしたことにあります。これは先生の神道学、儒学、天文暦学、薬学、漢詩・紀行文等に顕著であり、その学問は現代で言えば、文科系、理科系、自然科学系、薬学・医学系等に相当する多岐にわたるものであり、そのすそ野の広さに驚き、学問の偉大さに敬服しているところでございます。しかしながら、編纂担当者の研究が不十分であり、深遠、重厚なる谷門学の総てをご紹介できていないこと、至らぬ点が多々ありますことをお詫び致します。

香美市土佐山田町秦山町の秦山邸跡にある詩碑には、南学のさらなる研究に励み、仲秋の満月に照らされた鏡野が好きだから、明るく清らかな月と共に心しずかに暮らしたい、そして、藩主交代にかかわる事件に連座したとして、幽閉蟄居されても、萬古浩然たる天地の心と詠み、天地自然に遊ぶが如く悠然とし、学問研究に励みました。秦山先生がいかに香美市土佐山田町を愛していたかが窺われます。

国指定史跡となっている前山グイミ谷の墓所には、墓参に訪れる受験生らが絶えることはありません。碩学大儒、学聖・谷秦山は香美市、高知県の誇りであり、本冊子の発刊により、多くの人々に先生の研学の精神を知っていただく一助となればと願うものございます。

今回の発刊に際して、ご援助いただきました依光晃一郎様、香美市及び秦山会・寺村勉様に深く感謝を申し上げます。さらに、お言葉をお寄せいただきました香美市長法光院晶一様、教育長時久恵子様に厚く御礼を申し上げまして、発刊のご挨拶といたします。

平成 30 年 1 月吉日

史談会冊子編纂に寄せて

香美市長　　法光院　晶一

香美史談会編纂の冊子『学聖・谷秦山－その生涯と秦山学大成への道－』を興味深く読ませていただきました。

実は、これまでの谷秦山先生は土佐藩の政争に関与したかどで蟄居を命ぜられ、56 歳の若さでなくなるまでの 12 年間幽門され、病と貧困、相次ぐ家族の不幸など、不条理に胸を焦がし、無念、失意の底にあって土佐山田で過ごされたと思っておりました。

ところが冊子には、先生は蟄居幽閉の厳しい環境の中にあっても少しも真理探究、追究の熱を冷めさせることはなく研究生活を続け、最も充実した開発研究の時期を過ごしたとあり、門弟、知人が「書籍講」をつうじて研究生活を支えたことを紹介しています。また、家族との暮らし、子供たちの成長を静かに支える姿、一点の汚れのない誠に爽やかで奥深い人間性が伝わってきました。今まで私の胸のすみにあった暗いものが少し除かれ、「秦山と子供たち」の「土佐山田の地はよほど住みやすかったものと思われる」一文に救われる思いがいたしました。

秦山先生の天文暦学も詳しく紹介をいただいております。病弱の天体観測を支えたのは「天文を解き明かすには、測り調べるにあり」の一念でしょう。「土佐高知城緯度 33 度半」、伊能忠敬測量に先んずる観測によって正確な値を求めたことは驚きです。移動可能な扇型目盛り付き板の高度計の記述もあったということですから、自庭観測のみは苦痛であったでしょう。でも、彗星や惑星直列現象など世紀の天体ショーを観察する秦山先生の姿を想像すると先生の感動の声、震える肩がみえるようです。広大な天体を観察する先生の目には人のうごめきはさぞ小さく見えたことでしょう。

「西遊紀行」の章は、秦山先生の様子がさらにいきいきと伝わってきます。売り薬にて少々のもうけのため幡多に赴くのですが、先生の関心はむしろ歴史や文化、交友、式社考、野中遺児との面会などにあったのではないかと思えます。その後も再三土佐の中を旅行していますが、先生は歴史、文化、交通などさまざま関心をもち、その興味は尽きることはなかったでしょう。真理探究の姿勢、向学心はゆるぎなく、冤罪の許されぬ蟄居幽閉の身でありながら、「甲午除夜」（秦山邸碑文）のような大きな広い気持ちを示されました。閉塞感に包まれる現代、大いに学ぶべき生きざまであると深く感じました。

谷秦山先生は香美市の尊敬するべき偉人です。これからも市民の皆さんとともに顕彰してまいりたいと思います。

終わりに、谷秦山没後 300 年を迎え、素晴らしい冊子を編纂された香美史談会の皆さまのご努力に感謝申し上げます。

学聖・谷秦山 －その生涯と秦山学大成への道－
発刊に寄せて

香美市教育長　　時久　恵子

江戸時代の学者として名高い谷秦山先生の功績がまとめられたこの冊子は、質問に答える形で分かりやすく述べられており、中学生・高校生にも充分理解できる貴重な資料です。

没後 300 年を迎える年に、谷秦山先生の偉業を編纂してくださった香美史談会の皆様に心から感謝申し上げます。

さて、土佐南学の復興や 45 歳の時に現在の土佐山田町に蟄居させられて、なお多くの門弟が秦山先生の下に集い学問への研鑽を深めたことはよく知られていますが、私がさらに注目したいのは、渋川春海に師事し天文学と暦学を修めたことです。

山崎闇斎の下で共に学んだ後、天文学と暦学の最先端の研究、技術開発に取り組んでいた渋川春海から教えを受けたことは、秦山先生の人生において重要な部分を占めていたことは想像に難くありません。

生涯のうちで執筆した数多くの著作のうち、日本に接近した彗星についての記述があり、渾天儀と呼ばれる惑星の位置等を正確に把握するための機材を購入するなど、その生涯のなかで多くの情熱を天文学に注がれたと思われます。

高知城の位置が北緯 33 度強と推測したのは、伊能忠敬が日本地図を完成させるよりも 114 年前だったと言われています。

このように、学問に打ち込む姿は門弟を始め多くの人々の心を揺さぶり、秦山先生が貧苦や病気にみまわれたときには人々が助け、支えてくれることとなりました。

現在でも秦山先生の努力を見習いたいと、学問を志す多くの受験生が土佐山田町の墓所を訪れます。

今後、この冊子を香美市の貴重な資料とし、特に香美市の未来を担う子どもたちには、秦山先生の偉業を大切に伝えていきたいと思います。

目　　次

先学の軌跡
はじめに

1　なぜ秦山先生のお墓が土佐山田町ぐいみ谷にあるのですか？・・・・・・・・・
　　○谷秦山の誕生　　○谷秦山の没年

2　秦山先生のお墓が合格祈願の日の丸の旗にうまっているのは
　なぜですか？　・・・・・・・・・・・
　　○頭の良さ　　○父母の教えと願い
　　○合格祈願等、秦山への思い　○墓所の日の丸の旗について・・・・・・・

3　秦山先生は若い時に京都へ学問修業に出たそうですが
　何を誰に学んだのですか？　・・・・・・・・・
　　○勉学の道　　○神道の道

4　秦山先生の学問はどのようなものでしたか？また、先生は土佐南学を
　継承発展させたそうですが、それはどういうことですか？　・・・・・・・
　　○秦山の学問と著作

5　秦山先生の天文暦学について詳しく教えてください。　・・・・・・・・

6　秦山先生は偉い学者と云われていますがどこが偉かったんですか？・・・・・
　　○秦山に咲いた花　　○秦山の試練と迫害

7　秦山先生の学問思想が後の維新史に大きく寄与したことは本当ですか？・・・
　　○秦山の学統　　○秦山学と坂本龍馬について

8　秦山先生の家族や親類の人、友人にはどういう人がいますか？・・・・・・・
　　○谷家の墓所　　○秦山に最も影響を与えた人

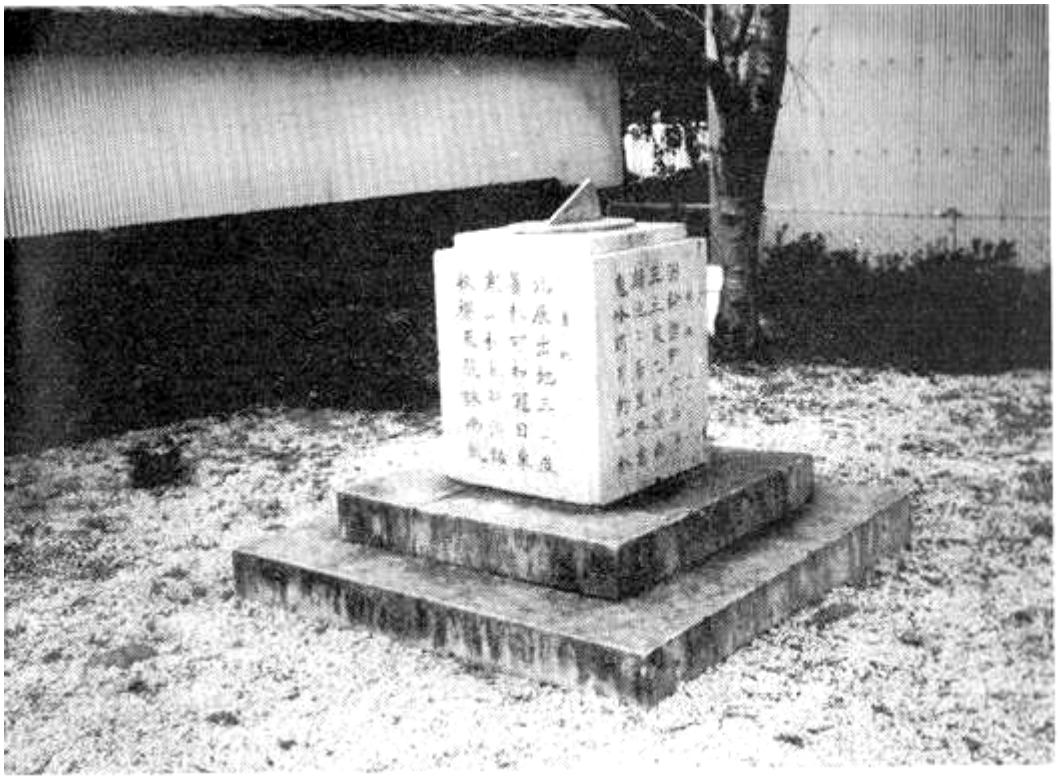
9　秦山先生の存在は現代において、どんな意味をもっていますか？・・・・・・

10　秦山先生は各地へ旅行したそうですが何のための旅行でしたか？・・・・・・
　　○秦山の旅行　　○秦山の旅行目的　　○秦山の「西遊紀行」

11　秦山先生と野中婉のかかわりについて教えてください。　・・・・・・・・
　　○谷家と野中家の関係　○秦山と婉の交流のはじまり
　　○野中婉の医学　　○秦山と婉　心のかかわり

12　秦山会のことについて教えてください。　・・・・・・・・・・・・・・・・

先学の軌跡



◎ 泰山郡跡碑文

南面

暑熱
北辰出レ地三三度
暑熱可レ知冠二日東一
寒玉秋狐皆漫語
収レ襟ヲ反覆シテ詠二南風一ヲ

東面

仲秋
満輪ノ鏡野露花浮ブ
三五ノ寒光伴フ二独幽一ヲ
斯地ニトスレ居ヲ豈無レ意サンヤ
鬼峯明月約ス二千秋一ヲ

西面

甲午除夜
罪籍未ダレ除カ歳八タビ去ル
迎ヘレ花ヲ送リレ雪ヲ意駸々
窮通何ソ止ラン一炊ノ黍
萬古浩然タリ天地ノ心。

元禄十年（一六九七）作

北辰地より出ずる三三度
暑熱知るべし日東に冠たるを
寒玉秋菰皆漫語するに
襟を収め反覆して南風を詠ぜん

元禄十三年（一七〇〇）作

満輪の鏡野は露花を浮かべ
三五の寒光は独幽を伴う
この地に居をトすこと豈意なからんや
鬼峯の名月に千秋を約す

正徳四年（一七一四）作

罪籍未だ除かれず歳八たび去る
花を迎え雪を送りて意駸々
窮通いずくんぞ止まらん一炊の黍
萬古浩然たる天地の心

暑　熱　（きびしい暑さ）　秦泉寺にて

北極星が地平線より三十三度の高さにある。ここは北緯三十三度の地であるから、夏の暑さは日本の中でも格別である。竹や真菰（まわりの人々）は皆「暑い、暑い」と、たわいもなく言い合っているが、こんな時期こそ私は襟を合わせて、くり返し、くり返して南学の研究に励もう、いや励まなければならない。

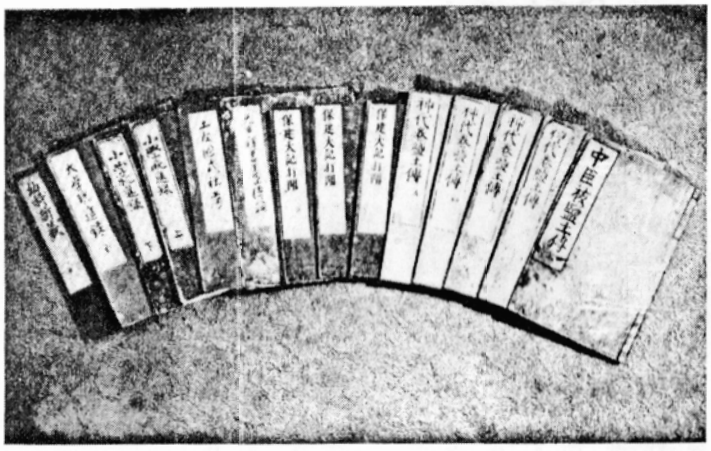
仲　秋　　山田に移住の年

仲秋の満月に照らされた鏡野には夜露が光って花のように美しく、十五夜の月の光りは私に幽玄さを感じさせてくれる。此の地に住居を構えたのには理由があってのことである。（私は鏡野が好きだから）峯より昇った明るく清らかな月と共に、いつまでも今のように、心しずかに暮らしたいものだ。

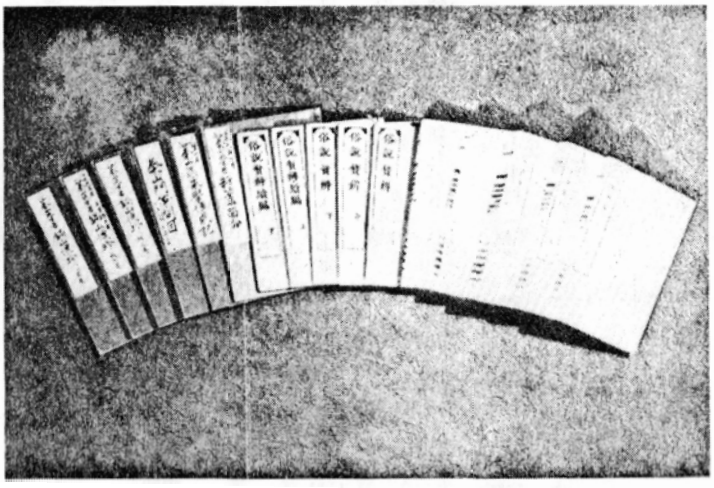
甲午除夜　　死の四年前

冤罪の罪はまだ許されないまゝ八年が過ぎてしまった。花咲く春を迎え、雪降る冬を見送りながら年月の流れの早さにただ驚くばかりである。

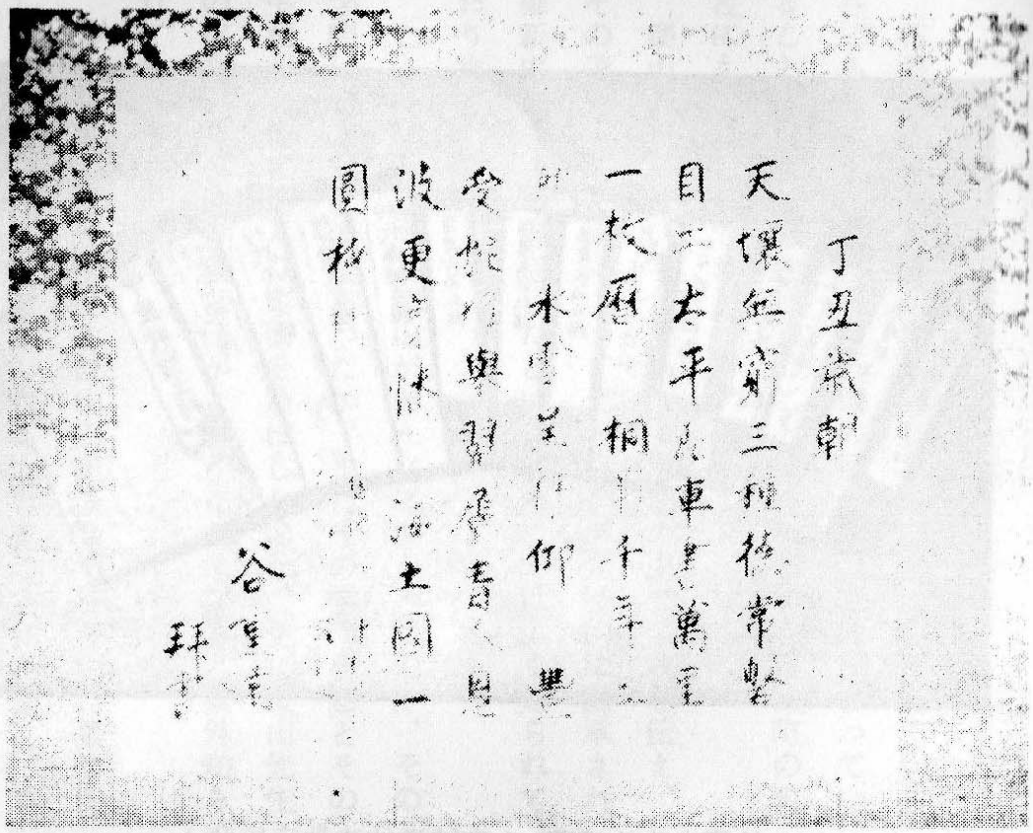
余の中の栄枯盛衰はいつも、どこにでもあり、はかないもので一鍋の黍雑炊を炊くようなわずかな時間の出来ごとであるから私は大昔から浩然と開けている天地のような広い心持ちでいよう。



谷秦山先生遺著　（古神道仙法教庁秘蔵）



谷秦山先生遺墨　（古神道仙教庁秘蔵）



丁丑歳朝

天壌ともに無窮なり三種（三種神器）の徳。
常盤（ときは）（いつまでも）に目出たし太平の春。
車書萬里（車同レ軌書同レ文。全國至る所まで統一されてゐること）一枚の暦（朝廷頒布の暦日本中に普及す）
桐と菊とは千年（無窮）の五所（皇室）の紋。
水雪は祥（しやう）（めでたさ）を呈（あらは）して豊受（外宮の神）を仰ぎ。
蛇蜂（だほう）は翼を擧げて青人（あをひと）（庶民）に属す（新春と共に生物が活動し万人に活動を促してゐる）
恩波更に慶す、幡多（はた）（土佐國の西のはて）の海。
土國一圓、梅柳新（あら）たなり（山川草木まで新春の気で一新した）。

旧臘（昨年の暮）、中村（幡多）に還したまひ（宇和島藩と所領を争ってゐた柏島を中村支藩へか へす裁定が下ったこと）、國民は打躍（ぺんやく）（手を打って よろこぶ）す。
末聯にて謹んで之を祝す。

谷　重遠（秦山）

拝書

丁丑（元禄十年三十五歳）の歳朝（元旦）

谷秦山頌徳之碑（クイミ谷）による

谷秦山（たにじんざん）　先生姓ハ大神諱ハ重遠通称ハ丹三郎秦山ト号ス。其ノ先大和ノ三輪ノ谷ニ出ツ。故ニ谷ヲ以テ氏トナス。資性聡敏少ウシテ皇都ニ遂ヒテ儒学ヲ修メ深ク洛閩（ビン）ノ学ニ通ス。後天文暦数ヲ修メ国史神典ヲ究ムルニ及ビ我ガ国体ノ萬邦ニ冠絶シ、神聖相伝ノ道厳（ゲン）トシテ存スルヲ知ル。乃チ神王儒従ノ学ヲ以テ後進ヲ導ク。藩主豊房公名シテ家臣教授ニ当ラシム。時ニ海内学術漸ク興リ倡者各其ノ説ヲ皇張スルアリト雖モ概ネ漢土ニ心酔シ、我ガ君臣ノ大義ヲ誤ルモノ少カラス。先生深ク之ヲ慨シ敢然トシテ天下ヲ麾（サンマネ）キテ之ヲ正ニ帰セシメントス。州内ノ学徒靡然トシテ之ニ趨ク。又当時国中ノ名社荒廃セルモノ多シ。先生之ヲ傷ミ土佐国式社考ヲ著ス。藩公之ヲ嘉シ有司ト共ニ之ヲ修メシメントス。公ノ館ヲ損ツルニ遇ヒテ果サス、宝永四年山田野ノ家ニ錮セラル。人其ノ故ヲ審ニセス、先生屏居十二年毫モ怨尤ノ色ナク道ヲ講シ天象ヲ窮メ其ノ楽ヲ改メス、日夜書ヲ著シ後生ヲ誨ヘ務メテ皇道ヲ宣揚ス、文辞渕博義理精到幽囚ノ裏ニアルモ其ノ学徳光被シテ障フヘカラズ。子孫後学能ク其ノ志業ヲ継ギ遂ニ一国ノ上下ニ感孚シ後年王政維新翼成ノ偉業トナル。先生享保三年六月晦日ヲ以テ卒ス。寿五十六。山田町北菜摘谷ニ葬ル。嗚呼先生南学四散シ名教委靡ノ際ニ当リ独力ヲ以テ教学ヲ復興シ、我ガ国体ノ精華ヲ明徴シ後学ヲシテ永ク其ノ嚮ク所ヲ誤ラサラシム。真ニ百世ノ師ト謂フベシ。先生逝キテ二百年。後人ノ景仰弥々加リ大正八年正五位ヲ贈ラル。本会茲ニ碑ヲ建テ以テ其ノ徳ヲ表ス。

昭和十年十二月

正二位勲一等　田中光顕題額

社団法人高知県教育会長従六位勲六等

中島和三撰

川谷広次書

裏面　地元有志ノ賛助ヲ受ケ

社団法人高知県教育会建之

はじめに

みなさんは、谷秦山（たに　じんざん）と云う人を知っていますか。学問が大好きでその精神と思想が明治維新の原動力となり、現代においても学徳を慕い、敬愛されて「学聖」と呼ばれる高知県、香美市の誇る偉人です。

これから、この人物についてお話をします。理解をしていただくために「なぜだろう、どうしてだろう」と、みなさんが考える疑問や質問に答える形式で話をすすめます。そのほうがわかりやすく、早く理解できると考えました。

文中、難しい言葉や文字が出てくる場面がありますが、できるだけ意味がわかるように努めています。なお、年号を示す数字は和暦の場合は何年、続く括弧（　）内は西暦年、※印は「注」の意で言葉の意味などを解説しています。また、敬称を略することをお詫びします。さらに、現代において少し不適切な言葉がありますが、秦山先生の生きた時代背景を語るものとして残しました。最後までしっかりと読んでいただくようにお願いします。

1　なぜ秦山先生のお墓が土佐山田町ぐいみ谷にあるのですか？

○谷秦山の誕生

谷秦山は江戸時代はじめの頃、寛文(かんぶん)3 年（1663）3 月 11 日、長岡郡岡豊八幡村の神官職・谷神兵衛重元（たにじんべえしげもと）の三男として生まれました。本姓は大神（おおみわ）、名前は重遠（しげとう）、通称丹三郎、秦山は号名です。

この年は土佐の偉人である野中兼山が 49 才で病没（死亡）した年でした。時代は徳川四代目将軍家綱の頃で、土佐藩主は山内三代目忠豊の時代でした。

谷家は代々神職（神社に仕える人）で、栄えた時期もありましたが、生まれた頃は貧困のどん底の時代でした。寛文 6 年（1666）4 才の時、高知城下に移り、幼年時代を過ごしました。

重遠 21 才、天和 3 年（1683）7 月、一家をあげ城北秦泉寺村へ移住し、秦山と号しました。秦山の号は秦泉寺村（じんぜんじむら）秦山（はたやま）を号にしたと云われています。

秦山 35 才、元禄 10 年（1697）4 月、弓術家土橋六兵衛の次女と結婚、秦山 38 才の時、元禄 13 年(1700）4 月 21 日、分家して現香美市土佐山田町秦山町三丁目へ移住、自邸を構え、56 才で死亡するまで 19 年間居住しました。　※邸跡は市指定史跡

秦山が山田へ移住した理由は、谷一族で親類の代官庄屋「山田の谷家」を頼って来たと云われています。秦山集の山田谷氏系譜は「後有り皆相続し山田に家す」と記していますが、山田代官庄屋の子三兄弟がそれぞれ立派であることを秦山は承知しており、山田の谷氏も親族秦山が高知で立派な学者として貧しいが頑張っていることを知り、互いに親近感をもっていたと想像できます。　※山田谷氏系譜　別表資料参照

谷秦山の波瀾万丈の人生は、誕生の日から始まり、死亡するまで続きました。先生の生涯は、この本の主題（メインテーマ）ですので、学問とその生き様を十分に学習して知識を深めてください。

※波瀾万丈　大きな波のうねりのように次々と変化が起こるさま

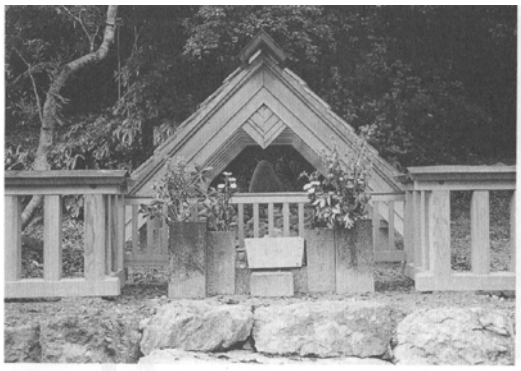
○谷秦山の没年

秦山は享保(きょうほう)3 年（1718）6 月 30 日死亡、秦山邸に近い植地区マエヤマの通称「ぐいみ谷」

に埋葬され、お墓が建てられたのは享保 6 年(1721) 7 月 2 日のことでした。

墓を立派にすることを禁じた谷家の家訓にならい、自然川原石に「谷丹三郎重遠墓」とだけ刻まれた質素で小さなお墓です。写真では少し立派に見えますが、これは後世の秦山先生を慕う人々によって整備されたものです。

ぐいみ谷周辺は山田野地と呼ばれていた頃から地区民の墓所山であり、現在も多くの墓群があり、お墓参りをする人が絶えません。　　※秦山の墓所は国指定史跡となっています。



秦山の墓所

2　秦山先生のお墓が合格祈願の日の丸の旗にうまっているのはなぜですか？

秦山先生のお墓のそばには、祈願（願い事）やお礼に来た人々が持ってきた日の丸の小旗を納める所が作られています。そこは溢れるほどの旗でいっぱいです。それだけ、秦山先生の学徳を慕い、尊敬する人が多いと云うことでしょう。

知って欲しいのは、捧げられている日の丸の旗のことではありません。秦山先生の学問や人柄については順を追って説明していきますので読んでいただければ解ると思います。

○頭の良さ

先生は幼少の頃から、頭が良く、「神童」と呼ばれた頭脳の持ち主であり、言動にすばらしいひらめきがある子であったなどの話が多く語られています。
8 才の頃、小学や四書を読み学びました。

▼小学とは　中国の書で六巻ある。古典や古人の言行を引用した学生向け儒教倫理の入門書で、土佐では、江戸時代に野中兼山・小倉三省が校訂、句読点等をつけ、版本にして土佐藩の藩校の教科書とした。

▼四書とは　大学・中庸・論語・孟子をいい、朱子学教育の基本的なテキストとされている。
大学－1 巻。何のために学問をするかという大目標を述べたもの。
中庸－2 巻。人間の本性とは何かを論じた人生論の書。
論語－20 編。孔子と門人、門人たち同士の対話をまとめた書。
孟子＝14 編。孟子が諸侯や門人、来訪者たちと交わした論議や対話を、門人たちが整理した書。

こうした書本に学び、刺激されながら少年時代を過ごして成長したことが、大人になって、秦山学大成の土台（基石）になったものと思います。　　※儒教・朱子学　後ほど説明します

○父母の教えと願い

父重元は「貧しくても、心がしっかりしておれば、人間は苦しさの中でこそ立派な人格は育つ」という信念を持っており、父母の慈愛の中で幼少の頃から何事にもくじけずに生き抜く力を身につけていきました。谷家の家訓と教えは

1．明快な決断力。
2．わき目もふらず邁進する。
3．不義不正には憤り正義に生きる。

さらに、父は古神道を崇敬しており、「君（天皇）に仕えることが、大和民族の生きる道である。(尊王愛国)」と子丹三郎（秦山）に教え、これらの幼児教育によって培われたものを守り、健全な精神で、学問に熱中しながら成長していきました。

子供に期待する父母の願いは、昔も今も変わりませんが、父重元は「国体の尊さを幼児期に教えておこう」と思い、保元物語・平治物語・平家物語・太平記・吾妻鏡などやさしい古典を与え、また、朗読して聞かせたりもしました。そして、南学を教えようとしましたが、その学問は土佐において空白の時代であり、仕方なく、高知城西門隣にあった常通寺で法華経を学ばせました。丹三郎（秦山）はこれを二ケ月足らずで暗唱したのに驚いた父は、ただものではないと思っていたに違いありません。※国体　ここでは、天皇を崇敬し、天皇を中心とした国の形のこと

〇合格祈願等、秦山への思い

秦山は幼少の頃から、神童と云われ、父を含む周囲の奨めや自らも学問好きだったこともあり、普通の大人も読まないような良い本、難しい本を沢山読んで学習を深めました。そして、家は貧乏で苦しくても、その才能を生かし、努力を積み重ねて、神道学、儒学、天文学を軸とする国体学を創設し、後世の日本人に一つの道を開こうとして自分の全てを捧げて行動しました。その姿に尊敬と共感を持つ人々が多くいます。

受験生や就職希望の若者や父母らは、秦山の学徳や勉学、その生き様にあやかり、願いがかなえられることを切望しています。そのため、祈願に訪れています。秦山墓所がもっと広く世間に知られ、大勢の人々が訪れてくれるようになれば良いと思います。みなさんはどう思いますか。

〇墓所の日の丸の旗について

このことについて少しお話しておきます。

秦山は皇道精神を主とする神道こそ、日本人の本質だと悟ります。神皇正統記を読み自らの思想に誤りがないと確信しました。

さらに日本国開国史を深く突き詰めて明らかにするに及んで、天文と人生の関わり、つまり、倫理学（りんりがく：人が守るべき道についての研究）に自然科学を取り入れたことに秦山学の特色があります。

日の丸の旗は「国旗」です。天皇は現憲法では国民の象徴（シンボル）とされています。しかし、明治維新から昭和 20 年（1945）の太平洋戦争終戦までは、富国強兵の名のもとに外国との戦争に明け暮れた時代であり、谷秦山の皇道思想が皇国史観を生んで政治家や軍部などの過激な帝国主義、軍国主義を唱える人たちにもてはやされました。

※富国強兵　明治維新から全ての面で外国に遅れていた日本を外国に負けないよう追いつけ、追い越せとすすめた国を富ませ、兵を強くして国力を増す政策。

※皇国史観　日本の歴史を、万世一系の天皇を中心とする国体の発展・展開ととらえる歴史観。日中戦争・

第二次大戦期に支配的となった。

※帝国主義　他国を侵略して自国の領土・勢力を広げようとするやりかた。

先の大戦では一般の人たちも国家総動員法により軍役に召集され、泥沼の悲惨な戦渦に巻き込まれました。お国のためにと神社に戦勝祈願をして歓呼の声とともに打ち振る日の丸の旗に見送られて戦地へ行き、帰らぬ人も多勢出ました。日の丸の旗には、家族、友人らの励ましの寄せ書きや自分の決意を書き込んでいました。みなさんの親族のなかには戦死・戦傷した人や空襲（空爆）により犠牲となった人もいると思います。お父さんやお母さん、親類の人たちに聞いてみてください。

秦山の皇道精神は決して戦争のための学問ではありません。人々を不幸にするようなものでもありません。

秦山の墓所に日の丸の旗があるのは、このようなことの名残りと考えています。新憲法が発布され、民主国家に生まれ変わった現代において、学徳を慕い、敬い、多くの学生、若者らが国旗である日の丸の小旗を掲げ、学力向上や希望校入学、就職の願いを書き込み、よろこびのお礼参りに集う姿は、人間の純粋な心の行為であると見るべきでしょう。

3　秦山先生は若い時に京都へ学問修業に出たそうですが何を誰に学んだのですか？

○勉学の道

常通寺で学ぶ仏学に何かしら物足りなさを感じだした彼は、土佐において野中兼山らが進めた朱子学にあこがれ、中央で、その研究を深めたいと思うようになりました。

しかし､今の家の状態では望むことは難しいと迷い悩んでいました｡父重元は｢心配するな、立派な学者となり、国のために尽くせ」と励まし、一族から祝儀や資金をかき集め、延宝 7 年（1679)、京都の山崎闇斎（あんさい）の門に入りました。当時、山崎闇斎は高齢で、高弟である浅見絅斎（けいさい）に付いて学ぶことが多かったようです。

この時、丹三郎（秦山）17 才、大きな夢と希望に燃えた青年となっていました。「人一たび能くすれば、己は百たびす。人十たび能くすれば、己は千たびす」中庸の言葉通り勉学の鬼となり学びに学ぶのです。

※朱子学　中国「南宋時代」の儒者、朱熹（しゅき）（1130～1200）が大成した学説。学問究理と道徳実践とによって自己完成すべきことを説いた儒教の新しいかたち。日本では朱子学と呼ぶ。朱子とは朱熹の尊称。

※中庸（ちゅうよう）の言葉の意　人が一度でできたことであっても、能力のない自分であれば、百回繰り返せばできるようになる。人が十回やってきたことであっても、自分は千回やればできるようになる。

※儒教（じゅきょう）　中国の孔子の教え。すなわち五常の教え（仁・義・礼・智・信)、五倫の教え（父子・君臣・夫婦・長幼・朋友）から成る。目上を敬い、親を敬いなさい、学問をして、人物を磨きなさい、常に自分を抑えて生きなさいといった、取りようによっては為政者（時の支配者）に都合の良い教えともなる。東アジアは儒教圏といえる。現在でもこのような考え方は残っている。

南学再興の心に燃えるこの青年に特別心を寄せてくれた山崎闇斎（あんさい）の「神道は王道である」という学説にぞっこんほれ込んで、全力でこの道の研究を深めていきました。

しかしながら、学資の欠乏と眼病を患い、学半ばにして 18 才の春帰国のやむなきに至り、「身は土佐に帰るとも、心は日本の空を見よ。南学の大成を願う」と師である山崎先生になぐさめられ「南学復興こそあるのみ」と古事記、日本書紀等古典の研究に邁進すると共に、好学の青年を集め、学問を分かち合い、自分の学説を伝授する熱意のある日々を送っていました。

一方、土佐藩では、南学四散の名誉回復のため、彼を召し抱えようとしましたが、学究未熟として招きには応じませんでした。

その頃の山崎闇斎(あんさい)は、儒学者ではあるが、早くから神道を学び、儒学から神道学へ転向し、神道学者として垂加神道を説いていました。

丹三郎（秦山）は彼の学説を支持し、全幅の信頼を寄せていましたが、肝心の他の高弟たちは、これを喜ばずに師の元を去っていく状態でした。丹三郎（秦山）は、闇斎(あんさい)の説が自分の所説と最も合致したため、帰高しても、文通により闇斎(あんさい)の学を深く学びとりました。山崎闇斎と野中兼山は共に南村梅軒（なんそんばいけん）の学統にある谷時中（たにじちゅう）の兄弟弟子でした。

※垂加神道（すいか　しんとう）　垂加は山崎闇斎(あんさい)の号。儒教特に朱子学や吉田神道・伊勢神道などを集大成した独自の思想。天照大神（あまてらすおおみのかみ）と猿田彦神（さるたひこのかみ）の教説のある日本書紀を重視し、儒教的な敬（つつしみ）の徳や天と人の融合を説く。大義明文を本旨としたが、朱子学の影響を受け、敬神の念と、尊王愛国の精神が一貫し皇統護持を核心としている。その学風は世に影響し、明治維新の運動にも大きく寄与した。

※南学四散　通説では南村梅軒により土佐にもたらされた朱子学のひとつとされ、その弟子には、弘岡城主吉良宣経(きらのぶつね) 及びその従弟の宣義(のぶよし) がいた。徳川の初期には 仏門より儒学に帰した谷時中があり、その門下には、野中兼山（けんざん)、小倉三省、山崎闇斎（あんさい）等がいる。土佐藩政確立期、名宰相 野中兼山は、「南学」を藩政の指導理念とし、数々の実績を重ねたが、晩年に失脚する。この失脚により、土佐から学者が国外へ四散、南学は空白の三十年を迎える。「南学一空」の時代とも云う。

20 才の秋、師と仰いだ闇斎(あんさい)を亡くしました。彼の悲しみは一人深く、21 才の時、静かな高知の秦泉寺村に移り、秦山と号して日本学完成のため研究を続けていましたが、闇斎亡き後は儒学、神道の研究を進める上で、独学では不便なところもあり、浅見絅斎(けいさい)と交流していました。

しかし、秦山の学風は闇斎・絅斎を継承するものでしたが、絅斎とは異なり、徹底した日本主義を主張、儒者流の中国崇拝及び儒教の普遍主義を厳しく批判するところに特徴がありました。

○神道の道

研究が進み、思考が深まるにつれて、彼の思想にも変化が見えてきました。それは中華思想の儒学より、皇道精神を主とする神道こそ、日本人の本質だと悟り、八年間師事した闇斎門下三傑の一人あの絅斎に自分の考えが理解されず、論争の末、元禄 4 年（1691)、交際を絶つことになります。秦山 29 才の時でした。

神皇正統記を読んだ秦山は、思想に誤りがないと確信して、塾を開き門弟たちに情熱をもって講義を続けました。秦山の学問は「谷門派（こくもんは)」と呼ばれ、息吹のかかった優秀な門下生が多く育っていきました。

門弟指導のかたわら自分の学問は休まず、日本国開国史を深く究めるに及んで、天文と人生の関わりの密さを感じ、32 才で江戸の天文暦学学者渋川春海（しぶかわはるみ又はしゅんかい）に師事するようにもなりました。

渋川春海は山崎闇斎の門下生で、天文暦学には中国だけではなく、日本古来からの学問を究理することによって暦学が生まれると云う説に秦山は大いに共鳴しました。倫理学に自然科学を取り入れた秦山学の特色は異彩と云えます。　※究理　物事の道理をきめること。

4　秦山先生の学問はどのようなものでしたか？また、先生は土佐南学を継承発展させたそうですが、それはどういうことですか？

○秦山の学問と著作

南学発祥の地碑
高知市弘岡中薬師堂付近

儒学の土佐への流れ

まず、儒学が土佐に移入された流れを話しておきます。

土佐の朱子学を「南学」または「土佐南学」と云います。これは朱子学（孔子の儒学を基本にし、11 世紀に朱子がそれを体系化した学問）の単なる解釈学ではなく、義理名分と実践を重んじたものでした。

この南学は室町時代末期に儒者・南村梅軒が土佐で弘岡城主・吉良宜経を知り、（吉良物語）、朱子学を講じたことを始まりとするのが通説となっています。近年の歴史学ではその存在が疑問視されていますが、梅軒が講義した講堂跡と推測される高知市弘岡中薬師堂付近に「南学発祥の地」の石碑が建っています。

南村梅軒の後、朱子学は、宗安寺・吸江寺・雪渓寺の三人の僧（如渕・忍性・天質いずれも臨済宗の禅僧）などに伝えられました。彼らは当時の土佐の支配者長宗我部氏の家臣でありましたが、いろいろな争いごとに巻き込まれ迫害を受けました。

ただ、天質に学んだ「谷時中」（土佐南学の祖といわれる）が江戸時代初期に南学の学風を固めました。この南学を谷時中の門人「野中兼山」・「小倉三省」・「山崎闇斎」らが「海南朱子学」として盛んにしましたが、野中兼山の失脚後、藩の方針の変更により、迫害を受けた学者が国外へ四散途絶することになりました。この南学四散は土佐の教学に危機をもたらし、藩もこれを放置できず南学を異とする「緒方宗哲」を京都から招いて学問の再興と奨励を図りましたが、孔子・孟子の原典のみを重要視する学問に対し「陽明学」を伴い実践を重視する南学にはこの学問は相容れませんでした。（ただし、彼の編纂した「土佐州郡誌」は土佐藩史や市町村史の研究に欠かせない資料として評価されています。）

※解釈学　意味・内容をときあかして理解する学問。

※義理名分　儒教に由来する考え方で、本来は臣下として守るべき 道義や節度、出処進退などのあり方を指したが、時代によりとらえかたが転じている。

※陽明学　中国の明の時代に起こった「知行一致」の教え。

大成した南学

師であった山崎闇斎からも「南学の大成を願う」と励ましの言葉をいただき、自らも「南学の復興」を誓った秦山の努力は報いられました。南学の復興は秦山の特筆すべき功績です。そこには不運を天命とし、弟子たちの励ましに支えられながら生涯にわたり学究にとりくんだ秦山の大きな成果でした。　※南学　海南学とも云う

1　神道学・その究明

当時の一般学術としての儒学を抜け出て、日本学（国学）の領域まで研究し、うち立てた神道学は 22 才～23 才の頃から晩年に至るまでの研究のたまもので、さん然と光り輝いている。それは従来の朱子学の中国文化崇拝の普遍主義を克服し、日本独自の文化を重んじる国体論を唱えるに至ったものである。

南学四散後、長い空白時代、あらゆる弾圧にも屈せず再興への努力を続け、体系づけ、実りあるもの、深い道理を探求した学問であり、秦山が最も情熱を燃やしたものである。

ア　神祇史における神社考－「土佐式社考」の著作

延喜式に記載のある土佐の 21 の神社についてまとめたもの。

イ　天皇道一本説

子としては考、臣としては忠、婦としては貞、天皇道は絶対であるとした。

ウ　臣子道における名分論

朱子学の解釈学にとどまらず、義理名分を重んじ、臣子の道をはっきり区別した。

2　儒学

神儒兼学の学。秦山の南学は仏を排した神儒一致。

3　天文暦学

神職家であった秦山にも、古代からの天文占法の陰陽道の学問が内に存在していたようだ。垂加神道を学ぶに及んで、神道を解明する必要が生じたものと思われる。

天文暦学においては数学的なものより観測を重んじ、圭表（けいひょう）・渾天儀（こんてんぎ）・百刻環・象限尺などを活用、毎晩天体観測に熱中した結果、初期の目的は達成された。

天文学研究のための上京願いも許可されなかった背景にはかって南学者をしいたげた余波が藩内に残っていたためであろうが、それを克服して測り記録した資料は、現代測量と大差ない正確度てある。師渋川春海とは文通で指導を受け、成果をあげている。

たとえば、高知城の位置が北緯 33 度半強と測定したのは、伊能忠敬に先んずる 114 年前で、秦山 32 才の時であった。緯度を正確に測定したのは、当時イギリス人と秦山が同時期であったのではないかと思われる。

土佐における天文暦学は秦山を抜きには語れない。これらは全て神道理念の上に立つもので、秦山の意とするものが成功したと云える。弟子には、川谷貞六、孫弟子に片岡直次郎がいる。

4　秦山の著作　　※詳細は別表参照。

著書に

- 神代巻塩土伝(じんだいかんしおつちでん)
- 中臣祓塩土伝(なかとみのはらいしおつちでん)
- 新蘆面命(しんろめんめい)（1704 年成立）
- 元亭釈書抄（げんこうしゃくしょしょう）
- 保建大記打聞(ほけんたいきうちぎき)
- 俗説贅弁（ぞくせつぜいべん）
- 朝倉神社弁
- 秦山集（1728 年）など、ほか多数。

5　秦山先生の天文暦学について詳しく教えてください。

岡村啓一郎氏の論考「谷秦山の天文暦学」を参考にさせていただきながら説明します。

○渋川春海と秦山

1　春海との出合い

秦山の天文暦学の師は渋川春海(寛永 16 年：1639～正徳 5 年：1715）である。秦山 17 才の時、京へ上り山崎闇斎に入門、垂加神道と儒学を学んだ際、同門に春海がいたのである。

ちょうど､延宝 8 年(1680)のことでこの年世紀の大彗星とされるキルヒ彗星が出現し、京都に於いて師弟等共に集いこの彗星を眺めつつ天の道、人の道を語り合ったといわれる。その後、秦山は自己の神道理念達成のため天文暦学の研究が不可欠であると感じ、また、師闇斎の奨めもあって春海の門を叩くことになった。

2　渋川春海について

春海は京都に生まれ、14 才で幕府の碁所（ごどころ：囲碁の道場）に勤める父に連れられて江戸に上り将軍家綱にお目にかかった。以後、京都に居り秋冬は江戸に出て碁所に勤め、毎年京と江戸を往復した。父の死後、家職を継いで碁も七段となった。その間幕閣（ばっかく：幕府の偉い人）や朝廷の有力者の知遇を得た。（ちぐうをえた：人格・能力などを認められて、厚くもてなされること）

それらの人々のうち垂加神道の山崎闇斎、陰陽頭土御門泰福、保科正之、水戸光圀等がいる。強力なこの政治的バックの存在は以後、彼が貞亨改暦（じょうきょうかいれき）という大事業をなしとげ近世日本の天文暦学の開祖と称される開拓者となり、日本の科学史上最も重要な人物の一人とされているのである。

※貞亨改暦とは　春海が作成した新暦で、貞享 2 (1685) 年から 70 年間使われた。当時の日本は飛鳥時代から全部朝鮮･中国から輸入された暦が使われていたが､日月食の推算に大きな誤りを生じ、予報がはずれて改暦が問題になっていた。春海の 3 度目の上奏により新暦貞亨暦が採用された。後に 1～2 時間ほどの季節の狂いが認められ、宝暦 4 (1754) 年に宝暦暦に改暦された。

春海の暦学上の足跡は大きく、それまでの朝鮮・中国から直輸入の暦であったのを、中国と日本の経度差をとり入れた日本人による日本の暦として、また、消長法（一年の長さは一定でなく変化するの説）を取り入れ新しい試みを盛った貞亨暦は、日本で初めてつくられた暦という意味で画期的なものである。さらに春海は天文観測機器、技術の開拓や、特筆すべきは、当時の観測用に作られた星図は全部中国のものが使われていたのであるが、その不備を補い、春海独自の恒星観測から在来の中国選定の 300 座 1456 星に自らの選定による 61 座 305 星を加えて 361 座 1771 星の入った新しい日本流の星図、天球儀をつくったのである。星の照合というものは非常に忍耐のいる難作業である。これに心血を注いだ春海の科学的精神は素晴らしいものがあった。春海という人は碁・暦学・神道を通じ加えて大変博学であり、人柄は温厚で素朴な感の持ち主でもあった。　※星座と星数は諸説あり。

秦山が元禄 7 年（1694）に書をもって春海に入門してからずっと天文・神道の両面で、通信教育の形で丁寧な教えを受けたことは師弟の愛情に満ちた教育として知られている

が、その仕上げの形・現代のスクーリングの如く、秦山は宝永元年(1704）3 月 7 日待望の江戸に到着、その翌日に駿河台の春海宅を訪ね、春海父子に対面し約 1 ケ月江戸に居て師から直接の教えを受けたのである。その時の状況を「新芦面命（しんろめんめい)」という日記に書き残している。

※　新芦とは春海の号、面命とは丁寧に教えること。

「駿河台へ参、助左衛門殿御父子へ御目に掛かり年来の御礼共申上候、助左衛門御事六十有余、やせたる御老人なる程質なる様体文字一つ御存じ無き人の様に相見へ候、あの人が助左衛門殿に而、年来大切なる事共仰せ聞けられ候哉と驚くばかりに候、図書殿はきれいなるわかき人、是を以てかざりなく生まれてままの御人なり、吸物など出、ゆるゆる御意を得申候・・・」

春海の人となりを見たままに述べている。秦山の師に対する飾りない感想も、すがすがしいもので好感を呼ぶ表現である。秦山の研究はこの遊学で完成し、この後、土佐において子弟の教育・天体観測・南学の確立にと活躍したのである。

〇秦山の学んだ天文暦学について

近世の天文暦学には四つの派がある。西村遠里「天文指要」にその解説がある。

1者　天の二十八宿を州々に配当し、某の星宿は某の州を主とり、某の州は某の宿に属すとして、此を分野と名付け、客星妖星等出現し或いは天変ある時の分野を見て其の主属の州々或いは凶、或いは吉とこれを占うなり、これ和漢とも衆人の天文学と覚いるところにしてこれを、占候の天学と云う。

1者　天体地体及び七曜、風雨霜・・略・・天経惑問、物理小識等に議論するところの如し、これを理学の天学と云う。

1者　日晷（ひかげ）を測量し気候を定め、太陽の盈縮（えいしゅく：動きが速くなったり遅くなったりすること)、遅疾（ちしつ）を推歩（すいほ：天体の運動をはかること）し・・・五星の出没を測量する等の諸術に詳しく・・・郭守敬、春海の名のあるところなりこれを暦象家と云、西川如見所謂、形気の天学なるものなり。　※郭守敬（がくしゅけい：中国の天文暦学者）

1者　以性命道徳の理を尋ね数の玄々（げんげん：きわめて奥深いこと）を探り陰陽の理に通じ近はこれを身にとり人道を失はざるこれを命理の天学と云う。

この文中「占候の天学」「命理の天学」の二者はどちらかといえば占星術的であり、暦の中の暦註や迷信等に通じるものである。それに対し「理学の天学」「形気の天学」の二者は自然科学的内容のものだと思われる。

春海や秦山はこれらのうち、どちらかと云えば後者に重点を置きながら全分野にわたり研究している。しかし、占候の天学・命理の天学の面でも数々の記録を残しており、占星術的内容になかなか熱心であったように見える。その一例として、宝永元年江戸で春海との出合いの際に、二人が真面目に話し合っている内容の中に「金星が房心（さそり座）を守りまたはなれ、又房心を犯したので、いかさま想い御慎みになっていられると思う」とか「近年火星が房心を過ぎたので火災等多くあるので注意しないといけない」「しかし、火災は起きても大地震は起きないと思う」と云うような受け答えである。

これから見ると二人共占星術の信者であり、当代第一級の科学者でもあったわけである。時代が時代である故致し方がないと云うしかない。秦山等より少し時代が下がり元禄 6 年（1693）生まれの暦学者西川正休となると「分野の説は今代の天文家は強く是を信用する者はいない。故に其の詳なることを知らず」と云っている。筆者は秦山にしろ春海にしろ進取の姿勢の強い

人であったので少なからずこのような面への疑問は抱いていたと思うのである。そのための資料情報の不足が原因だと考えるのである。幕府のとった厳しい禁書政策のもたらした弊害であろう。正休の時代にはこの禁書もやや緩和し西洋天文学の新知識が流入しているのである。有名なニュートンでさえ占星術には大変熱心だったと云われているし、現代かく云う吾々も昔の人を笑ってばかりいられぬことをやっている。

1　観象授時の天文暦学（形気の天学）について

秦山は春海のつくった貞享暦によって暦法を伝承した。これは中国の授時暦を基礎にしてできたもので観象授時の天文暦学の範疇に入るものである。これ等昔の暦法は主に漢文で解説されている。そして用いる用語も数学も式も現代の様式ではないので読んでみても、まるで漢字の判じ物の感があり非常に理解し難い。戦前発行の西内雅著「秦山学」の中に適当な解説文があるのでこれを参考として略説してみよう。

※判じ物　クイズ、パズルなどのような謎解きのこと

貞享暦は「地は弾丸の如くにして天の最中に適し永静不動」（天学指要）として天動説に立って太陽・月の運行を明らかにし、月の満ち欠けを基礎として大陰太陽暦を造ることを眼目とした。そして特徴として、日本の経緯度に立ち学問を構成したものである。このためには実験観測と数学計算を必要とした。秦山は数学よりも観測に重点をおき、

蓋天学之講、務在二測験一、古人日夜闚闞猶恐二其不一レ密　（秦山集）

（けだし　てんがくのこう　つとめはかりしらべるにあり　こじんにちやきかんなおそのみつならずをおそれる）＝おもうに天学を解き明かすには、測り調べることにある。昔の人は日夜うかがい見て、なお、そのすきまがうまらないことにおそれ入っている。

と云って多くの観測器を使って日夜観測に励んだのである。測器は圭表・渾天儀・百刻環・象限儀等いろいろな物が使われこれ等により観測データを求めその数値を基として毎年の暦を造るのである。その内容を大別し二つに分け得る。それは、

二十四気世人方便推レ之、亦可レ通、至二合朔定望一、雖二妙達人一、恐不レ能レ推之（秦山集）

（にじゅうしきせじんほうべんこれをおしはかる　またとうすべし　ごうさくていぼうにいたる　みょうたつじんといえども　おそれながらこれをおしはかるをあたわず）

一太陽年を二十四節気にわけるような計算つまり１ケ月を基準ときめて冬至を起点として比較的簡単にできる内容のものと、太陽・月の運行を明確にし日月食の予報をしたり惑星の運動を推定して七曜暦を作成する計算とある。前者は四則計算でやれるが後者は補問法・誤差論・級数・階差法・平球両三角法等の考え方が入るので「妙達人」といえども困難だということになる。当時階差法は招差法と呼ばれ、太陽や月の見かけの運動から正しい位置を求める計算法であって秦山はこれに大体通じていたが、計算法の原理は理解していなかったようである。それに球面三角法の考えに立つ座標の変換つまり太陽の黄道上の位置を赤道座標に直すような内容の円理術については壬癸録に、

本術未レ詳、従頭徹尾施二改算一、今未レ能也、年来百万考察而未レ得二其法一　毎為レ恨焉

（本術はまだよくわからない。徹底的に計算をしてもいまだにしっくりこない。年来幾ら考え調べてもその方法を得ていない。いつも恨み言だ。）

師弟共にその原理が理解できないため、中国の授時暦に出ている数表をそのまま用いたようである。また当時の円周率は３であったと云われているから正しい理論を用いたとしても余り正確とは云えなかった。このように秦山は計算というより主力を天体観測に集中し日夜病弱な身体に鞭うって努力したのである。そして天文方春海の代理を務められるま

で暦学に精通したのである。

そして教わった内容、観測結果等を克明に記録して残した。中でも壬癸録（にんきろく又はしんきろく　全九巻）は天文暦学に関して、春海の研究、貞享暦の研究、延宝から享保に至る時代の数少ない実地観測の資料として現在重要視されているものである。

2　貞享暦の計算の一例（参考）

判じ物のような昔の暦術の計算の一部をここで取り上げて見よう。太陽の位置を決めるための数表として「太陽立成」というものがある。これを作るため招差術を使ったとある。この計算の仕方について西村遠里（享保２年：1717～天明７年：1787）という人が「貞享解」の中で次のように述べている。

之を求め春海の術を察するに極差二度五六五〇四を置きて、
八十九限を以て之を除き、二百三十一分〇六八弱を得、以て定差を減じ、
余り二百〇九十三秒二を得、八十九限を以て之を除き、二分三十秒二六強を得、
予め立差三十四微として、八十九限を以て之を乗じ、三十〇秒二六を得、
以て寄位内を減じ、余り平差二分を為す也、縮初盈末之を倣う　（編纂委員読み下し）

上記の計算を今の式に改めると次のように表わすことができる。

定差＝a、平差＝b、立差＝c、極差＝Dとする。

$(a-D\div 89)\div 89-c\times 89=b$ となる。

$\left(a-\frac{D}{89}\right)\times\frac{1}{89}-c\times 89=b$ 両辺に89^2をかけて整理して

$89a-D-89^3c=89^2b$

$D=89a-89^2b-89^3c$

このような式と観測値、仮定値等を用いて算数的に立成の表を作成したのであろう。考えてみるに随分桁数の多い計算をやっているが当時の機器観測値がそれにふさわしい精度があったか考え、また仮に円周率を必要とするときに３と置いたのでは折角の詳しい計算も台無しになる。計算の無駄が多かったのではないかと思われる。

※貞享暦の内容についての研究には西内雅著「貞享暦の研究」佐藤政次著「暦学史大全」等がある。

〇秦山の天体観測

先にも述べたが秦山は実地観測を重視し、七政（日月惑星）の運行のようすを観測すると共に恒星と星座、彗星、流星等の天変異変等にも注意して記録を残した。

彗星につき三個、星食につき九個、その他日月食について多数あり具体的には後で述べる。

1　「書籍講出米算用帳」について

※この項は後述「秦山に咲いた花」に掲載しているので割愛させていただく。

2　秦山が使用した観測機械について

ア．渾天儀（こんてんぎ）

渾とは全の意味で全天儀と呼んでも良い。原理的には、現代の赤道儀と同じものである。

秦山は初め木製のものを作って秦泉寺の自宅で使ったようであるが元禄８年（1695）

に銅製のものを購入し組み立てた。出米算用帳に次の如く記録されている。

一、銅渾天儀　　名越浄味鋳作

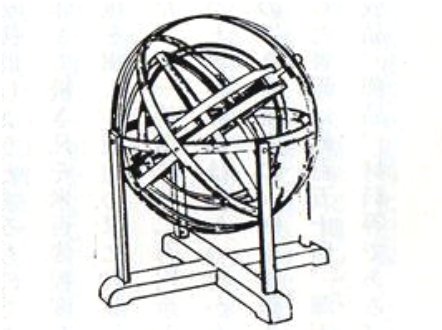
金三両	代物也
同弐歩	運賃也
銀四匁四歩	銘刻印入用
同六匁	鉄かなく
同弐拾一匁九歩	礎柱大工役共

しめて　弐百四拾弐匁三分

※銀十五匁が金一歩、銀六十匁が金四歩で金一両である。

山内神社　渾天儀

構造は如何なる物かと云えば図の如く固定された地平環・子午環・赤道環を台上に、土地の緯度・方位を勘案して設置され、その内部に回転軸を地軸に平行させた四遊儀が入って居り、これは赤道環・子午環・黄道環よりなる。


谷秦山製作と伝えられる渾天儀の図

全体の直径は三尺程（約 100 ㎝）で師春海作の物と同じであったろう。現在秦山のものは残っていないが、弟子の川谷貞六の教材用とみられる直径 30 糎（㎝）程の渾天儀が山内神社に保存されている。これを見れば大きさこそ異なるが構造はほぼ理解できる。

壬癸録には渾天儀についての記事が数個所あるが、その中の一つを記すると、

渾天儀天経も亦単環を宜しとなす、只玉衡（星をのぞきみる筒、上下左右可動）北辰に当たるを中と為し、必ずしも双環をなさざる也。天経環南北を結ばず北極出地（緯度）に従いて上下すべきを宜となす、まさに跌柱を中に立て天経環を受くべし。古人皆天経を固結す故に一処に於いて宜しく他方に於いて用うべからず、便に非ざる也。凡そ渾天儀環多ければ天を隔つ甚だ窺測に不便也、此れかって試みるの実也。蔡九峯（中国の学者）呉臨川（同じ）元史（同じ）等の説は恐らくは詳細にすぐるのみ、重遠かって・・・（中略）・・・地に因て極を定め枢（北極星）をみて方を正す。律令古に在いずくんぞ毫毛（ごうもう：ごくわずか）をたがわん維予（骨組み？）を鋳造し具に本相を備う、秦山の郊、ここに測り、ここに蔵む。千載人有らばこの銘章を見よ。　（筆者　読み下し）

これで察するにこの機械に対する秦山の考え方は極軸を固定化すると、土地を移動した時に緯度変化で使えないこと、やたらに装備を多く付することは返って邪魔になって不便をきたすと云う二点にある。師春海も同意見であり、まさに正鵠を射たものと云えよう。

※正鵠（せいこく）を射る　物事の要点や急所をつくこと

渾天儀による観測内容は恒星・星宿・日月惑星の位置・天体の出没方位、時刻毎の高度・南中時刻・星の相互の離角測定等であり広範囲に利用したのであろう。現代においても、アマチュア観測家は自分の持つ機器をこよなく愛し自分流に改造し楽しむのであるが、秦山も自庭に堂々とした渾天儀を設置しそれを駆使して星空を追うことで高い誇りと満足感を抱いたのではなかろうか。千載人有らばこの銘章を見よの境地である。

イ．天球儀（てんきゅうぎ）

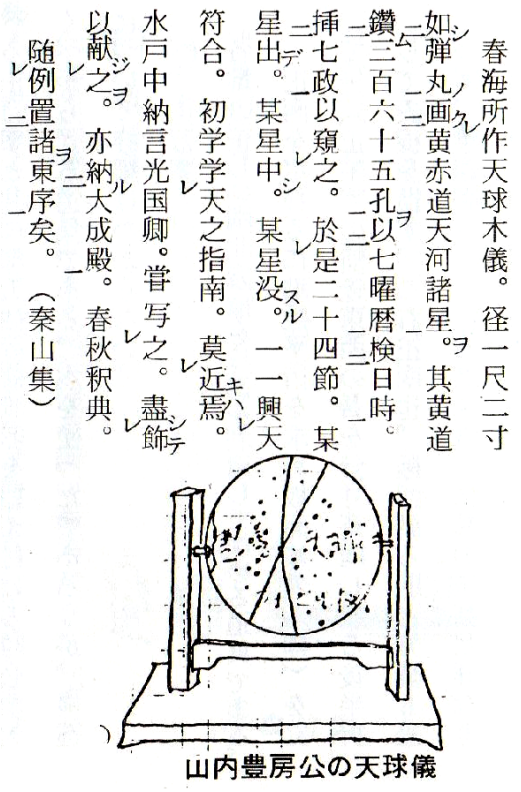
現代使用されている天球儀と基本はおなじである。本邦に於いてこの時代までのものは恒星名・星座共に中国制定のものをそのまま使っていた。秦山の天球儀は師春海原案であろうから、春海制定の 61 座 305 星を加えた日本独自のものである。出米算用帳に次のように記されている。

一、旧天球　　代金一両一歩
銅かなぐ台家有

一、新天球
金弐歩　　代物也
同弐歩　　かなぐ代
しめて六拾匁
台は深尾数馬殿より被レ下家有

この二つの天球儀につき、旧天球は製品を購入しているようだが新天球は弐歩という価格からみて完成品では無くて組み立て仕上げ等を自分でやったのではあるまいか。

これは春海天球儀の構造、使用目的等について述べたものである。春海作のものは全国にいくつか残っているが秦山作については不明である。かって山内宝物館か高知城にあったのを見たと云う人もあるが現在行方が判らない。戦前発行の中島鹿吉著「南学読本」の中に山内豊房公の天球儀という小さい写真が掲載されている。これがそうだったのであろうか。谷家に伝わる春海作で小川清彦氏による詳しい調査報告がある。


春海所作天球木儀。径一尺二寸
如レ弾丸画二黄赤道天河諸星一。其黄道
鑽二三百六十五孔一以レ七曜暦検二日時一。
挿二七政一以窺レ之。於是二十四節。某
星出レ。某星中レ。某星没レ。一一興レ天
符合。初学学レ天之指南。莫レ近レ焉。
水戸中納言光国卿。嘗写レ之。盡レ飾
以献レ之。亦納二大成殿一。春秋釈典。
随例置二諸東序一矣。（秦山集）

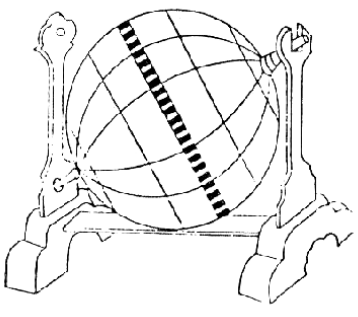
山内豊房公の天球儀

垂加神道の伝承（西内雅著）より
渋川春海作天球儀

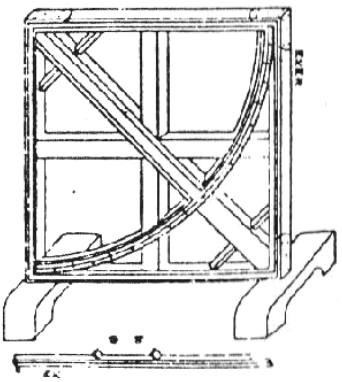
ウ．地球儀

出米算用帳の記録には

一、地球
銀拾三匁　　下地木代工役
同　三匁　　はりちん
金　弐歩　　筆代
同　弐歩　　銅かなぐ
同　壱歩　　台入目
しめて九拾壱匁


地球儀

エ．象限尺（しょうげんじゃく）



簡単に云うならば天体高度測定器となろうか、勿論、高度のみならず、星相互の角距離等も測定できる。当時は主に土地の緯度を観測した。

象限尺以窺北極出地之度。其制。一平円板刻周天度四判之。取其一分。形如扇。扇腹有九十一度有奇之刻扇紐施望筒。側立水準上。底昂望筒。以窺極星。乃知出地之度。　（壬癸録）

筆者は活字化された資料によったが、それには象銀尺と記されている。これは象限尺の誤記ではないかと思う。象限尺は大同小異で当時は大規模なものから卓上型の如きものまで、いろいろあり、呼称も垂劒（すいけん）・星尺・象限儀等ある。算用帳では次の通りで詳しくは不明。

一、大象限尺　　銅かなぐ平水溝共家有

一、小象限尺　　銅かなぐ

※四判して九十一度を刻んだとあるが昔は一周を三百六十五度としたからその四分の一は九十一度余となるのである。故に一度は今の一度より少し小さいことになる。

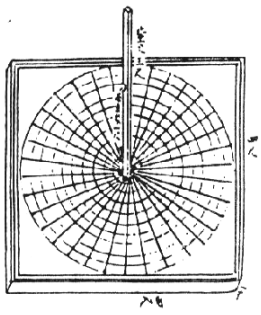
オ．平水溝

これは現代で云う水準器（レベル）であろう。次に述べる正方案と共に渾天儀等観測器を据え付ける時必要欠くべからざる道具である。水を使ったのであろうが、構造について詳細はわからない。

カ．正方案

各地の正しい南北方位を日影を利用して決める道具である。

正南を定むるに地之平行を求め板面に表（棒）を立て午（正午）の前後東西の晷（ひかげ）を分寸斉同し然る後半折して表根を指す、これ正南也。極西測る所と分豪も差わず、重遠謂う元史西方案を載るに其の法甚だ詳なりまさに細に之を考うるべし。（壬癸録）



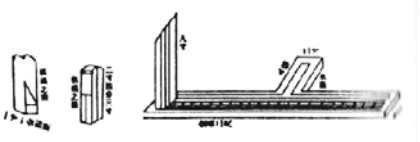
正方案（「授時解」より）

正午前後の日影を読みとり正しい南を決めると云うのであるが私共が実験的に行う日影の曲線を利用し決める方法とは少し違っているようにも思うが文章が簡単過ぎて何とも云い難い。貞享暦で採用していた西方案の略図を参考のため右に示す。

正しい方位の決定には天体を用いる方法や磁針によるものがあるが、これ等については観測の項で触れる。

キ．圭表儀（けいひょうぎ）

単に圭表という場合もある。太陽の南中時の影の長さを正確に測り主に冬至の日の正午を決定しようとする装置である。大型にすると精度が良くなるわけだから長さ高さ共に数メートルに作ったという。しかし、大型になると太陽の半影のため不鮮明な影をつくるので景符というピンホール応用の投影器も使った。秦山の使ったものがどの程度のものか確かでない。ちなみに孫弟子に当たる葉山村の片岡直次郎は長さ一丈のものを作ったと伝え



小表分図

られる。出来米算用帳にある晷表大小二基が圭表のことかも知れない。

八寸小表日景を測る京師

冬至の晷（ひかげ）一尺三寸。夏至一寸六分。江戸冬至。一尺三寸二分。

夏至一寸六分半。　（壬癸録）

※秦山自身が上の観測をしたとは考えにくい。

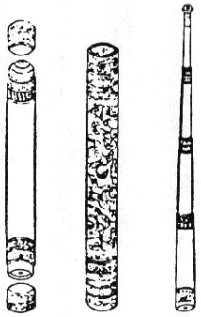
ク．望遠鏡

17 世紀後半になると屈折望遠鏡が海外から少しずつ輸入されるようになり、大名や大金持ち等の手に入るようになっていた。遠めがね・凹凸鏡とか呼ばれた。おそらく単レンズガリレオ式であっただろう。国内でも長崎にはレンズ作者も出て粗末だが国産品もできたと云う。しかし、初歩的なものでも価格は相当なものであった筈である。

18 世紀になり国友藤兵衛（安永 7 年：1778～天保 11 年：1840）の反射望遠鏡、岩橋善兵衛（宝暦 6 年：1756～文化 8 年：1811）麻田立達（明和 8 年：1771～文政 10 年：1827）等の屈折望遠鏡が登場した。参考までに記すると国友藤兵衛の反射式で約 80 両、岩橋や麻田の屈折で約 5 両であったと云われている。

さて、秦山は望遠鏡を持って居たのであろうか。次のような文章がある。

凹凸鏡之図

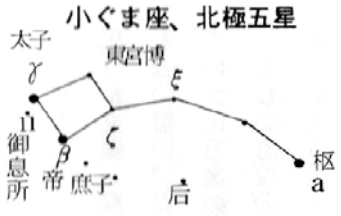


北極太子側。有一小星。以望鏡窺之可見。今名以御息所。此東宮時妻也（壬癸録）

北極太子はこぐま座のガンマ星（三等）・一小星はこぐま座 11 番星（五等）のことである。この二星は約四分の一度の間隔で隣り合う肉眼的二重星である。これを東宮の御所星とするのである。文中望遠を以ってこれを窺うとあるから、秦山は望遠鏡を所有していたと考えて間違いは無いだろう。

岩橋善兵衛作の屈折望遠鏡での記録では、「歳星＝（木星）」をみるに星面に三帯ありて三つ引きの紋の如し、鎮星を見るに一つの輪ありて本星を斜めにまとえり・・」と木星の特徴を良くとらえ見えている。秦山にこのような記録が全然無いと云うことは、余り良く見えるものではなかったと考えるべきだろうか。

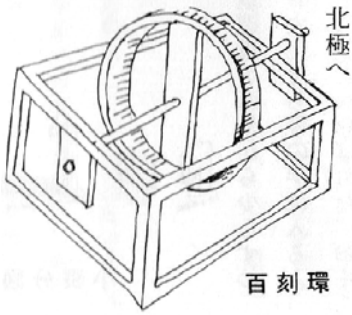
小ぐま座、北極五星



ケ．時計－百刻環

天体観測に時計は不可欠のものである。この時代は主として漏刻（水時計）を使っていた。機械時計も輸入されつつあったが、渋川春海は漏刻と共に自分が発明した「百刻環」と称する日時計様のものを使った。だから、秦山の出米算用帳に百刻環代銀一枚と記録がある。春海作の品を購入したのであろうか。

百刻環説。環径一尺三寸。博一寸。厚三分。背刻周天度。腹刻百刻。中心貫方木。使環可前却。以容之地平。地平即方趺。而有四脚。水準置別器於上耳。趺北上柱。受方木為北極。趺南垂柱受方木為南極。方木傾南北。而其低昂従各国之北極。円環側東西。而其浮沈北極へ視各時之日規。四時受日於環。自日出至日入。日巡于環輪。而影不溢於側。則為器合於天。乃置境算於地平数上為昼刻。数下為夜刻。推之万国。無差矣



百刻環

図と文を参考にすると大体の構造はわかる。現今私共の作るコマ型日時計と似たようなものである。この説明文だけでは時刻の測り方が今一つ判然としない。何の影がどこに生じて時刻が読み取れるのか。前出、西村遠里はこの装置を実際に作ってみて実験し、次の如き意見を

述べている。

愚にも此百刻環を製作して日晷（ひかげ）を実測するに合わず。夏至の節辰の刻（午前8時）の日晷を測れば斜めに環中の空をさして日巡干環輪（1日を等間隔に100分割した刻目盛り付きの輪）而して影を測るに於いて溢れずと云う如くならず、午中（昼間）の日晷といえどもなお側に於いて溢れ、かたはら（傍ら？）に溢れずときは環の浮沈其の節の昼夜の刻と大いに粗齟（食い違う）す、冬至亦然り只春秋二分（春分・秋分）のみ春海の云う所の如し。愚にも擦するに此器製作の道理に於いては器と天合すべき理なれども他の測量の器物と其の用異なり他の器物は天と合するように製作して此の方の躰を動かし望管（のぞみ見渡すこと、またその用具）を以て是を窺ひ亦は日晷の中る所を測りて其の度分を実測す、故に如何ほど小器にても天と合することを得る也。今此の百刻環は此の方を動かすこと無しで天に比す天の南北四十八度環の南北四十八度と其の矩合（外惑星あるいは月が地球から見て太陽と直角の方向にくること）あたるべきの理なきが如し。其の理後へに図を附してこれを明かす、然れども愚意の出る所春海に比すべからず、春海巳に此の作文の如く貞享の暦の中にも百刻環を以て其の国々の昼夜の刻分を測るべしと云、これ又別に真理あるか其の意はかるべからず後哲春海の云所を解して愚が誤を質さば幸ならんのみ。（近世日本天文史より）

※この文は筆者の読み下し文をさらに編纂委員が説明を加え読み下したもの。

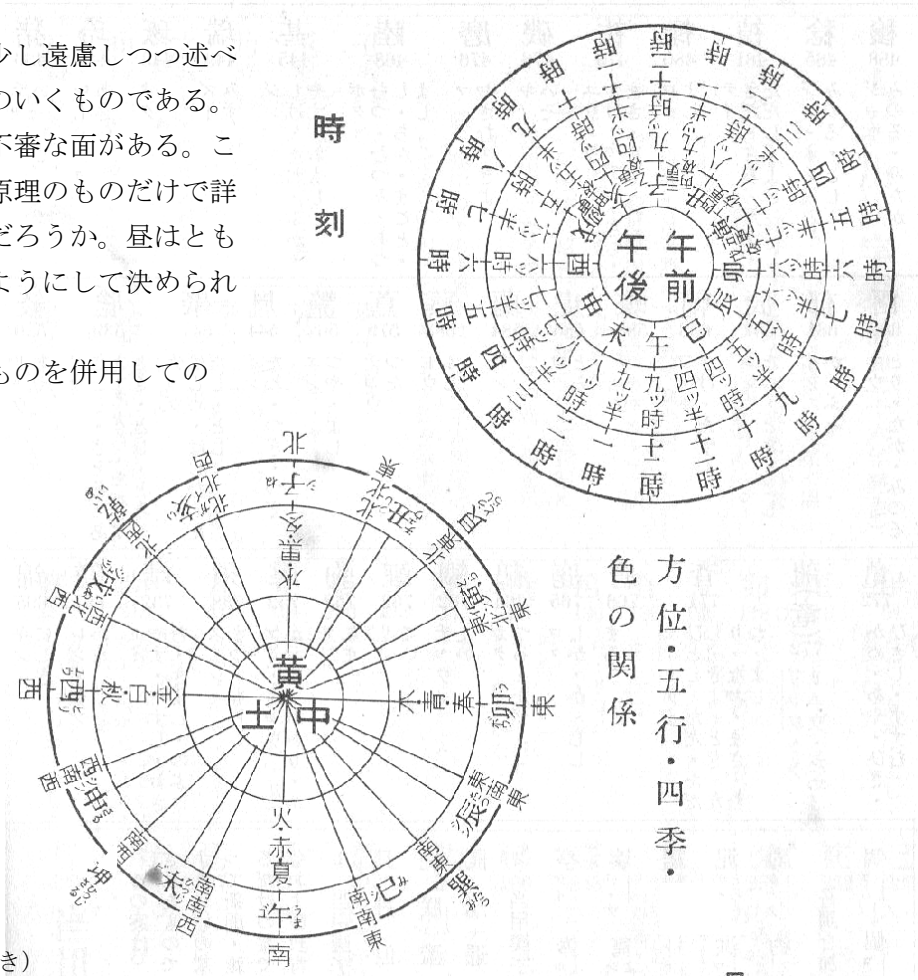
※天合　天と通じ合うこと。特に太陽系天体の場合には、地球から見てある天体が太陽とほぼ同じ位置にある状態を指す。

遠里は自分の意見を少し遠慮しつつ述べているがこの説は納得のいくものである。確かに構造や使い方に不審な面がある。このような簡易な日時計原理のものだけで詳しい時の測定ができるだろうか。昼はともかく夜の時刻までどのようにして決められるのか。

きっと漏刻のようなものを併用してのことであろう。

時計ではないが呼吸法で時刻の概略を知るについて、次のように記されていて、一分間に十七・四呼吸になる。呼吸二百五十息一刻を為す（壬癸録）

※昔は一日を百分して一刻としていたので、0.24時つまり一刻は今の14。4分。一時（とき）は一辰刻ともいい八刻と三分の一に当たっていたので今の2時間である。（1日＝12辰刻＝100刻）



以上で秦山が使用したと思われる各種の測器について述べた。当時としては最新の観測手段であった。これ等を使ってどんな天体をどのようにして観測したのだろう。時あたかも犬公方将軍綱吉の代である城下に野犬がうろつきまわる中、夏の夜は蚊に悩まされ、また厳しい冬の夜に病気がちの体にむち打っての観測や記録は並大抵のことでは無かったであろう。残された貴重な記録を探って見ることにする。

3　観測の実際

ア．方位の決定

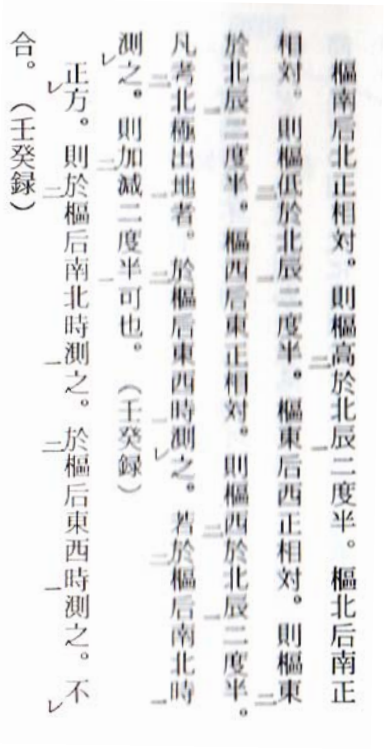
天体観測では先ず観測者の位置や方位の正しい決定から始まる。秦山は三つ程の方法を用いている。

其の一、「正方案」を使い正午前後の日影による方法で、正方案の板面にできる日影の曲線と同心円を利用して眞の南北線をつくる方法である。

其の二、北極星を使う方法。

其の三、磁針によるもの。

一は昼、二は夜、三は何時でもよいが各種併用したであろう。


樞南后北正相対。則樞高於北辰二度半。樞北后南正相対。則樞低於北辰二度半。樞東后西正相対。則樞東於北辰二度半。樞西后東正相対。則樞西於北辰二度半。凡考北極出地者。於樞后東西時測之。若於樞后南北時測之。則加減二度半可也。（壬癸録）

正方。則於樞后南北時測之。於樞后東西時測之。不合。（壬癸録）

右の文中、枢は北極星、后はきりん座 32 番星、北辰は天の北極点、北極出地は北極点高度で土地の緯度、二度半は北極点と北極星の角距離である。昔の一度は現代の約 0.99 度位。北極点と北極星の角距離は現代 1975 年分点で 0.85 度と減少している。

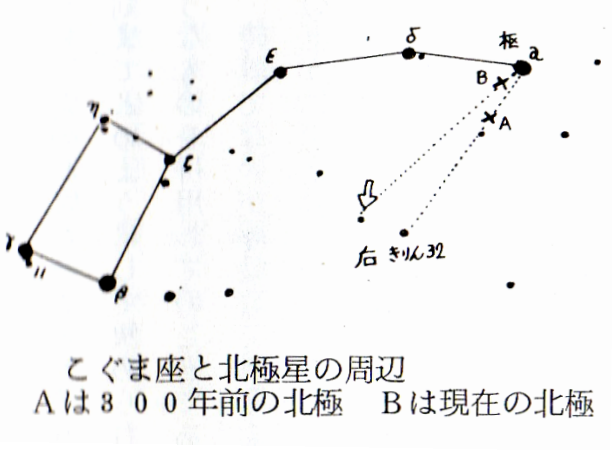
北の空は地球の自転により一日に一回、公転により、一日に約一度、時計の針と逆方向に回転して見える。その中心が北辰つまり天の北極である。

それ故に北極星を利用して正しい方位を求めようとするならば枢と后が縦に正しく一直線になった時、明るい北極星をねらえば良いわけである。

枢と后が南北どちらに来た場合でも良い。この状態は一夜に一回はあるから、少々待ち時間があるが面白い方法と云えるだろう。

ところで少し余談になるが、この時代から約 300 年を経た現代に於いては、この方法のデータを少し変えなくてはいけなくなっている。枢と后を結ぶ直線上にあった北辰（天の北極）は昭和・平成の今では大分ずれてしまい図中の ⇙ をした星と枢を結んだ線上で、もっと枢に近寄ったところに移動しているのである。いいかえれば昔の極点は現代の赤道座標上で示すと赤径 13 時、赤緯 88.7 度位のところにあたる。

この原因は二万五千年を周期とする地球の才差運動（地軸の首ふり）にある。



こぐま座と北極星の周辺
Aは３００年前の北極　Bは現在の北極

二万五千年分の三百年であり、一人の人間の一生ではそれと判り難い現象である。改めて三百年と云う歳月を感じると共に秦山の観察の正しさをも物語っている。この記録で才差運動を現実のものとしてとらえられると筆者は感激した。

分点移動や星の座標が変化する事実は、観測者には常識であるが一般的・教育的にみてこの記録は面白い。

次に磁針による測定である。この方法は余り正確さは期待できないので天体観測者は問題にしない。秦山も同様に考えていたようであるが、次のような注意書きめいた文章を残している。

磁鋒所指不正。指午丁之間於一尺差十分尺之一。先儒所説皆未的。（壬癸録）
磁鋒指午丁之間。測磁鋒。帯剣固也。近地有砕細鉄器。不正也。（壬癸録）

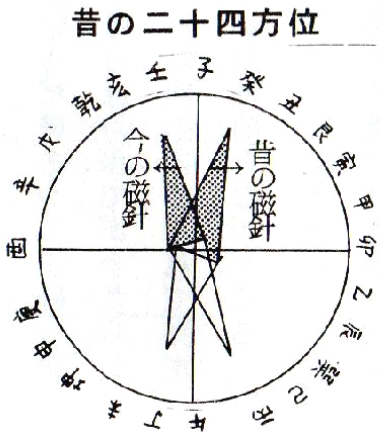
磁針の北と真北の差、近くにある鉄材の影響を云ったもので小学生でも衆知のことである。ただここで興味のある点は始めの文中の、

指二午丁之間一　うまひのとの間を指す　なる言葉である。磁針のS極（普通は南方を指す）が指している方向を示している。

当時は方位を示すのに北から東まわりに、

子癸丑艮寅甲卯乙辰巽巳丙午丁未坤申庚酉辛戌乾亥壬

と記して二十四方位を示した。これは十二支と十干の中の八つと易卦（えきけ・か）四つを用いたものである。これで見ると午丁（うまひのと）の間とは、現今の南と南々南西との中間に当たっている。ところが現在の磁針を見ると南と南々南東の中間を指すのである。昔の方位で午丙（うまひのえ）の間である。



これは明らかに地磁気偏角の三百年に於ける永年変化を物語るものである。磁針が北を指すことは13世紀頃から知られていたが偏角と伏角（ふっかく）等の存在は大航海時代の幕開けによって知られるようなった。

最初発見したのはコロンブスと云われる。世界の偏角分布図を作ったのはハレー彗星で有名なエドモンド・ハレーである。高知付近は現在偏角六度強で磁針のS極は真南より東へ振れる。秦山の時代にはそれが西へ同じ位振れていたわけで、約三百年で逆転しているのである。ちなみに東京付近では変化の周期が七百年位である。「於二一尺一差二十分尺之一一」とあるのを正接の0.1と考えると5度40分となり辻妻が合う。ここでも三百年と云う時間の流れを感じさせてくれる。　※正接＝タンジェント(tangent)。

※偏角（へんかく）　地磁気の3要素の1つ。普通磁針のさす方向が地理上の北の方向とずれる角度。すなわち地磁気子午線と地理学上の子午線とのなす角度。

※伏角（ふっかく）　地磁気の3要素の1つ。磁針が水平面からどれだけ傾くか（北半球で北下がりになる）を表わす。

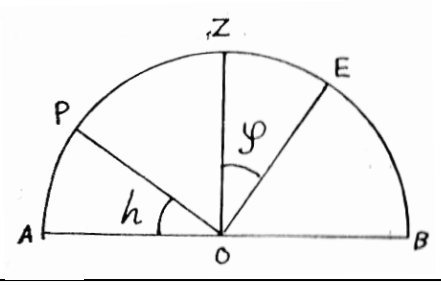
※全磁力（ぜんじりょく）　地磁気の3要素の1つ。磁場の強さを表わす。

イ．緯度の決定

緯度のことを昔は北極出地（ほっきょくしゅっち）と呼んでいた。北極点の高度を測定することで求める。原理的なことは昔も今も変わりはない。今では北極点を直接測定せずと

も各種観測法があるが秦山の時代は他の方法は使ってないようである。

図で 0 は観測者、P は北極点、Z は天頂、E は天の赤道の各方向を示している。角 φ は角 h と等しく、これが土地の緯度を示している。



北極点にちょうど明るい星が無いものだから秦山は北極点をはさむ二星、つまり枢と后が一直線・水平になる時刻を待って明るい枢の高度を測って緯度とした。象限尺・平水溝等を使って高知城の緯度を決めた記録が残されている。

元禄七年甲戌、至二乙亥丙子一、三年窺測、土佐高知城北極出地三十三度半強。　（壬癸録）

※元禄 7 年（きのえいぬ：1694）、きのと　い　ひのえ　ね　に至る、三年うかがい測る。土佐高知城緯度 33 度半強。

この観測のため三年を費やしているだけあって正確な値を得ている。この項でも天文学は日進月歩であったらしく 1740 年代ともなれば大気差の補正まで入れて測定し角度の秒の単位まで求めるのが当たり前となってくるのである。

これ等の他に日本各地、朝鮮等の緯度につき書いたものがあるが、これは貞享暦のデータを写したものだろう。

北極出地・陸奥津軽四十二度。南部四十度。能登七尾三十九度。朝鮮国都三十八度少。対馬三十八度少。武江三十六度。皇都三十五度半強。土佐高知三十三度半。薩摩鹿児島三十一度。琉球二十七度。　（壬癸録）

もとは誰が作ったのであろう。実測ではないようである。秦山等の方法でやればずっと正確に測れたはずである。能登七尾は二度もちがうし、武江（江戸のこと）は政治の中心地、もう少し念入りにやらねばならない。

緯度決定につき次のようなことも記してある。

又法四判之端穿二円孔一、扇紐施二垂針一懸レ之、窺二極星一、垂針所レ当即出地之度也、蛮人船中、用レ之知レ北也。

※又法四判（円の 1/4 の扇形をした目盛り付き板）の端に円孔をあけ、扇紐を垂針（おもり）に施してこれを懸け、極星を窺う、垂針がぴたりと当たるところ（目盛り角度）、これが緯度なり。異人が船中でこれを使って北を知るなり。

これは現今の小中学校で理科実習に際し分度器等を使って作る高度計と同じである。このようにすれば機器の水平をとらずとも手に持って測れる。船舶用の四分儀のことを云ったものだろう。

ウ．経度の決定

渋川春海による貞享暦は中国との経度差の違いを強調し日本には日本の暦をと提唱したのであるから、春海も秦山も地球上の経度差についての理解は充分であったと考えられる。しかし、実際に観測によってそれを求める段階に於いては道は開かれていなかった。その証拠に壬癸録等にそれらしい記録が見当たらない。

二地点の経度差を求めるには両地で或る星の南中を観測する必要があるが当時は南中の現象を見ること、その時刻を地方時で測ることはできたが、二地点で共通の時刻をもつことのできない状態であった。無線報時や正確なクロノメーターは無かった。

※クロノメーター　天文観測・経緯度観測・航海などに用いる精度の高い携帯用のぜんまい時計。現在では水晶の固有発振を利用したものが使われているものがある。

だから、実測するためには広範囲で同時に見える日月食・流星群・星食・木星の衛星食等を観測し、後で地方時を交換すると云う方法をとる他ない。秦山より五十年程後の人、葉山村の片岡直次郎（延享４年：1747～天明元年：1781）は京都の麻田剛立と連絡をとって月食利用による京都－葉山の直線距離や経度差決定を試みているのであるが、秦山は春海と始終綿密な手紙の往復をしていたにかかわらず経度差測定に、触れていないのは不思議である。貞享暦においては里差の問題として東西百里を一刻とし冬至天道の始まる所世界中みな同じ皇都の冬至を四刻とすれば江戸は五刻・土佐は三刻・九州は二刻となると云うように算術的には出していたのである。

エ．彗星観測の記録

秦山が天文暦学に志すようになった延宝８年（1680）頃から彼の没した享保３年（1718）に至る三十八年間に日本で観測記録がある彗星は六個である。（別表）その中の三個につき秦山の記録がある。

昔は彗星のことを通常、白気と書いてあるが彗星としたのもあり、また、客星・孛（はい）・長星・旗雲とも云われた。

A　延宝８年の彗星（1680）

この彗星は余程印象深かったのか、秦山集その他三ケ所記載がある。その一つ

延宝庚申、彗星出二於斗牛一、為二越之分野一　（秦山集）

斗牛（とぎゅう：二十八宿の斗宿と牛宿）に出づは、いて座とやぎ座の中間に出たことを示す。観測の日時が無いのが残念である。越の分野と為すとは、占侯の天学つまり占星術的なもので、予め天の星宿と地上の一地域の対応を決めてあり、天変の起きたことを因にしてその地域を占うのである。越は越後を表しているようである。

1680～1718出現の彗星

	世界	T	日本	秦山
1	1680	12/18	○	○
2	1682	9/15	○	—
3	1683	7/13	—	—
4	1684	6/ 8	—	—
5	1689	11/30	○	—
6	1695	10/23	○	○
7	1698	10/17	—	—
8	1699Ⅰ	1/13	—	—
9	1699Ⅱ	10/10	—	—
10	1701	10/ 7	—	—
11	1702	3/14	○	○
12	1706	1/30	—	—
13	1707	12/12	—	—
14	1716	？	○	—
15	1718	1/15	—	—

（Ｔは近日点通過日付）

※近日点　太陽を回る惑星や彗星が，楕円軌道上で太陽に最も近づく位置。この付近で公転速度は最大になる。地球の場合，毎年一月初め頃，この位置を通過する。⟺ 遠日点

次の記録はこの彗星に関して春海に質問したものである。

問延宝庚申、彗星本有レ星、経星乎、客星乎、日客星也。又問、其東行者何也、日客星有二東行者一、有二西行者一無二定行一也。　（壬癸録）

（読み下し：問う、延宝庚申のとし、彗星、本＝もとに星あり。経星（恒星）なのか、彗星なのか、一昼夜の間彗星なり。また問う、その東へ行ったのは何なり。一日中彗星は東へ行くことがあり、西へ行くこと有りは定めなく行くことなり・・？）

「天柱密談」には上につきもっと詳しい。

延宝庚申のとし出候彗星、本に星御座候て、次第に東へ上り中天にて消申候。本に御座候星は経星にて御座候きや。客星にてハハキと共に消え申候きや。

（読み下し：延宝庚申のとし、出現した彗星、本（もと）に星が見え、次第に東へ上り、天の中程で消えた。本の星は経星（恒星）なのか。彗星は、ほうき（箒）と共に消えた。）

※彗星＝尾の形から日本では「ほうき星」と呼ばれる。流星とは違うので混同しないように。

春海答えて　　客星也。　　※客星＝彗星

秦山さらに問う。右の彗星西より次第に東へ参り候は金星などの右伏より速段々参申候心持にて東行仕候哉

春海答えて　　是は不レ知候。各星行は東行も西行有レ之候。

とある。三記録共、日時が不明確なこともあって、その彗星の正体が判明しないので我が国及び諸外国の資料を調べた結果、国内・中国・欧州でも同じころ観測されていることが判明した。本邦の記録は「嘉陵十種」の九月二三日（西暦 11 月 14 日）の夜五時前西南の方に客星出る。また「常憲院殿御実紀」に九月二三日この夜より西南客星出る十二月初旬に至り見えずなりぬ。等あることが判った。

※「嘉陵十種」　清水徳川家武士・村尾嘉陵（むらお・かりょう）著作「嘉陵十種癸集・天文怪異」。

※「常憲院殿御実紀」　19 世紀前半に編纂された徳川実紀（とくがわじっき＝江戸幕府の公式記録）

中国にはもっと詳しい記録がある。欧州では発見者キルヒ・望遠鏡による最初の彗星観測・ニュートンにより彗星として最初の軌道決定されたことなどで知られ、何はともあれすばらしい長大な尾を持つ大彗星だったのである。秦山はこの頃、天文へ入門期であったので立ち入った記録を残さなかったのは解るが、この彗星によって天文暦学への意欲をかり立てられたと考えてよい。

ところで、「天柱密談」の春海とのやりとりである。秦山が指摘した、この彗星の本に別の星が有ったか、有ったなら恒星か惑星か、または核自体の光輝を星と見たのであろうか。これにつき、しばらく不明であったが、彗星観測者の関勉氏に協力していただき文献を調べた結果、ロシアの観測者の記録があり、「発見当初この彗星は明け方に見え、11 月 21 日（西暦）には、しし座α星のそばにあった。それ等に重なるようにして、一・五等の火星があって彗星の光度とほぼ等しかった。尾はその後 20 度～50 度と延びたと記されているのがわかった。

これで「春海答えて客星也」、「各星行は東行も西行有レ之候」を火星とおけば疑問が解けるのである。その後、日本の別の記録の中に「十月坤（ひつじさる）の方に広さ二尺ばかり長さ廿間余の白気（彗星）顕れ、其の根に星あり世人これを長虚星（ちょうきょせい＝架空の星）と号（なづけ）り十二月に至りて没す、九月より旱魃（かんばつ）ゆえにかかる妖星出るか」。その他同じものがもう一つ有るのもわかった。ちなみにこの年の年初の頃火星が衝（しょう：ある惑星や衛星が地球からみて太陽と正反対の位置＝180 度にくること。また、二つの惑星が太陽をはさんで正反対の位置にある場合も衝と云う）であったと考えられるので、火星は光度を落としつつ順行を続けており彗星は発見後、しし→おとめ→てんびん→さそり→いてと進んだ。発見直後に太陽をまわりこの頃極端に太陽に接近しつつ近日点を通過、夕方の空に巨大な姿となって再現したのを秦山は見たのであろう。

※日本の記録と中国・ヨーロッパの記録と比べると出現の日時・方角等で符合せぬ点がある。また「東へ上り中天にて消申候」も合点のいかぬこと。今後明らかにしたいと考えている。

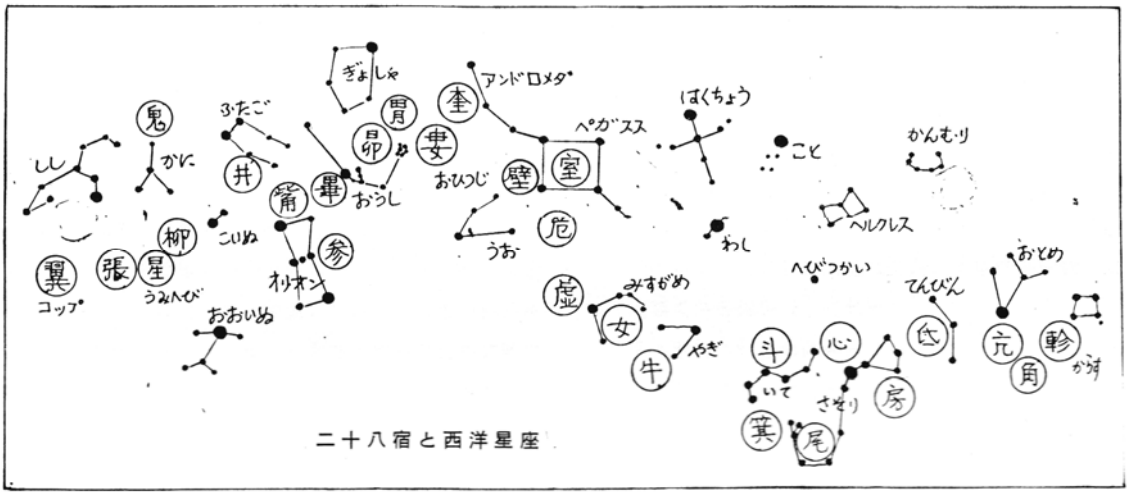
B　元禄 8 年の彗星（1695）

乙亥九月廿五日晨、東南有二白気一。本在レ軫末至レ翼十月中旬消。此在二駿之分野一翌年春。駿域番士大岡五郎右衛門。手二刃番頭高力伊予守一・・・（略）

（読み下し：きのと・う 9 月 25 日早朝、東南に白気＝彗星有り。本は軫＝みつかけぼしから末は翼＝たすきぼしに至る。10 月中旬消えた。翌年春、駿河国の方に此有り。刀番頭高力伊予守手に・・・。）

右の軫（しん：みつかけぼし）は、からす座、翼（よく：たすきぼし）はコップ座の付近である。頭部をからす座に尾はコップ座に向け約 15 度位延びていた。駿河の地方に凶変が起きたことも記している。

本彗星は西欧では 1695 年 10 月 28 日～11 月 19 日まで見えた。10 月 30 日には光度三等、尾 30 度ブラジルのヤコブの発見とある。



☆二十八宿表★

No	星宿	読み	中心の星	
1	角	すぼし	乙女	α
2	亢	網星（あみぼし）	乙女	x
3	氐	ともぼし	天秤	α
4	房	添星（そいぼし）	さそり	π
5	心	中子星（なかごぼし）	さそり	σ
6	尾	足垂れ星（あしたれぼし）	さそり	μ
7	箕	箕星（みぼし）	射手	γ
8	斗	ひきつぼし	射手	φ
9	牛	稲見星（いなみぼし）	山羊	β
10	女	うるきぼし	水瓶	ε
11	虚	とみてほし	水瓶	β
12	危	うみやめぼし	水瓶	α
13	室	はついぼし	ペガサス	α
14	壁	なまめぼし	ペガサス	γ
15	奎	斗掻き星（とかきぼし）	アンドロメダ	ζ
16	婁	たたらぼし	牡羊	β
17	胃	えきえぼし	牡羊	35
18	昴	すばるぼし（六連星）	牡羊	n
19	畢	雨降り星（あめふりぼし）	牡羊	ε
20	觜	とろきぼし	オリオン	λ
21	参	唐鋤星（からすきぼし）	オリオン	δ
22	井	ちちりぼし	双子	μ
23	鬼	魂緒の星（たまおのぼし）	かに	θ
24	柳	ぬりこぼし	海蛇	δ
25	星	ほとおりぼし	海蛇	α
26	張	ちりこぼし	海蛇	υ
27	翼	襷星（たすきぼし）	コップ	α
28	軫	みつかけぼし	鳥	γ

C　元禄 15 年の彗星（1702）

正月下弦、至二二月上弦一、初昏申酉方有二白気一。本出二於奎十四度天倉内一。末至二於昴初度天苑内一。其野中国四国西国・・・略・・・。

（読み下し：正月下弦、二月上弦に至る、たそかれ始めのさるとりの方角に白気＝彗星有。本＝もとは奎＝けい：とかきぼし十四度天倉内＝くじら座内に於いて出る。末＝尾は初度天苑内の昴＝すばるに至る。その分野は中国四国西国・・・。）

奎十四度天倉内はくじら座、昴（すばる）だから、頭部はくじら、尾がプレアデスまで 30 度位延びていたと云うことである。西欧記録はパリのラ・ヒルの発見、4 月 20 日～5 月 5 日にかけ見え、短い尾がプレアデスにあり、光度は二～三等とある。

D　黒気というもの

元禄巳巳、冬、庚午、春。黒気在二張宿一。為二紀泉分野一

黒気がうみへび座にあったことを記しているが、天文学上黒気など聞いたことがない。何を見たのであろう。次の記録に一つの解釈がなされている。

三月中間伝説。土城北門、黒気薫升、観者成群。・・中略・・高者三四間。短者不レ下二丈余一、黒烟直々如二長竿一、眞怪象也。有下就二陂下一審諦者上。云、非二是雲烟一也。数万

蚊聚成レ棒、乗レ昏突上也・・略・・。(壬癸録)

(読み下し：三月中頃の言い伝え。高知城？北門、黒気が現出、見る者群を成し・・・高きは三四間、短きは一丈余りを下らず、黒けむり直々長竿の如し。まことに怪現象なり。つつみ下すに就きつまびらかにする者有り。云う、これは雲けむりに非ずなり。数万の蚊集まり棒を成し、たそがれに乗じて突き上がるなり・・・。)

蚊柱であるとしているが、これは納得できる。

E　秦山と天和2年のハレー彗星（1682）

1682年8月にハレー彗星が回帰している。これを秦山は記録に残していない。これは延宝8年のキルヒ大彗星の翌々年であり、日本にも世界にも多くのきろくがある。尾も長く、光度も一．七等と明るかったのに何故秦山は記録しなかったのかとふと感じたのである。20才の頃に当たりまだ天文入門期だったので気づかなかったのも知れないが、健康上の理由が考えられる。18才～25才にかけ、ひどい眼疾・耳疾・マラリヤ発作等に悩んでいたという。秦山集に「僕今年25才、しかるに目昏く耳轟き殆ど衰老の人の如し」と嘆いているように星の観測等とても無理な状態の時であったかも知れない。

※今の度分秒と昔の視覚度について

星と星の間隔、彗星の尾の長さ等を昔は尺寸丈間とか使って示しているが、余り正確ではない。昔の記録を統計的に処理した結果、一尺を今の約一．五度と考えたら良いとされている。

オ．流星や光り物の記録

A 十月六日丁未、午七刻、土佐。北奉公人町失火。延焼入二郭内一、焼二公屋一十二所、士館百七十余宇。城東不レ遣二一宇一、凡二千余宇、死傷甚衆、亥時熄。即夜大流星飛入ニ井宿内一垂下数尺、経二数刻一而消。今夜流星如レ織、人皆見レ之。

(読み下し：十月六日ひのとひつじ、うま七刻＝昼十二時、土佐城下、北奉公人町より失火。火は城郭内まで延焼、公事屋敷焼け十二ケ所、士屋敷百七十余、城東まで及び、被災およそそ二千余所。死傷者多数、午後十時頃に鎮火した。その夜大流星井宿＝ちちりぼし＝双子座内を飛び回り、それらの長さは数尺。数時間後に消えた。この夜の流星織るが如し。人々は之を見た。)

元禄11年（1698）10月6日は西暦で11月中頃にあたる。昼過ぎに北奉公人町で大火があり、夕方になって、大火球が飛び、夜は大流星雨となったことをのべ、大火と流星の相関を云ったものである。

宿内はふたご座である。毎年11月中旬は有名なしし座流星群が現れる。これは周期が32．9年のテンペル彗星が軌道上に残した流星体によって発生するとされ、ほぼ33年毎に顕著な現象を見せる。1833年のアメリカ上空での発生は歴史上に残る事件である。近年では1966・1968年等に大きな現象があったが、最近は余りスペクタルでなく母彗星が1999年に回帰するのを待つような状態である。この夜の流星雨は周期的にみても流星如レ織からもまず、しし座流星群と考えてよい。筆者は土佐にこのような記録が残っているのを見つけ大変うれしく思っている。

B　元禄十二年己卯十月四日戊（戌？）辰夜、有二光物一。出二潮江人家垣墻下一、指二一宮一飛。初其地甚鳴、如二牛吠一。人恠群視俄火光如二大甕一、直昇飛。如雷民舎牛馬皆驚走、其光照レ天。数刻不レ消、垣墻頗焦云。

(読み下し：元禄十二年つちのとう十月四日いぬのこく＝午後八時頃、光物あり。潮江の人家の垣根から現れて一宮へ向けて飛んだ。その大音響は牛が吠えるが如し。人々あやしいと集まり見るに俄に火光は大瓶（おおがめ）の如く、真っ直ぐに飛んだ。雷鳴の如くに家で飼っている牛馬が驚き走り、その光り天を照らした。数時間消えず、垣根を焦がしたと云う。)

これはいささか大袈裟な表現である。潮江から一宮へ向け南西から北東へ大火球が大音響とともに飛んだと云うのを人に聞き記録したものと思う。大流星（火球）は水平に飛ぶものもあり、大音響・痕跡が長時間残る、等のことはある。しかし、垣根を頗る焦がしたとは思えない。

これは流星や大火球と断定できないが十中八九違いないと考える。この他秦山集には

寛文蝦夷の乱、有二天狗流星一。天狗流星、星飛大鳴也。

との記事がある。寛文蝦夷の乱は秦山 6 才の時のことで観測記事でなく天狗流星の説明である。日本の他資料にも流星東に行き雷の如しとか天狗流星南に飛ぶとありこの年大火球のあったことが人々の記憶に強かったのであろう。

※寛文蝦夷の乱　シャクシャインの戦いの別称。現北海道日高地方の静内川流域に拠点を置く、ハエクル集団とメナシクル集団の猟場争いが松前藩を巻き込んだ戦い。度重なる天災や長年の不景気に対して松前藩の対応が悪く、日高アイヌが蜂起、松前藩と対峙したが、江戸幕府の援助を得た松前藩によって鎮圧された。

※天狗流星　ごう音とともに落下したり、地上で燃えたりする大きな流星のこと。怪しげな流星を天狗にたとえたもの。

カ．惑星の観測

現代の惑星観測は位置観測・星自体の物理観測等であるが、当時は偏暦上必要な位置観測のみであり、それによって求めたデータも使用目的は暦の暦註用であり占星術的なものであった。観測の対象となった星は五星であり、辰星（水星）、太白（金星）、蛍惑（火星）歳星（木星）、鎮星（土星）であり、まだ天王星は知られていなかった。（天王星の観測は 1824 年足立信順が最初）。秦山は元禄年間に多数の位置観測記録をとっている。一部抄記すると

・三月廿一日丁丑。火犯二軒轅大星一、火正北。大星正南相去六寸許。暦火在二張二度一。

（読み下し：三月廿一日ひのとうし、火星が軒轅大星を犯す、火星真北。軒轅大星真南へ相去り六寸ほど。暦の火星は張（ちりこぼし）の二度にあり。

※軒轅大星（けんえんおおぼし）　中国の伝説上の五帝の一人黄帝の別称を名付けた星のこと。

軒轅大星（しし座α星）六寸（約 0.6 度）張（ちりこぼし：うみへび座）の二度とは張宿の距離（基準星）から 2 度はなれるの意である。その他

・四月十八日癸卯。火犯二軒轅東角一星一。火正北。一星西南、相距二度許。暦火在二張十度一。

・同日。木猶在二大微垣中一、暦留二翼六度一。

・十五日壬辰月食雨天。

・七月七日己卯。将軍家養女喜知姫君夭逝。実尾張大納言殿息女也。此時蛍惑在二亢宿一。尾張之分野。

※翼（コップ座）　亢宿（おとめ座）

これ等の観測には貞享暦、時憲暦等と比較して記録したものが多いのは貞享暦の優秀性を示すためのものであろう。

・癸未正月廿日。至二廿四日一五星如二連珠一、見二西方一。今以レ暦註レ之。正月廿日。木二在奎八一。火在二婁十一一。土佐壁八金在二室十三一、水在二室十六一。

これは元禄 16 年(1703)の正月に起きた五星連珠つまり惑星直列現象を見た記録である。惑星が直列になること自体は天文学上どうと云うことは無いのだが、太陽の近くを短周期で公転する水星も含めて五星を天空上の同じ場所に見るのは極めて珍しい。水星、金星が

ペガサスのα星、火星がおひつじのβ星、木星がアンドロメダのζ星、土星がペガサスのγ星、以上の各星の近くで西から金水土木火の順に並んでいることになる。

キ．日月食について

日月食は人目をひく現象であり、この予報の正しさは暦法の成果を問うものであるので精力的に観測しているが現代見て特に興味をひく点は少ないので一つ一つの記録についてはふれないことにする。観測技術的にもこの時代のデータは精度が悪いので歴史的な面ではとも角として、余り天文学上の資料とはならないようである。

〇むすび

秦山の記録はこの他天文暦学はもとより、地理・気象等いろいろとある。山田野に茶の害虫が発生し茶が全滅した。その記事から推定しトビモンエダシャクだったのだろうか等々まだ調べてみたいことは山ほどあるがこの辺りで終わることにした。

－参考・引用に資した図書や資料の主なもの－

人山集・天注密談・新芦面命・秦山目抄・出米算用帳・神代温義（大久保千涛編）・
秦山の学（西内雅著）・近世日本天文学史上下巻（渡辺敏夫著）・暦学史大全（佐藤政次編者）・
日本の天文学（中山茂著）・垂加神道の伝承（西内雅著）・星の古記録（斉藤国治著）・
星の事典（鈴木駿太郎著）・星百科大事典（ｒ・バーチャム著、斉田　博訳）

（岡村啓一郎）

註．本稿は、判りやすくするため、編纂委員による読み下し文や※印、＝印で説明・解説等を加えています。

6　秦山先生は偉い学者と云われていますがどこが偉かったんですか？

ここまで話をしてきましたように、秦山先生はその大きな功績から「学聖」と呼ばれたほどの大学者でした。しかし、実際の秦山は、最後まで生来の病（眼病・耳疾（じしつ）・肺結核）と闘う人生であったので、経済的に恵まれた時期は一時もありませんでした。相次ぐ家族の不幸（自分の子供が何人も次々と死亡）と貧困、加えて学者への迫害等の中で研究生活を続けました。

※家族の不幸については後で話します。

〇秦山に咲いた花

人生56年の秦山の生涯で、咲いた花といえば、

◇浅見絅斎から離れて、渋川春海から暦道の印可を得たこと。

※印可　弟子が師の教えを体得した証明・認可書

◇土佐藩士、土橋六兵衛の娘を妻として迎えたこと。

「いく年か仰ぎ思いし神路山　ふもとのちりを拾ううれしさ」と喜びを詠んでいます。秦山は詩人でもあり数々の名詩も残しています。（秦山集の西遊紀行・東遊紀行等参照）

◇儒学と天文と神道学が一段落つき、土佐学が誕生したこと。

◇講義による古事記、日本書紀神代巻等の指導に、門弟達が多く聴講してくれ、門下生の増加をたどったこと等々、こよない（この上ない）喜びであったでしょう。

ここで、秦山にまつわるエピソードを紹介します。

1．［書籍講出米算用帳］について

秦山が経済的に恵まれた時期は一時も無かったこと、学者への迫害等の中で研究生活を続けたことは先に述べました。これらは、人間が真理を追究しようとする時の真の姿勢がどこら辺にあるかを改めて私たちに語りかけています。この秦山の態度は門弟・知人ら、彼の人柄を知る人々の心を動かし、その研究生活を助けようとする気運が生まれ、十数名の者が計画して、「書籍講」なるものをつくり、毎年一人が米一俵を持ち寄り、それを換金積み立てて共同研究の財源としました。

これは実際的には秦山の貧乏暮らしを救い、その研究活動を援助しようとするものでした。元禄 4 年（1691）から同 13 年（1700）まで続き、およそ米百俵程度を積立、多数の書籍、器械を購入し秦山の家に収蔵しお互いも活用できるようにしました。当時は現代より、もっと米の価値が高かったかもしれませんので、現代時価にして 200 万円を上回る多額のものであったはずです。秦山の人柄を物語る美談です。

この講で購入した書籍は約 150 冊、渾天儀、天球儀、象限儀等の天体観測機器等でした。これらの善意の人々の支えの上に立ち、自身の努力で暦学印可を受けたこの頃が秦山の最も充実した開発研究の時期となったのです。

2．［秦山と子供たち］

秦山が後述の蟄居幽閉中、家での日常は、子供たちに古今の伝記を読ませ、自分はあぐらをかいてこれを聴きやがて談笑していました。まもなく着衣を整えて正座し、「論語」や「孟子」を講義します。二人の子供は両手を胸の前でかさね組む敬礼をして緊張して聴いていました。朝食が用意され親子団らんで食事し、後はくつろぐ。また、ある時は子供たちが山水に遊んで見慣れぬ草や変わった魚を獲ると帰宅してすぐにこれらを「本草綱目」で調べました。夜になり灯がともると子供たちに読書をさせ、世の中のこと、出処進退の道理について疑問・非難・議論・弁明を延々と続けました。晴れた夜は庭内を歩き、天空の星や月を観てはホタルを採り、酒や果物は時にたしなみ、詞は口からでるに任せる。夜半就寝し、枕元には歌集が散らばり、心に一点の汚れもない気分になるというまさに自然にそった生活ができる場所に居られることは、安心して死ねるという安らぎを持ち得たと云う話が残っています。これらから土佐山田の地はよほど住みやすかったものと思われます。

〇秦山の試練と迫害

秦山にはさまざまな試練と迫害が次々と待ち受けていました。
それは貧苦、病気、家族の不幸等に加え、深尾家問題、絅斎との学問上の意見のくい違い、挑戦状と論議等々のトラブルでした。秦山はこれに対して、天の試練と耐え忍び、心に動揺も起こさず、（人の心の内は分りませんので、少なくとも外面上はとお断りしておきます）泰然自若（たいぜんじじゃく）として生きてきた歳月、悲しみもよろこびも幾星霜（幾年月）、夫の心を心として悲鳴も挙げずに逆境に耐えながら連れ添ってきた気丈夫な夫人。

宇宙は広い、何時の日にか花咲かんと、次の世代に期待をかけながら学問一筋に励む姿に秦山の信念の強さと生き様を見せつけられるようです。

※泰然自若　落ち着いていてどんなことにも動じないさま

土佐藩家老家深尾氏の家督争い・藩主交代にかかわる事件に関与したとして土佐藩第 6 代藩主・山内豊隆から連座蟄居という厳しい処分を受けたのは秦山 45 才春（宝永 4 年：1707）の時でした。調べに対して、秦山は大義名分を明らかにし、き然とした言動で臨みました。

この頃の土佐藩は幕府直轄朱子学である林派の学が主流を占めており、土佐南学を再興した秦山の頭脳、識見を恐れた主流派による人間排斥と見てよいでしょう。

罪状不明の冤罪（えんざい＝おとし入れられた無実の罪）ですが「真偽は知る者ぞ知る。何時の日にか晴日たらん」と罪に服しました。決して天も人も恨まず己の運命を嘆くこともなく、昼は読書、夜は天体観測に勤しむ日々を淡々と過ごしていたと云われています。

秦山の蟄居幽門は 12 年にも及び、日々の生活は想像以上と思われますが、弱音をはいた記録は見当たりません。ともあれ、罪籍が赦されたのは享保 3 年（1718）5 月、やっと近辺の散歩ができるようになった 1 ケ月後の 6 月 30 日 56 才の若さで不帰の人となりました。「享保三六日記」（秦山死後の日記：筆者不明）によれば、死因は二回目の中風（脳卒中）だったようです。

しかし、実は、この死は今で云う保釈中の死であるとして、藩から赦免（罪を許す）はされませんでした。不条理な仕打ちに胸が痛みます。　※不条理　道理が通らない

秦山が釈罪されたのは没後 130 年、嘉永元年（1848）6 月 28 日孝明天皇御即位奉祝式に当たって、前罰解除の恩命に浴した時でした。　※同日、野中兼山の病没した遺児たちも赦免された。

皇道開明、数々の著書（別表・資料参照）等、偉大な足跡を残し赦免された時「今年五月、先生赦ヲ受クルアリ、予ノ悦ビコレ甚シ」との野中婉女の弔文こそ、門人すべての心を表現したものでありましょう。

※迫害　　いじめる　くるしめること

※連座　　まきぞえになって罪を受けること

※蟄居幽門　門を閉じ家内にこもらせる武士の刑罰

これらから秦山先生は大学者であるにもかかわらず、決してエラ張らず、お金などとは無縁の清貧、誠実、向学心に燃え、真理を追究する姿勢にブレは無く、国を思い、後世の日本人に一つの道を開こうとした願いと南学復興に身命を捧げた南国土佐の剛勇の気象は高く、秦山が偉大な人物であったことを改めて知ることができると思います。※気象　心だて・気質

7　秦山先生の学問思想が後の維新史に大きく寄与したことは本当ですか？

〇秦山の学統　　※南学学統図参照

秦山の肉体は亡びましたが、精神は生きていました。やがて、南学精神発揚に努力した人々によって興隆の時代は来るのです。

秦山没後、その学統は消えず、流れ流れて 150 年（南学学統は 250 年）、土佐勤王志士の理念の源流は、清らかな流れとなり、幕末の危機をも救うことになります。

長子「垣守」と孫「真潮」

谷秦山は偉大な学者でありましたが、その思想や学問は晩年の不運な境遇によって発展がふさがれていたのは事実ですが、それを長男**垣守**（かきもり）（元禄 11 年：1698 秦泉寺生まれ　通称丹四郎）が秦山学派（谷門派）として後世に伝えたのは大きな功績であると云わねばなりません。

また、南学が朱子学より国学に重点を置く転機を見せていることも注目すべきでしょう。

人間形成に最も大切なのが家庭教育であることは多くの教育学者の指摘するところです。垣守の純忠至誠の大和魂は秦山による家庭教育によって培われました。垣守が心の底から秦山に敬服していたことは「私の父丹三郎は海南僻地の地（高知）に生まれ（中略）その子である私は父の意志を継ぎ家業（学問研究）を怠らずように・・(後略)」の言葉によってうかがうことができます。秦山学の精神はその子の垣守、孫真潮（ましお）と子孫代々受け継がれ強烈に燃焼し続けていくのです。　　※純忠至誠　自分の欲がない純粋な忠義とまごころ

垣守の半生は父秦山の遺稿の整理に費やされました。なかでも「保健大記打開（三巻)」を公にしたことは、彼が大義名分を明らかにした点で大きな意義があり、後世勤王志士を奮起させる原動力になりました。序文「師曰ク吾モ日本ノ人ニテアルカラハ日本ノ神道ヲ主ニスベシ」の言葉は、長州の吉田松陰（山口県の高名な学者）にも思想的に大きな影響を与えました。

真潮は享保 12 年(1727)、山田野地村で生まれる。通称虎蔵、後に丹内、北渓と号しました。祖父丹三郎重遠・父丹四郎垣守と共に三丹と称せられ、土佐の思想界・学界を縦断して谷門学の一派を立てた学匠です。

彼は名藩主豊敷（とよのぶ：8 代)・豊雍（とよちか：9 代）の信任を得て、一儒官にして大目付に登用され、学者政治家として天明の大改革（家臣の規律や風紀を厳しく取り締まり倹約をすすめ藩財政を立て直す政策）を断行しました。これは前例のないことであり、藩主の信頼が如何に厚かったかがうかがわれます。

真潮は、儒学・神道にとどまらず、万葉集の研究に尽くし、歌学者、歌人としても頭抜けており、賀茂真渕（かものまぶち）の万葉学が京・江戸よりも南海僻遠の土佐において真潮によって花開き、鹿持雅澄によって実を結んだことは注目すべきことです。(土佐万葉学の大成)

なかでも鹿持雅澄（賀茂真渕・本居宣長の学統をうけた宮地仲枝の弟子：仲枝は真潮の弟子）の功績は大きく、彼の歌はまさしく勤王思想を表現したものとされています。彼の復古精神の影響は「天保庄屋同盟」の結成という当時としては画期的な運動につながりました。中岡慎太郎・吉村虎太郎はこうした庄屋の息子です。

これは土佐人の誇りであることは勿論、更にその門下から多くの尊王論者、勤王志士が輩出し、明治維新に輝かしい活躍をしたことは、土佐人として、香美市民として知っておかねばなりません。

※天保庄屋同盟　土佐、吾川、長岡の三郡の郷庄屋が結んだ秘密同盟。将軍、大名、庄屋、百姓等、みんなが天皇の臣であるという考え方。

垣守、真潮は多くの業績、著書を残していますが、書ききれませんので一部を紹介しています。

なお、土佐南学（谷門学：こくもんがく）の谷家学の継承は、**秦山－垣守－真潮－好井（よしい）－景井（かげい）－干城（たてき）**と代々受け継がれました。好井は真潮の弟で、干城の家系は父景井からの分家です。

干城は長崎では坂本龍馬や後藤象二郎らと時局を論じ、中岡慎太郎と「薩土倒幕密約」にも努力、戊辰戦争では土佐軍の大軍監として板垣退助総司令を助けて活躍しました。彼を有名にしたのは明治 10 年（1877)「西南の役」で西郷隆盛軍を相手に熊本城において籠城戦の末、勝

ち抜いたことです。
干城は、維新内閣で大臣を務めましたが閣内で意見対立、後に辞し、貴族院議員などを歴任しました。彼は膨大な秦山集の編纂に着手し、これを完成させた功績は知っておくべきです。

宮地家三代（静軒＝春樹＝仲枝）の業績

谷家三代（秦山・垣守・真潮）と表裏一体となって、谷学の伝統を受けつぎ広め発展させました。特に谷真潮の門人宮地仲枝がその門人鹿持雅澄によって、南海僻地の高知において、土佐万葉学を大成し、古道を明らかにして、その門下から多くの尊王論者を出し、武市瑞山その他多くの勤王志士を輩出しました。

幕末維新に大義のため血を流した数百の土佐勤王志士の面々こそ、秦山の学説、思想の息吹のかからぬ者はいませんでした。
鹿持雅澄　坂本龍馬　武市半平太　大石弥太郎　佐々木高行　吉村虎太郎　等々、全員は掲載できませんので、一部のみを紹介しておきます。他にどんな人がいたのか、みなさんで調べてみてください。

○秦山学と坂本龍馬について

坂本龍馬は幕末維新で大活躍をした土佐の英雄としてあまりにも有名な人物で知らない人はいないでしょう。日本全国、龍馬ファンが一杯います。
しかし、秦山学と龍馬がどのように関係しているのかはあまり知られていないようですので、少し話をしてみます。

坂本家は谷家の学問を学んだ家柄で、日本の古典、中でも和歌に親しむ家族でした。本家は高知城下本丁筋３丁目の質屋「才谷屋」で、寛文６（1666）年頃の創業です。のちに酒・物品などの商いをひろげ城下有数の豪商となります。才谷屋八郎兵衛直益は、才谷屋発展の基礎を作った人です。天明時代(1781～1788）に谷真潮による日本書紀の講読会、歌会等が開かれていました。こうした会合には、いつも谷一門の真潮をはじめ宮地春樹・宮地仲枝・中山弘矩・尾池春水・久徳台八・馬詰観音・才谷屋八郎兵衛（大浜直益、後に坂本姓に改姓）らが顔を出しており、これらのメンバーが歌の集いもさることながら、時局を憂え、天明の大改革を行う準備を着々と進めていたとされています。
天明年間は土佐藩政の最も困難をきわめた時代で、積年の台風被害等のため農業収入はガタ落ち、藩の財源がパンク状態となり、反対に窮民救済に追われ、城下の相次ぐ火災や飢饉の最中に幕府から関東川普請の催促があり、それへの対応、隔年繰り返される参勤交代の莫大な費用負担、さらに高岡郡池川用居ニケ村の紙漉農民 700 余名の伊予国松山領への集団逃散という前代未聞の事件勃発、事件落着のニケ月後、城下で米騒動が起こり、富商が買い占めを行い飢民殺到してこれを奪い、この騒動は近郷御畳瀬、山田方面に波及する勢いを示しました。
こうした時期に藩の上級役人は手をこまねいて傍観するのみでした。土佐藩中興の藩主と呼ばれた時の藩主豊雍（とよちか）はリーダーシップを発揮、真潮ら講読会のメンバーら気鋭の人材を次々と登用、危機脱出、藩政改革に当たらせ、真潮らは藩主の後ろ盾を得ながら旧勢力と果敢に対峙、任務を遂行して天明の大改革を成功させ藩財政を立て直しました。

才谷屋八郎兵衛直益（1705～1779）は商人でしたので、（後に郷士株譲り受け町人郷士となる）これらの一部始終を静観するしかありませんでした。

しかしながら、改革とはどんなものか、事件への対処の仕方、リーダーに求められる資質とは何か等々、学ぶものは多かったものと思われます。

直益の嗣子（長男）であった八平直海（1739～1792）は商人に不向きで、商家は弟直清に継がせ、分家郷士として、初代坂本家の当主となりました。その後、八蔵直澄、八平直足（直澄の娘幸の婿養子）と続き、坂本龍馬は八平直足の次男として生まれました。本名は坂本直柔（なおなり）です。

※坂本家の男子は代々名前に「直」という字を宛ている。これを通字・系字（とおりじ）（けいじ）と云う。これは日本人の名前に多くあります。周りの人に尋ねて調べてみてください。

子孫坂本龍馬は直接、谷門学を学んだわけではありません。しかし、先祖が垣守、真潮らと交流していたことは事実であり、家系には谷門学の精神や思想が自然と流れていたのではないかと思います。実母幸の母（龍馬の祖母）も和歌をたしなむ人で、祖母の父は土佐の歌合判者の開基と言われた井上好春でした。龍馬がたしなんだ和歌などは先祖八郎兵衛直益が好んだもので、龍馬は国の災難を体験した八郎兵衛直益の DNA を最も受け継ぎ、祖母からの影響も含めて血は争えないと思えてなりません。

8　秦山先生の家族や親類の人、友人にはどういう人がいますか？

秦山は行動実践派の学者ですので、生涯のなかで実にさまざまな人々と交流し、一期一会の人も含めると数えきれません。人の一生は多くの人との出会いと別れです。その中で人生体験を積み重ねながら人間として成長していくものではないでしょうか。

先に秦山家族の不幸について触れました。年表から抜き出して以下まとめてみました。

・貞享 4 年（1687）　秦山（25 才）春、幡多郡に売薬行商し、初夏帰る。痔疾を患う
・元禄元年（1688）　11 月 1 日父神兵衛重元没（65 才）
・元禄 2 年（1689）　秦山（27 才）秋、秦山肺結核を患う
・元禄 3 年（1690）　8 月 11 日母没
・宝永 4 年（1707）　秦山 4 月 2 日（45 才）罪状不明のまま山田に蟄居を命ぜられる
・宝永 5 年（1708）　11 月 28 日三男（八蔵）没（4 才）
・正徳元年（1711）　五男生後三日で没
・正徳 3 年（1713）　6 月 28 日四男（久蔵）没（6 才）
・正徳 5 年（1715）　1 月 12 日次男（神内古道）没（14 才）
・享保 2 年（1717）　3 月 26 日秦山（55 才）左半身の中風を患う
・享保 3 年（1718）　6 月 30 日秦山没（56 才）

秦山死亡時に遺された家族は長男垣守（元禄 11 年 7 月 21 日生まれ）、娘万（正徳 2 年 5 月 20 日生まれ）、秦山妻土橋氏の三人でした。

谷秦山の年表、著作集、学統図、谷氏系図、学問の歩み等は別表・資料として掲載していますので参考にしてください。師弟の名前や関係、業績、動き等がわかります。

〇谷家の墓所　岡豊忠霊塔の北 50 米

秦泉寺山　　垣守真潮等

秦泉寺天馬山　　谷重元

秦泉寺山の東南（200 米）　島崎氏（重元妻）

高知市久万山　　谷干城他

谷茲井　幡多郡大正町（現くろしお町）

谷秦山　香美市土佐山田町ぐいみ谷

※山田谷家始祖　神左衛門の墓は秦山墓の少し西方にある。

〇秦山に最も影響を与えた人

1．山崎闇斎（1618～1682）（やまさき　あんさい）

京都生まれ。浪人の子。両親は鍼灸で生計をたてる。通称は嘉右衛門。若いときから乱暴者で比叡山に修業にだされるが、勝手に山をおり、禅宗の京都「妙心寺」に入る。そこで山内家の湘南和尚に師事し、彼とともに土佐の吸江寺に修業僧として来る。南学を修めた谷時中を知り、野中兼山や小倉三省と交流して朱子学への傾斜を深める。兼山とは学を講ずること 8 年に及ぶ。そこで、25 才の時禅宗を捨て、仏門から離れ還俗、儒学者となるが、このことが藩主・忠義の怒りに触れ、土佐を追放。京都に私塾をひらき朱子学本来の教義に帰ろうとする崎門学派として確立、圧倒的な感化力をもって門人 6000 人に大きな思想的影響を及ぼすことになる。その教授法は厳しく、浅見絅斎（崎門三傑の一人で名分を強調し節義を重視した。この学派から尊王思想が主張される）が吐血しても休息させなかった話が伝えられている。その後野中兼山による経済的援助の中止や京都での塾経営への力入れ等で兼山とは不仲になるが、仏教を否定し、神道と朱子学の統合（神儒融合）による「垂加（山崎闇斎の別号）神道」を起こし君臣の関係を重視した。

2．浅見絅斎（1652～1712）（あさみ　けいさい）

近江の国生まれ。医者を職業とするが 28 才の時、京都において山崎闇斎に師事。佐藤直方、三宅尚斎とともに崎門三傑の一人と称される。性格は厳格で終生仕官せず門人の教育に勤める。師である闇斎に期待をかけられるが神道をめぐって師の考え（垂加神道）と合わず、別れる。彼は神道のもつ不透明さに不信感を持ち、一方の神道と儒学の兼学を主張する門人たち（谷秦山等）との間で互いに自説を主張して張り合っていた。しかし、後年闇斎の死後は神道を尊び香を焚いて罪を謝り闇斎の所説を継いだ。彼は朱子学のなかでも君臣父子の大義名分を明らかにし、また、忠節を重視し赤穂浪士を賛美した「四十六氏論」を書いている。また、楠木正成を尊び南朝正統論を唱え、中国の忠孝義烈の士の文集「靖献遺言（せいけんいげん）」は幕末志士に多大な影響を与えた。

3．渋川春海（1639～1715）（しぶかわ　はるみ又はしぶかわ　しゅんかい）

近世日本の天文暦学の開祖と称される開拓者。日本の科学思想最も重要な人物。秦山 17 才の時上京、山崎闇斎に入門。儒学と垂加神道を学ぶが、同門にこの渋川春海がいた。秦山は自己の神道の理念達成のため天文暦学の研究は不可欠と感じ、また、師闇斎の勧めもあり渋川春海の門をたたく。春海はそれまでの朝鮮中国からの輸入した暦だったものを、中国と日本の経度差を取り入れた日本人による暦を作成。画期的な「貞享暦」の制定や日

本流の星図や天球儀を作成していた。秦山は春海に手紙を送って入門を許され、天文・神道の両面で通信教育の形で教えを請い、師もまたこれに応え、愛情に満ちた教育を受ける。秦山が江戸へ行った「東遊紀行」の目的は渋川春海への面会にあったと考えられる。

４．野中　婉（1661～1726）（のなか　えん）

秦山が幽閉中の野中兼山遺児を知り、婉の兄・希四郎（秦山より 8 才上）へねんごろな手紙を送ったのが文通のきっかけとなった。貞享 3 年（1686）の初夏、秦山西遊（幡多郡）の途中、宿毛の野中婉宅を訪ねた（その時婉 26 才）が、獄使にさえぎられ、野中兼山遺族の誰にも面会できず、その後に希四郎は 42 才で死亡した。秦山は婉に弔文を送り彼女との文通が始まる。お互い学問の道で求め合うものがあり、婉は秦山を師父として慕い 20 年にわたる心の交流が始まる。

元禄 16 年（1703）、星霜 40 年ついに赦免解放の通知が届く。婉は 80 才余の生母と乳母を連れて城下朝倉へと移り（居を「安履亭」：あんりていと名付け）、医業の収入により自立した生活を送る。文通は彼女の精神的支えとなった。母が 82 才、続き乳母が亡くなり老女たちを見送った後、宝永 5 年（1708）父兼山が開発した新田地帯の一つである土佐山田中組に旧臣古槙氏（ふるまきし）の協力を得て、野中氏祠堂（野中神社：お婉堂）を建立。婉が 40 年も幽閉生活を強制された中でどのように医学を習得したかの一説に、秦山が医学的知識を持ち、また、薬草にも知識があり、機会毎に薬の調合につき二人の間に意見交換があったと云う。文通中に秦山への見舞として投薬の方法を述べている。

９　秦山先生の存在は現代において、どんな意味をもっていますか？

秦山先生が偉大な哲人学者であり、不遇のなかで学統をつたえひろめ、その時代と後世に果たされた偉業と人格は多くの人々から敬慕されています。野中兼山が失脚して後、藩の多数の学者が迫害され、国外に放逐されて南学の道統が消えた、いわゆる南学一空の時代を経て、秦山が出て、南学を復興し、国学神道をあわせて、これを一藩の学にとどまらず、国家皇室に対して大義名分を明らかにする学問へと発展をさせ、幕末維新における土佐勤王の志士の魂へと昇華させました。

ところが、儒学・朱子学が東洋専制政治の思想（イデオロギー）として機能し、わが国では江戸時代の官学となって、封建社会を支える柱となり、また、日本主義的古学は維新後皇学史観を生んで、日本の真の近代化をはばみ、あまつさえ帝国主義的発展と転落（敗戦）に手をかしたという歴史認識は、悲惨な戦争を体験した人々の心に今も残っていることは否定できません。

現在、秦山学の研究がすすんでいます。リベラリズム＝自由主義という西欧的価値観や概念を朱子学や土佐の歴史のなかから追究しようとする動きがあります。「自由」という観念は法と権利に基づく社会にしか存在しない観念であり、地位や儀礼によって人間関係を律する日本や中国などの東アジアの儒教的文化圏には問題意識がなかったというのが通説です。しかし、研究者によれば、中国儒教のなかに個人の自律性、内面的な倫理の主張、既存の権威や体制を批判し、何らかの要求をする姿勢があり、近世儒教思想のなかに「自由」の伝統を見いだそうと試みていること、また、わが国においても、山崎闇斎、石田梅吉、大塩平八郎、吉田松陰をあげて新儒学の自由の伝統が現れたものととらえることができるとしています。

人生と社会の真実を追究する学問思想は、洋の東西を問わず、おのずから真の”自由”の心

と高い倫理性をもって、既存の権威と秩序への批判と英雄的実践を生み出すものだと考えます。

遠い宗・元・明に発した朱子学、新儒学の伝統が、日本とりわけ土佐の地に南学の花を咲かせ、尊王思想へと展開、さらには自由民権論の土壌ともなったのです。

※リベラリズム＝自由主義とは、国家や集団や権威などによる統制に対し、個人などが自由に判断し決定するという考え方

天明の改革以来土佐の学徒は土佐南学の上に西洋の新思想を取り入れて活躍した人たちがいます。寺田寅彦（高知市：地理学)、牧野富太郎（佐川町：植物学)、山崎時光（佐川町：天文学)、上村直親（土佐山田町：医学）らです。佐川町には谷門学の流れを汲む名教館があり、藩政期には秦山及び門下生が教授していました。また、青山文庫もあり、人材を輩出しました。

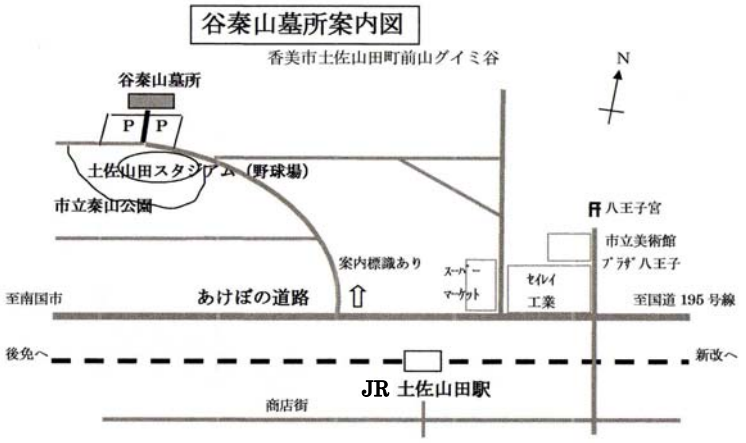
明治 14 年（1884）板垣退助が自由党を結成しました。土佐山田町談議所の嶋崎嘉平太の子谷川楽只軒（らくしけん）は城下中老格（知行 1200 石）の谷川家の養子となり、藩校教授館で学び、西洋学問研究のため長崎に留学を命ぜられましたが、事情があり、代わりに細川潤三郎が行き、潤三郎は土佐へ自由思想を輸入する架け橋となりました。維新後、禄を失った楽只軒は談議所貴船神社の西で塾を開き、漢学と西洋の学問を教え、門人は実に 500 人その中から松尾富功禄、楠目玄その他多くの自由民権論者が出ました。楠目玄は板垣退助自由党にいち早く入党しました。山本忠秀の自由懇親会、加茂の中内庄三郎等の先心会等々、香美市土佐山田町にも西洋の自由思想が流入していたのです。これらは「自由は土佐の山間より出づ」といわれる言葉とおりの動きでした。

また、森田家文書（土佐山田町史巻二）でみる森田家は佐岡村の郷士職や庄屋を勤め、明治維新では本家郷士第六代の森田団右衛門が戊辰の役で勲功をたて、後にも衆議院議長・京都市長の森田茂などを輩出した名家です。この森田家と庄屋山田谷氏との間には互いに姻戚関係がみられます。（別表系図参照）両家はそれぞれ娘を嫁がせて緊密な関係にあったようです。

明治維新に重大な役目を果たした土佐南学は、第二次大戦後の主権在民、戦争放棄、基本的人権尊重の平和民主日本国憲法下においても秦山及びその学徒の日本主義・自由研学・集団研学の精神は今日に受け継がれています。西暦 2018 年は谷秦山先生没後 300 年を迎えます。

「学ぶ」ということは真理を追究すること、自己研鑽を深めること、不条理に立ち向かうことであります。苦難を乗り越えて自分の目指す道を切り開いた秦山先生の学問と生き様は現代を生きる私たちの心に強烈に響き迫るものがあります。秦山先生を知らなかった人も知っていた人も改めて先生の偉業と偉大さを認識できた思います。先生への敬愛と共感の輪が広がることを願っています。

みなさんの中には、志を立てて様々な受験の難関を乗り越えようとしている人もいると思います。一度、秦山の墓所を訪れて、松風冷々と吹き渡るぐいみ谷にたたずみ、思いをはせてみてください。祈願成就を心からお祈りします。



10　秦山先生は各地へ旅行したそうですが何のための旅行でしたか？

○秦山の旅行

秦山の旅行回数は『秦山集』に短期・長期あわせて 22 回みられます。主な旅行として、

「西遊記行」	貞享 3 年(1686）5 月～8 月	24 才	宿毛地方
「渭南（いなん）紀行」	元禄 12 年(1699）1 月～2 月	37 才	土佐清水・柏島地方
「高南紀行」	元禄 16 年(1703）3 月	41 才	須崎地方
「東遊紀行」	宝永元年（1704）2 月～6 月	42 才	江戸地方

があげられます。秦山の旅行は作詩旅行とも云われ、主な旅行の作詩数は 565 篇（編)、『秦山集』第一巻から第七巻までの作詩総数 880 篇（編）のうち約 64%が旅行詩で全部が漢文詩となっています。

○秦山の旅行目的

それぞれの旅行に目的があったようですが、おおむね次のようなものでした。

1　歴史的旧跡の探訪
2　名勝・名所の見学
3　諸友・盟友の訪問
4　式社考作成の研究
5　野中遺児との面会
6　売薬行商での収益

○秦山の「西遊紀行」

秦山 24 才、最初の作詩旅行であった「西遊紀行」について紹介します。少し長文ですが、読むほどに味わい深いものがあります。

1　西遊紀行の行路と目的

今から約 330 年以上前の貞享 3 年(1686）5 月上旬に高知を出発して、朝倉から弘岡、高岡、宇佐、戸波、須崎、久礼、影野、窪川、佐賀、伊田、有井川、入野、下田、足摺岬、中浜、清水、加久見、益野、竜串、月山、西端の柏島へ。野中兼山遺跡を見て安満地を通って宿毛へ着く。出発して丁度 30 日目でした。

宿毛で約一週間滞在して、野中兼山遺児たちの幽閉地を訪れたが会うことが出来ず帰路につき、篠山論争地に登り、有岡、中村から往路を逆に通って高知に帰りました。8 月までの約三ケ月の旅行でした。

この**旅行の目的**は前記のうち、**5　野中遺児との面会、6　売薬行商での収益**が重要で、兼山の偉業と学問を知り、その失脚と追罰として幽閉されている遺児たちの赦免や激励・指導のため遠く文通を交わしていましたが、何とかして初対面したかったことでしょう。また、この頃、秦山一家の暮らしは困窮が甚だしく、「売り薬にて少々のもうけのため（秦山先生手簡)」に幡多へ赴いたわけです。　※遠く文通＝地理的にも、面会謝絶という障壁からもの意

2　詩題の場所とその説明　（次頁「谷秦山の西遊紀行路略図」を参照）

秦山の詩文は非常に難解です。その理由は

1　歴史的知識の深さ
2　学問的素養の高さ
3　神・儒思想の深さ
4　使用漢字の複雑性

などが、総合的に詩の根底にあり、しかも現地に立って眼前の現象を見ながら詩い込んでいるからです。

以下、行路図の番号にしたがって、詩文（全 54 首）の解釈とその背景等を述べてみます。地名は分かるように現在地名で表記しています。なお、原漢文は紙数の関係で省略します。

1. 蝦橋（えびがばし）（高知市朝倉海老槇）

蝦橋の上に吉良城趾がある。吉良式部少輔の朝倉古城趾は橋の右にある。朝倉峠を越えて仁淀川の渡しへ行く。

※吉良氏は土佐の名族として弘岡の吉良ケ峰に在城した。吉良宣経（のぶつね）は、南村梅軒を周防（すおう：山口県）から招いて四書五経を講じさせて、梅軒の講義した講堂跡は、谷寺中、山崎闇斎、谷秦山へと続く土佐南学発祥地となり、幕末勤皇思想の原点となった。

2. 清瀧寺（きよたきじ）（高岡村：現土佐市）

高丘ノ村の北に在る。山路は奥深くて、ほととぎすが飛んでいる。自分の生涯は雲や水のように終わりたいものだ。高くそびえる山の木々の緑の山気が自分の衣を濡らしているのがたえられない。

※清瀧寺は四国遍路霊場 88 ケ所の第 35 番札所である。

3. 蓮池城趾（はすいけじょうし）（土佐市蓮池）

平安時代末期、蓮池権守家綱は平家に組みし、平治の乱で土佐に流されていた源希義（みなもとのまれよし：源頼朝の異母弟）が頼朝の挙兵に呼応して夜須七郎行宗へ向かう途中、南国市年越山（坂折山）で希義を斬り殺した。蓮池権守は夜須七郎に討たれた。

蓮池城は室町時代は大平氏が居城し、長宗我部時代は一族吉良左京之進親実が治めた。

4. 又（おなじ）　略

5. 塚地有感（土佐市塚地）

塚地峠を越えて宇佐浦に入る。塚地は墓石の製作地として有名。

人間は墓へ入らない者はない。誰でも墓地を認め、嫌ってさけて生きることができようか。千年もいつまでも仰ぐ、岩が高く重なり合ってけわしい獄翁。谷あいで殺されたかしらが永久にそれを教えている。

※獄翁（ごくおう）　人に威圧感を与えるいにしえから高くて険しいさま

6. 独鈷山（とっこさん）**青龍寺**（しょうりゅうじ：土佐市宇佐町龍）

多くの波がまるで弓のように、幾つも幾つも打ち寄せて、大きな岩も砕いてしまう。日の出の地域はここが南の果てである。土地は牛の角のように曲がり、波ははまぐりの口も閉じ合わせる。谷は深くて青龍寺は古い。海女の家は新しい。

※青龍寺は四国遍路霊場 88 ケ所の第 36 番札所である。

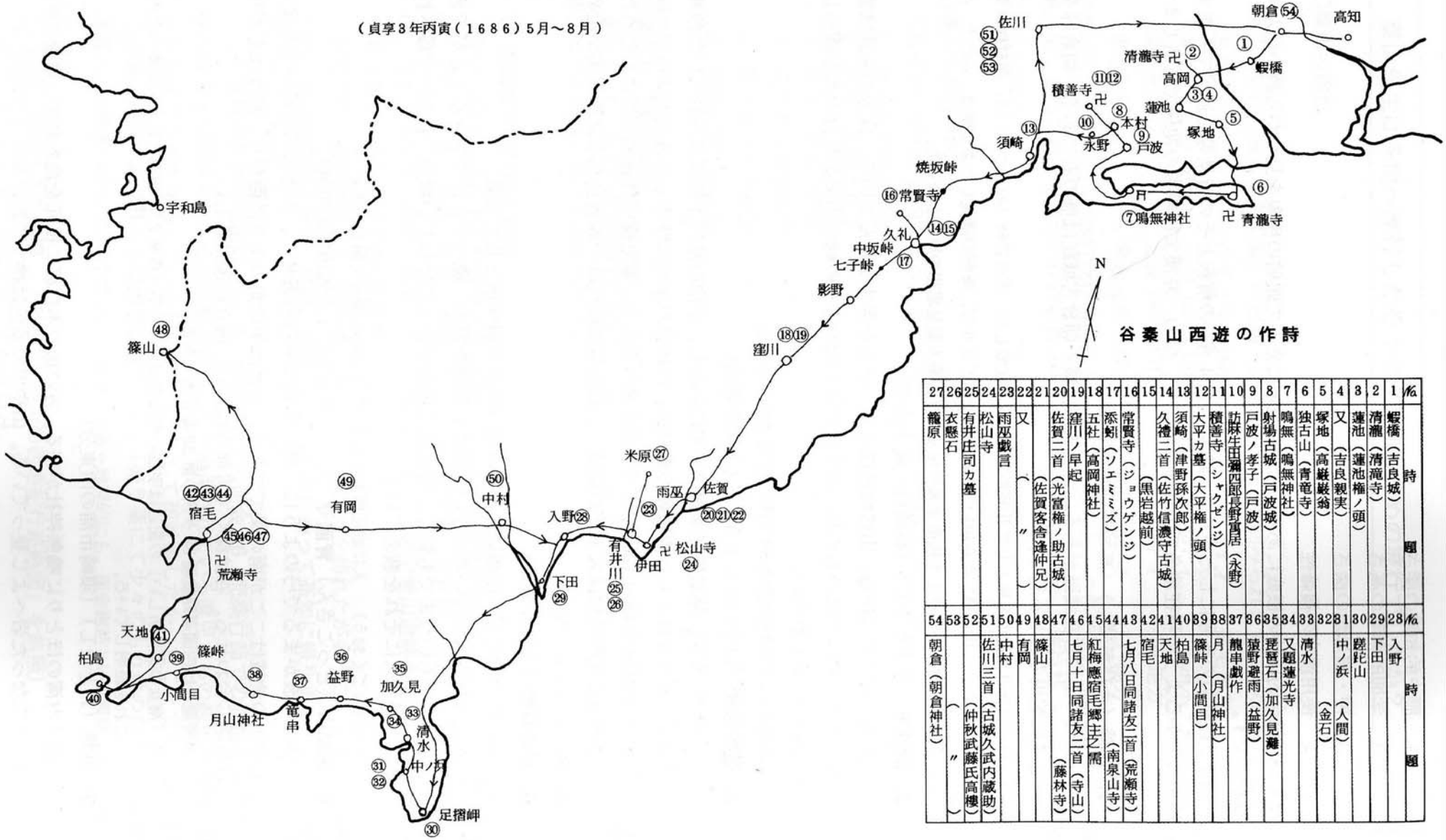
※「海女の家は新しい」の記述は宇佐の町は秦山旅の前年（貞享 2 年 1685）に大火があったのでこれを証明している。

7. 鳴無（おとなし）（須崎市浦の内東分）

浦ノ内湾のほとりに鳴無神社が在る。古い松の木は波に根元を洗われて、貝殻（カキ）は段々になった岩へよじ登っている。山や川の景色は捨てておけないように美しい。薬

谷秦山西遊行路略図

（貞享3年丙寅（1686）5月～8月）



谷秦山西遊の作詩

仮	詩題	仮	詩題
1	蝦橋（吉良城）	28	入野
2	清瀧（清竜寺）	29	下田
3	蓮池（蓮池権ノ頭）	30	蹉跎山
4	又（吉良親実）	31	中ノ浜（人間）
5	塚地（高巌巌翁）	32	（金石）
6	独古山（青竜寺）	33	清水
7	鳴無（鳴無神社）	34	又題蓮光寺
8	射場古城（戸波城）	35	琵琶石（加久見灘）
9	戸波ノ孝子（戸波）	36	猿野避雨（益野）
10	訪麻生田彌四郎長野寓居（永野）	37	醜串戯作
11	積善寺（シャクゼンジ）	38	月（月山神社）
12	大平カ墓（大平権ノ頭）	39	篠峠（小間目）
13	須崎（津野孫次郎）	40	柏島
14	久禮二首（佐竹信濃守古城）	41	天地
15	（黒岩越前）	42	宿毛
16	常賢寺（ジョウゲンジ）	43	七月八日同諸友二首（荒瀬寺）
17	添鉏（ソエミミズ）	44	紅梅應宿毛郷主之需
18	五社（高岡神社）	45	（南泉山寺）
19	窪川ノ早起	46	七月十日同諸友二首（寺山）
20	佐賀二首（光富権ノ助古城）	47	（藤林寺）
21	（佐賀客舎逢仲兄）	48	篠山
22	又（〃）	49	有岡
23	雨巫戯言	50	中村
24	松山寺	51	佐川三首（古城久武内蔵助）
25	有井庄司カ墓	52	（仲秋武藤氏高樓）
26	衣懸石	53	（〃）
27	籠原	54	朝倉（朝倉神社）

の材料を採集して帰り、粒を切りきざみたい。

8. 射場古城（いのほきこじょう）（土佐市下本村）

戸波（へわ）に在って、かって津野家の系図を調べた。永正 14 年（1517）4 月 14 日に、津野氏がこの城を攻めたが惨敗した。この戦いで、刑部少輔元実以下戦死した。今でも城北の恵良（えら）にお墓がある。

※戸波城は射場城とも云われ、元は津野氏の居城であったが一条氏に奪われた。津野軍は一条氏と久礼城主佐竹氏から挟み打ちにされ、恵良沼の深みに追い込まれて全滅した。

9. 戸波の孝子（へわのこうし）（土佐市戸波鴨地）

戸波の孝子（孝行な子）は農夫、安右衛門・八左衛門の兄弟である。どこにも類がないだろう。父平兵衛は 60 才で失明し、貞享 2 年（1685）に 80 才で死亡した。秦山は、兄弟とその妻二人の両親への孝順について郡中の人々は至孝だと云ったこと、殿様（山内豊昌）から「これは珍しい」と米 20 俵を与えられたことなどを長文で伝えている。秦山は朱子学の忠孝の考え、とくに孝を重んじる考え方から詳細に記述したようだ。

10. 麻生田彌四郎永野ノ寓居ヲ訪フ（土佐市永野）　※寓居　かりずまい

家は青々とした山に向いており、庭は池に水をたたえている。多くの竹があり、家はわずかに二間である。そこは鬼化け物やいざご虫・毒蛇のいる所ではなくて、真夜中まで小学の書籍を細かく批評しあった。

※秦山が旅行中に泊まった唯一の個人宅である。元禄 16 年（1703）に再訪して作詩している内容;らみて、余程の人物と考えられる。　※いざご虫　トビゲラの幼虫

11. 積善寺（しゃくぜんじ）（土佐市宮の内）※当時から寺は無く、現在、地名として残っている。

薬師十二神と三千仏は草の間に散らばっている。上梁の棟札の記録には、長宗我部元親・盛親の父子が朝鮮の役に往き来る時に、安全を祈るためにこれを再建したものである。多くの仏像が倒れて、そのロびるのふちに草が上っている。旅人は苦しく首を回して見ないでほしい。

12. 大平氏の墓（土佐市宮の内）

墓は積善寺にあって、永禄 9 年（1566）に大平権守は長宗我部元親に攻められ、この寺に来て自害した。時に 16 才であった。従者 8 人で奮戦して戦死した。

13. 須崎（須崎市）

津野孫次郎は体も弱く色町をおさえていた。物静かで上品であり、足を水に濡らすことさえもはばかっていた。走らず、戦でも守らず戦わず、元親も孫えの世継ぎを誤った。岩村の孝山寺には親忠の墓が実在する。

※香美市神通寺（岩村郷旧孝山寺）の小祠津野神社に津野親忠の墓がある。

※津野氏は葉山村の姫野城にあって須崎城は支城であり、元親の三男親忠を養子として須崎城に迎えた。親忠は津野軍を率いて朝鮮出兵して戦った。それにしても津野孫次郎と称する者は、親忠を含めて五人が系図にみえる。詩文の柔弱な人物は親忠であろうか。

14. 15. 久礼（くれ）**二首**　（中土佐町久礼）　※旧字体　久禮

一首目・佐竹信濃守の古城がここにある。信濃守は一条公の家臣の長であったが、これにそむいて長宗我部氏に降った。名護屋、門屋、焼坂は、険しくて多くの折れ曲がり道であるから、汗が雨のようにしたたる。久礼の港口に立って涼しい風を得ると、佐竹氏の悪い評判が残っていて人をして吐かせるようである。

二首目・黒岩越前は心と背骨が寒い。久礼に送り出す藤氏の女を、ゆつたり落ち着いて義に就く七日の後に、振り返ってみれば、佐竹氏は犬か鼠のようにいやらしい。越前

は安芸備後守の家臣で、永禄 12 年（1569）に長宗我部氏が安芸を攻め敗り、国虎は安芸の浄貞寺で自殺した。越前は国虎の妻を実家の幡多一条家に護送し、久礼へ送った。

16. 常賢寺（じょうげんじ）（中土佐町久礼）

夕日は西に沈んでにわか雨になった。やせた杉の木や細い道の中に立ってあちこちと歩き回る。参堂に行き思うには、最も残念なことは大切な時機に遅れをとったことである。立沢山の一本の梅の古木よ。

※佐竹氏の菩提寺で、佐竹信濃守義直が天正初年に永円寺から移した。

17. 添蚓（そえみみず）（中土佐町久礼）

石だたみの道は、けわしい岩である。ソエミミズの坂。海からの風は熱風を吹きあげ、夏の入道雲が飛んでいる。感心してほめる。まさに太陽をも動かすような思いがする。立ち止まり行きなやむ。斜めにカンザシを差した薪木（まきぎ）とりの女が帰って行く。

※中村街道のうち、久礼長沢から床鍋（現四万十町）に至るまでの間にあり、みみずがはったように屈曲して急坂の悪路であったためにこの名がある。現国道 56 号線の久礼坂と呼ばれる道路のすぐ北側の尾根を通る 1㌔未満の小道。

18. 五社（四万十町窪川仕出原）

天上のすぐれた道理は、五社の中にきわまっている。社前でお唱えしながら一つの源をみる。古来からの伝えがちらばり失われてしまって、探し求めるところもない。念じながら過ごす神代の数千言を。

※窪川の高岡神社は、古くは仁井田明神と云い、祭神は大日本根子彦大瓊尊（おおやまとねこひこだいやのみこと）など五神を祭り、仁井田七郷六十八村の総鎮守で社殿が五棟あるため、五社と云った。

19. 窪河ノ早起（四万十町窪川）

鶏の鳴き声で眼ざめたら馬がみえる。土地の習慣で、馬小屋の間に鶏小屋がかまえてある。日の出は東とは思えない所から出ている。毒気の霧が早くて海のようである。天地の中を浮き泳ぐようにみえる。

20. 21. 佐賀二首（黒潮町佐賀）

一首目・光富権助の古城はここにある。彼はこの村五百石を食み、元親が伊予攻めの先鋒となる。松の木がうっそうと茂っている佐賀城、遠く海上には舟の帆が遠くまで見えて、天高くまでかたむいている。昔は、元親の伊予攻めで苦しんだが、光富の名前は長い年月の間轟いて、きもが寒いと恐れられている。

※光富権ノ助は佐賀城主で、初めは一条氏に属したが、のち元親に降る。

二首目・谷家次男の又次郎（秦山より 5 才年上、藩の下役人として佐賀に居た）と会った時の詩である。この詩は秦山の眞情が溢れていて心を打たれる。原漢文を掲げる。

二兄ハ行役シ弟ハ漂白。白髪ノ老親衣食寒シ。

誰カ識シ形容變衰ノ後。尚餘ス雙涙ノ耐ニタル悲ミヲ歎ニ一。

訳詩　二人の兄は役人で勤めているが、弟はさまよい歩く。白髪の老親が衣食にも困っている。その顔形が変わり衰えた後のことを誰が知っているのだろうか。そのうえに両方の眼から流れる涙で悲しみ歎く辛い心に耐えかねていることを。

22. 又（おなじ）

旅館で二人で会い酒を充分にくみ交わす。腰につけた幾らかの金を惜しまずに使う。長い年月に山や海を旅した路の苦しみを歎く。兄にまかせてセキレイが野原の上を飛びまわるような心である。

23. 雨巫戯言（あまかみこのぎげん）（黒潮町佐賀）　雨神子

長く日照りがする時に、かよわい巫（みこ）を記録する。雨が巫の坂の頂上は、緑色の苔が生えた崖の上を回る。その名前を問うと義を思って、すぐに記しとめることがある。即ち、今は六月であるから大地はひび割れしている。多くの旅人に会い何よりも先にその人の鼻を見る。

※ここは、今も地名が「雨神子山」の「雨神子」として残っているが、宮趾などはなく、「シイノ木坂」を登りつめると海岸の突端に出る。雨乞いしているところへ秦山が通りかかったのだろうか。旧暦六月は土用で盛夏である。

24. 松山寺（しょうざんじ）（黒潮町伊田）

山を望んで寺を知り寺の名を知る。大変高く古い松がそびえて、松風の音が雲にとどくようである。高く立派な行為は、ただ単に雪が降った後の神々しさを、恐れうやまうことだけであろうか。いやそうではなくて、涼しい風がまるで冬の寒さの気節を約束しているかのように冷たい。

※松山寺は「アマガ谷」にあって、紀貫之の筆になる「月」の額があり、江戸時代の学者、歌人で藩政にもたずさわった尾池春水によって紹介された。

25. 有井庄司墓（ありいのしょうじがはか）（黒潮町有井川）

有井川にあり、この地は即ち、後醍醐天皇の第一王子尊良（たかなが）親王が移され、住まわされた所であって、有井の石碑は親王が建てたものである。やがて、鎌倉幕府が倒れ、南北朝が統一されて元号を元弘に戻したので、親王は京に帰られた。その年のまだ変わらないうちに有井は病死した。親王は大変この死を悼まれたとのことである。

26. 衣繋石（きぬかけのいし）（黒潮町大方有井川河口）

里人が伝える。笥殿（しでん）の衣がこの石にかかると、太平記ではおなじでない。

離別の辛さが広々とかすんで寝間着が冷たい。なぜ、激しい波にも耐えられたのだろうか、一枚の衣が少し心を砕いて、転び入らないように。ここに来て旅人は涙を流すことをこらえることができない。

※有井川の河口から約 200 ㍍沖合にある。親王の臣が京から姫、息女に衣を送ったが、途中海賊に奪われたが、その賊の舟も沈んだので、衣は流れてこの岩にかかっているのを漁夫が見つけて親王に捧げた。　※「御笥殿」ゴシデン　衣類などを入れる箱

27. 籠原（こみはら）（黒潮町大方米原：こみはら）

天地を回り転ばすような、のるかそるかの両親王。今の忠義な血は、やまなしに一杯である。仁義を成しとげる越山の雪、むしろ、それよりもすぐれている。鎌倉の独りの夜の霜。

※一宮親王（尊良親王）の屋敷趾で、米原旧跡があり、親王は、はじめはここに居られて、後には有井川に移られた。

28. 入野（黒潮町大方入野）

かって聞くのに、谷氏がこの松を植えた。膨大な本数の松の大木が、青空に高くそびえている。松林の中は、うっそうとして暗くて別世間かと疑うけれども、大昔からの神様である賀毛の宮がおわします。長宗我部元親の時に、谷忠兵衛が中村城を守っていて、罪人に課してこの松を植えることを命じたと云う。

※賀茂神社　土佐国式社考 21 社の一つ

29. 下田（四万十市下田）

夕方、ともづなを解いて下田港を舟でゆく。白い壁や紅の手摺りが湖水に写っている。

よいことには、今夜は満月であって、弓が青い海に張ったように一帆の風が吹いている。

※四万十川の河口にあり、一条時代から中村の外港として栄えて、木材・木炭などの集散地として重要な役割をはたした。

30. 蹉蛇山（さださん）（土佐清水市伊佐足摺岬）

蹉蛇山は室戸や熊野と共に、南海の三つの大きな台地の端にある岬である。今こころみに高い塔に登ってみると、広い広い世界も一つの板台のおわんのようである。

※蹉蛇山補陀落院金剛福寺（さださんほだらくいんこんごうふくじ）は弘仁 13 年（822）嵯峨天皇の勅願で空海が開創した。1256 年火災再興、室町時代の仏像を数多く伝存する。山内忠義寄進の石塔がある。四国最南端の岬で断崖絶壁が有名。下田から足摺までの途中の伊豆田坂には、伊豆田神社があり、土佐国式社考 21 社の一つで、当然参詣したことであろう。

31. 32　中浜（土佐清水市中ノ浜）

浜の口の人家は竹があり、丸く太い柱を串ざしにして生活している。往来している旅人は大変多くの歌を詠んでいる。私も二首作った。

一首目・人間は天に通じないのを無事としている。あわれみころす律陵（律令）がよその国の人に負けたことを。当然に忠臣の背骨を信ずべきである。この君は一区切りで終わるが、これは千年も将来へのことである。

二首目・金石は固く綿は柔らかい。真心に徹するところは他の理由ではない。私は今、うやまい信ずる坎享の象（かんきょうのぞう）を、堅い木は頂をつくし、青い竹が長く伸びている。

※足摺半島の西岸、音無川の河口にあり、加久見左衛門の給地。承応 3 年（1654）建立の一条氏息女の墓があり、天保 12 年（1841）漂流し 11 年後に帰国する万次郎の話は勿論 150 年余の後のことである。

※坎享の象　坎は易の八卦の一つの悩み、坎象は 64 卦の一つ険難の象。

33. 清水（土佐清水市清水）

南海では並びない良港の清水港。経過をみだりに思う鉄甕城（てつおうじょう）。世の中は今ずっと以前から平和である。北方の異民族の船も絶えて久しく足跡もなく、熱気の病気も晴れている。

※鉄甕城　中国や朝鮮の城に多い。城の形が陶器のかめに似ているところから云う。日本では外枡形虎口に造りが似ている。※明船の漂着は元和 2 年（1616）で 70 年近く前のことである。次の漂着は 19 年後の宝永 2 年（1705）のことになる。

34. 又題蓮光寺（土佐清水市清水）　※又題＝同題

古い杉の大木が太陽をさえぎっている蓮光寺。飛ぶ鳥は風に高く上がり、海の霧も晴れている。病気の客はどうして、少年の薬とおなじくすることができようか。黒く甘い大根はいまだに覚えがない。午後の鐘が鳴っている。

※浄土宗で建久 2 年(1207）に、法然の弟子が開創したと伝えられる。

35. 琵琶石（土佐清水市加久見）

加久見の灘にあって、中村藩主山内君が、かって取って江戸邸に置いていたが、後に災い祟りあると云うことを以て還し捨てた。今は往来する旅人がこれをうやまい祭っている。

東関千里の月を見ることを恥じて、むなしくする淋しい月世界の果て、私はここへ来てたまたま潯陽の曲を得た。にわかに雨が降ってきて青海の波がやかましい。

※潯陽の曲（しんようのきょく）　琵琶で奏でるおめでたい謡曲の一つ。

※加久見城主の加久見左衛門大夫は、一条兼定が土佐を追われた時、中村へ押し寄せて老臣を殺した。それが元親に乗ずる口実を与えて一条氏は滅亡する。その後は元親に降り、朝鮮の役では功をたてて釜山で病死した。

36. 猿野避雨（ましの雨を避く）（土佐清水市益野：ましの）

雨をついて突然に過す青い竹作りの垣根。少年が机にもたれているが眉が秀でている。旅館はもの淋しくて風流を尽くしている。すずりを借りて、気晴らしに猿野の詩をかく。

※村名「ましの」に猿（ましら）と云う字を使っている。秦山は当時の益野の様子をよくあらわしている。

37. 竜串戯作（たつくしぎさく）（土佐清水市竜串）

一つの湾曲した長い岸が清く明らかで天は夜もない。人間も什器もみがきたばねたまげのようである。定めしこれは、竜宮のおろか童子のようである。本を読んでもうなずくこともなく、ただ、おもちゃのようにもて遊ぶだけである。

※何万年ものあいだの海蝕で特異な形の奇岩怪石の景観が有名である。

※秦山先生の漢詩原文の熟語は次のとおり。

「磨鬟（まかん）」みがいて丸くたばねたまげ。自然の様子などに使う。

「癡童子（ちどうじ）」おろかな童子。癡を使う。

**38. 月　**（大月町才角」（おおつきちょう　さいつの）

この地に石あり。状態は半月に似ている。空海もこれを尊宗して四国礼参の一つの区とした。入れば深い山で静かで、出れば磯と灘が清く晴々としている。まことによい所である。

土佐一条公の詩がある。それは自筆で、ここにしまわれて居るとのことである。その詞に云う。「西東に出入りする月の山はここであり、露のすみやかな心なるなん。」と云う歌である。私は謹んで心の真意を唱和する。

見るに、城のあたりは北極星がかかって、はじめて驚く、明月が冬枯れの淋しい林のうえに落ちることを。今はだめで昔はよかったとする悪いくせも、繰り返して論せよ。長い年月を祝う心。

※南照寺は、御月崎の月浦にあり、月宮殿月山で祭神は「月弓大神」で空海の開基した番外札所。明治以降は月山神社になった。

39. 篠峠（しののとうげ）（大月町古満目：こまめ）小間目

小間目の頂上は、路が多くの折れ曲がりがあり、土佐をきわめようとするのだが、いまだにできない。六月で天は高くもやもかすみもない良い天気である。九州の九ヵ国もすぐ目の前に見える。

※秦山は 13 年後の渭南旅行でもこの地の「周防潟」を訪れている。

40. 柏島（かしわじま）（大月町柏島）

柏島に来てみれば、古いとりでがある。舟を引いて青く紺色の海を静かに渡る。漁師の家もお寺も片隅に集まっている。土佐の国の端にある。さしかけの碁石のようである。（土佐を碁盤にみたてると柏島はそばに一つポツンと置いてあるように）

41. 天地（大月町安満地：あまち）

天と地が生まれる前から一体である。波の紋が切れたり、また連なったり繰り返している。素晴らしい眺めはいつまでも忘れないようだ。暗闇みの中で幾千年も続いている。

42. 宿毛（すくも）（宿毛市）屋敷を出発してから、今日は 30 日になる。荷物を卸してしばらく宿毛郷にいよう。野田氏が、昔した武平城がある。縦横の角度や高低もよく平らか

で、樹木も青々と繁っている。牛の瀬（宿毛の東南を囲んでいる）はこんこんと湧き出る水が藍よりも青いほどで、鯉や鰻が肥えて素早く動くので見失う。船を放してすぐに下ると錦口（宿毛の西にある）である。歩いては止まり、手をかざしては山を仰ぎ見れば山はけわしい。土佐と伊予が噴き出し肉迫した天正の役、激しい風は葉を吹き払って新城をとる。湾の中心には大島がある。はまぐりやあさりは、腸にかにをはらんでいる。東西南北一円は鏡のようである。篠山は青黒く茂った山に、もやがかかって、突きたってどっしりとしてそびえている。

※宿毛は鎌倉時代の初めから幡多庄と呼ばれて九条家が領し、次いで一条家の荘園として発展した。天正 3 年（1575）の渡川合戦で宿毛の諸豪族は、一条氏に組みして戦ったが敗れた。長宗我部氏の重臣野田甚左衛門が居城した。

※兼山遺児たちの幽閉は、寛文 4 年（1664）で、すでに 23 年経過して、長男静七、次男欽六はすでに亡く、それぞれ 7 年と 3 年たっている。また、三男希四郎 30 才、婉 26 才、四男貞四郎 24 才であった。しかし、ここでは、遺児についての詩文はみられない。

43. 44. 七月八日同諸友二首（多くのともにおなじくす）

一首目・うす暗くなった頃、荒瀬寺をはるかに遠く尋ねていく。古い墓がるいるいと重なり合って芭蕉の葉が巻いている。まさにこれは秋の月寒い水の所で、言葉が伝えないほどのひどいもってのほかで、知っている者だけには、はっきりしていることである。（古荒瀬）

二首目・よく晴れた夜、ひっそりとして静かで柿の葉が重なる。友人が相対してきちんとした態度で静かである。鳥が鳴き月が落ちて当然眠らざるべからず。はるかに聞く南泉寺の鐘の音。（右は和田に宿す）

※南泉山東福寺は禅宗で池泉あり、故に南泉山と号す。六世白明和尚は泉岳寺で、赤穂義士が討ち入りから引き上げてきた時に、義士四人の辞世をもらって帰り、寺宝として伝えた。

45. 紅梅應宿毛郷主之需（こうばいすくもごうしゅのもとめにおうず）（宿毛市）

聞くところでは、古い梅の木は紅色をのべ広げるということである。なが雨は秋天のようだから岸辺でゆだねる。寒い気節は昔も今もかなわない。ただ、宮殿の僅かな涼しさだけを動かすだけではなかろうか。

46. 47. 七月十日同諸友二首（多くのともにおなじくす）（宿毛市）

一首目・寺山は熊野三社の神である。むずかしい妨げやあやしげな化物は仏教の言葉である。空海の 42 才の像は、白い粉をつけて、緑の眉ずみを引いたような美人で、まるで綺麗な女のようである。（右は寺山）

二首目・土佐一条藤林公（房家郷は香火寺藤林寺と号す）は、創業は艱難（かんなん：なやみ・苦しみ　「・・辛苦」）で夜は錦を飾る。寺の門は半開きになって、秋の日は真昼であり、譬喩品（ひゆほん）を香をたいて座って読む。（右は藤林寺で法華経を読む）

※譬喩品（ひゆほん）　教説を理解するために、周知の事実に比較して説く八種の一つ。

48. 篠山（ささやま）（宿毛市篠山）

篠山は秋七月で、草樹は寒風のためにはげている。両国は一目では見えない。しかし、九州は一つの小さなさかずきの中にある。雲や雷は山の中腹を過ぎていく。神社の社殿は空高くそびえて、祈り祝いは今は恨みもなくて、みずから嬉しくて、萬弓（ばんきゅう）をよじ登る。

※萬弓　弓を一番張った弓なり状態、形（かまぼこ状）を云う。

※宇和島藩と土佐藩の国境争いは、「沖の島」が正保 3 年（1646）から 10 年続き、万治 2 年（1659）

5 月に土佐藩が勝訴したが、一方の「篠山」は明暦 2 年（1656）から争いが激しくなり、土佐藩敗訴の幕府裁定となった。兼山が解決に苦心したが、松山藩主松平定行の圧力があった。これは万治 2 年（1659）11 月である。なお、篠山権現や観世音寺は番外札所である。

49. 有岡（四万十市有岡）

日蓮の意気は有岡村にある。家々は残らず花押にうずくまっているのを見る。一人の士が耕さなければ、世の中は餓すようになる。正しさ無くて誑嚇（きょうかく）する立安論である。（彼の書は立政安国論にある）

※真静寺（しんしょうじ）は、有岡領主の有岡民部少輔が上洛の際に、日蓮の講話を聞いて深く帰依して、元享元年(1321）創建した。土佐法華経道場の最初として、元親も優遇したと云われる。

50. 中村（四万十市）

七曲（地名）の秋は、晴れ渡っている栗本城。おおあわは、広々とよく広がり、なすは傾いている。渡川（現四万十川）の対策がないため毎年川水が溢れている。崩岸（地名）の舟は終日横たわって三万石の中は平かで、手のひらのようである。一条公の家が断絶して亡び、名前だけが残っている。今日は国中が兄弟のように和やかである。土佐の幡多には、このような世情をみることができる。

中村は、土佐の国の子城で、国主の親族がこれを領す。古城は今は愛宕町の名である。

※山内一豊は、弟の康豊に中村三万石を分与して、土佐国西部の守りとした。康豊の長男忠義は一豊の養子として二代藩主になり、次男政豊が中村領主を継いだ。

51. 52. 53. 佐川三首（高岡郡佐川町）

一首目・古城久武内蔵助は、国を痩せさせて、肥後の国へ逃げかくれた。七尺の屏風幾千畳、あつかましくも軽装でいたということである。久武は肥後の国主の家来となり、邸宅におさまらないので、人々は皆んなこれをいかぶった。機に臨んで金屏風を数百も出したり、門戸や壁をみなこわしたりした。この長宗我部の古い器は、久武が盗みしたものと云う。（右佐川古城）

二首目・佐川は土地が飛び出して、水は西へ流れている。山は曲がり、まだらであって黒と白が静かである。東のかこいは、はきものに穴があく三百里、また明日を追いかけて高楼（こうろう・たかとの）に上がる。

三首目・けわしく、あくまでかって佐川に着いた。詩に参じ、酒に参じ、また、禅に参ずる。今は八月十五日の夜中のようすは、千年あまり昔の楽しい人生を思う。

（右、二首は、仲秋に武藤氏の高楼で作る）

54. 朝倉（高知市朝倉）

天津乙女羽羽の神は、光り輝くこと幾千年。乱れうたがわしくあやしい鵞峰子よ。記文が後々の人々を誤る。

※鵞峰子（がほうし）　有名な林羅山の第三子林恕で、父を師とし幕府儒官、著書 60 余。

※朝倉神社の祭神は天津羽羽神（あまつははのかみ）である。上古この地の開拓神であり、中世以来は武家の崇敬あつく、山内家も歴代が社領寄進し造営した。朝倉神社後背の赤鬼山は神の籠もる山（神奈備）として古代祭祀の信仰対象であったと見られ、朝倉付近は古くから開けていたと考えられている。秦山集第 13 巻「朝倉神名の弁」として、鵞峰子と神名についての討論（味鉏彦根命：あぢすきたかひこねのみこと　ではなくて天津羽羽神である）がくわしく述べられ、秦山の正論となる。朝倉神社は土佐国二ノ宮とも呼ばれ、土佐国式社考 21 社の一つ。

3　むすびに

以上、秦山の著した西遊紀行のあとを、その詩文の解釈や背景を考えあわせ乍らたどってみました。秦山は、翌年も宿毛へ、その翌年も蓮池周辺へ、十年後に宇佐へ、十三年後に渭南紀行、十七年後に須崎方面へと再三旅行しています。秦山の土佐西南地域への関心の深さは野中遺児や売薬のほかにも「文化は西方から」といわれ、「古代は日本海側が日本の表玄関」と云うように、土佐でも、貿易船や漂流船、沖ノ島・篠山国境紛争、九州戸次川合戦など、歴史文化・交通軍事的重要性の高さを強く意識した結果ではないかと考えられます。

また、秦山の漢詩解釈書もみかけられず、その研究が一般化されていないのも不思議な感じがします。秦山学の奥深さと、兼山から秦山まで幕府・藩から圧迫された二つの事件が土佐全を震撼させ、余りにも悲惨であったことなどが影響しているのではないかと考えています。秦山は「南学四散」を再興、維新鴻業の真の源泉をなした筈であるのに、後の人々の華々しさが賞讃される割には、その真価が蔭にかくされたままとなっているように思われて なりません。

現代の車社会、高知～幡多を高速道路で一気に走るよりも、時間に余裕のある方は秦山の足跡を辿って国道・県道筋をゆっくり訪ねるのも一興です。西遊紀行はそのまま観光コースです。ぜひ、お奨めします。

※谷秦山の漢詩の地名に現在と違う漢字を使っていますが、当時は読み音が同じであれば、色々の字を使用しています。現在の地名の漢字になったのは近代になってからです。

11　秦山先生と野中婉のかかわりについて教えてください。

野中婉については前出「秦山に最も影響を与えた人」の項で述べました。ここでは、おさらいの意味で話をします。年譜は別表・資料を参照してください。

〇谷家と野中家の関係

まず、谷家と野中家の親戚関係を調べてみましょう。

野中兼山と正室市（いち）との間には子が無く、兼山は家臣の娘を側室に入れました。側室「池きさ」との子は、清七彝継（つねつぐ：長男）・希四郎継業（つぎなり：三男）・**婉**（えん：三女）・貞四郎行継（ゆきつぐ：四男）で、「美濃部つま」との子は、寛（かん：次女）・将（しょう：四女）であり、「公文かち」との子が欽六明継（あきつぐ：次男）でした。

「公文かち」は大忍（おおさと）の徳善村公文善左衛門の妹「かち」で、姉が岡豊八幡在住池内伝内の妻になっています。兄善左衛門は野中御家に出入りして、兼山と親しく、慥（たし）かなる婦人奉公を希望、私妹を世話したものと考えられます。「公文かち」は、先に嫁いでいた姉の子、池内家当主である池内伝兵衛とその弟小左衛門の叔母にあたることになります。

「秦山集」「谷氏族譜巻 49」に父重元の叔母の話として「池内氏へ嫁いだ人がある」との記述がありますので、この人物は同じく池内家へ嫁いだ「公文かち」の姉の姑ではないかと思われます。後年、池内氏の女は秦山子息垣守に嫁いでおり、つまり、谷真潮の母であります。この時点から、谷家と野中家は遠くても姻戚関係となりました。

〇谷秦山と婉の交流のはじまり

二人の文通のはじまりは三兄希四郎の死からですが、秦山と希四郎とは以前（11 年前）から文通がありました。それは秦山から希四郎に送った述懐の辞が野中家とのつながりのはじまりでした。秦山は彼らの幽居生活を「一室に東西を失う」と云うほど悲惨なものと知ったのです。

谷秦山の宿毛行きの話を聞いた池内氏に公文氏から嫁いだ姉（池内氏妻）もしくは甥が、秦山に対して、野中遺児らと共に宿毛に幽閉されている「公文かち」に伝言、安否を嘱みました。

結果、前出のように秦山は獄吏に阻まれ、希四郎、婉に逢うことは叶わず、記録も残していません。しかし、公文かちには言付けを伝えることができたものと思われます。公文かちは、すでに 3 年前（天和 3 年：1683）実子野中欽六明継を亡くしていたものの、希四郎、婉を可愛がり、谷秦山に二人の教授を願っていたのではないかと推察されます。

希四郎の死を知った秦山は弔文を送りその礼状を出した婉への秦山の手紙、「答安履亭夫人」が二人の交流のはじまりです。安履亭（あんりてい）は婉の号名です。

〇野中婉の医学

野中婉は赦免後、土佐郡朝倉村で女医として活躍しましたが、医学を誰に習ったのでしょうか。平尾道雄氏は「土佐医学史考」の中で、婉女は 40 年間も幽閉生活を強制されていたのに、どうして医術を習得できたのか不思議であると述べています。そこで同氏は婉女が後年作詩した「安田道玄良医に呈す」の字句に注目され、これは、はるか彼方にいる安田道玄を追想した詩文であろうと推察されています。

婉女と文通していた谷秦山は、医学の知識を持ち、薬草などに詳しく、婉女と医術や薬の調合のことなどで意見を交わしていたようです。それは婉女が秦山に宛てた見舞いの手紙に、気分を爽快にさせる効能がある丸薬を勧めている記述があることから分かります。

谷秦山も薬の行商をしながら宿毛への旅行の費用を賄っていたと思われます。

〇谷秦山と婉　心のかかわり

思いがけない秦山から希四郎への述懐の辞。朱子学に徹した秦山が兼山を景恋（けいれん）（あおぎしたう）し、その遺児に対して烈々とした真情を吐露して、読み了れば燃やせよ。と現在にあっても尚、迫り来るものを感じます。ましてや、幽囚すでに 25 年、一度も外界人と接したことのなかった野中一族にとって、未だ忘れられることもなく斯（か）くまでに支持してくれる人の在るを知ったことは感涙のきわみではなかったでしょうか。その内容の深さ、文章の重厚さに兄希四郎（31 才）、妹婉（27 才）も未だ見ぬ秦山をどのように想い描いたことでしょう。

希四郎弟貞四郎が没し、野中男子が絶えて野中家が断絶した元禄 16 年（1703）、婉（43 才）を含む婦女子六名が赦免されました。その時の婉の礼状は、

仰せの如く御赦免仰せ付けられ今一人昔恋しく愁涙かわきの段お察しあそばし下さるべく候。（中略）この度悲しみのうえの難儀始終誰を友と談ずるかたも御座なく（中略）左様御座候はば御そこ様へもお目にかかり御相談申すべき心得、万々願い存じ候・・・。

秦山は、朝倉へ移った婉宅へ婦人と幼児を挨拶に行かして、その後久しくして秦山も一度訪れていますが、婉の英姿、才学、熱意を賞讃した手紙や詩が残っています。

婉からの手紙は朝倉へ来てから頻繁と続いています。美しい筆、美しい文の中には秦山を頼りその学問に憧れその講義を聞きたい一心が、ひたすら秦山の来訪を待つ気持ちとなって満ち満ちています。その一部を紹介します。

- 御すき御座候はばかならずかならず御まちまいらせ候。ちと御談合申し度き事御座候間何卒御用御おき候てなりともお出でまいらせ候。（帰った年の 11 月 5 日）
- 十六日には墓参りいたし、感涙流し申す段お察し下さるべく候。世の中いずれを見まわしてもわれらほど仕合わせもの（不幸を逆に云ったもの）はなきと、ねざめの床にて涙を友といたし暮らしまいらせ候。（11 月 19 日）

その他 20 余通の手紙には甘えた文、すねた文、立腹反論した文、蟄居中の秦山には監視を考えてか自分の方も相手名も風流な言葉に替えて送られ、励まし或いは薬魚を送っています。祖廟建立(野中神社)の報告には、時節あって相共に祝いたかったと切々として涙を誘われます。

婉の秦山に対する心を代表するものは、秦山に送った次の短歌ではないでしょうか。

・すみ染にそめてもおなじまよいとは夢かうつつかあじきなの代や

・君と我ちかいしことは二世かけておなじはちすのえにしなるべし

・玉のをもなど長からで有べきかこれぞ誠の道に入りなん

亡き兼山に心をつくした二人であり、朱子学の精神を根底とした二人でした。花こそ咲かなかったが温かい心の交流はおなじはちすの上であったでしょう。秦山の葬儀二日後に贈った祭文には、心の中をことばとしてはっきり示し永の別れの餞（はなむけ）としています。

香美市土佐山田町ぐいみ谷には秦山の墓地があり、その西方約 1.5 ㎞の地に祠堂野中神社(お婉堂：市指定史跡：土佐山田町中組）が在り、婉も祀られている。現世では会うことも許されなかった二人が、来世ではこんな近くで三百有年静かに眠っている。

薄幸の婉に思慕する人のあったこと、逆境の大学者に慕い寄る女性のあったことに、ほのかな安らぎを覚えます。

野中神社・お婉堂（土佐山田町中組）

※野中神社・お婉堂　婉の父、野中兼山は寛文 3 年（1663）12 月 15 日 49 才中野で没した。忠臣古槇次郎八は同年 12 月 17 日 18 才で殉死した。婉（当時 4 才）ら子女は宿毛に幽閉されていたが、兼山四人の男子は死亡し、野中家断絶となってから、三人の娘（寛・婉・将）と母・乳母たちは赦免となった（この間 40 年)。同堂（神社）は、婉が宝永 5 年（1708）旧臣古槇重矩氏の協力を得て建立した。同氏は殉死した忠臣古槇次郎八の弟である。婉は祖先の神霊に忠臣古槇次郎八を合わせ祭り、古槇重矩氏に後の祭祀を依頼した。

○宿毛に流された兼山子女・側室一覧表

流刑時の年齢	名　　前	母の名	死亡年齢と時暦	備　　考
18 (一説 19)	米（よね）	やな	21（寛文七年） （1667 年）	高木四郎左衛門の妻 一女を生む
16	一明（かずあき）（清七・彝継（つねつぐ））	きさ	31（延宝七年） (1679 年)	
15	明継（あきつぐ）（欽六）	かち	34（天和三年） (1683 年)	狂死
8	継業（つぐなり）（希四郎）	きさ	42（元禄十一年） (1698 年)	
7	寛（かん）	つま	72（享保十四年） （1729 年）	元禄十六年赦免
4	婉（えん）	きさ	65（享保十年）（1725 年） 一説（享保十三年）	同上
3	将（しょう）	つま	60（享保六年） (1721 年)	同上
2	行継（ゆきつぐ）（貞四郎）	きさ	41（元禄十六年） (1703 年)	

12　秦山会のことについて教えてください。

秦山会のこと

谷秦山先生は日本的学者だったと先生より聞かされ､時々先生引率で掃除に行ったことだった。学校の東側が通称「墓地山」の墓参道だった頃で、六尺幅ぐらいの直線の道を通り、山のふもとの犬道を左へ、また、北へ北へと、どぶ池のほとりより石段を登る。相当長い石段の両側は松の大木が覆いかぶさり、昼なお暗い坂だった。坂を上り詰めると広い墓所が一段と高く現在のままで、墓石も当時と変わりはなく石積みのうえに小さな自然石がそのままだった。現在の日の丸もなく竹筒に榊と野花が供えられ古い玉垣に囲まれていた。一本の山桃の木は当時とあまり変わりはないように思う。墓地より香長平野、太平洋の眺めはちらほら日光の差し込むことも無きほどの、こけむす墓所だった。

寺村深が子供の頃の記憶として記した手記より

○秦山会の歴史

大正７年	秦山会生まれる　会長　八井田寛婦人科院長
大正１０年	谷秦山先生墓前に青年団桜を植える（毎月掃除をする）
昭和１０年	秦山先生建碑　高知県教育委員会　八井田先生寄付による
昭和１９年	墓所が国指定史跡に認定される（11 月 13 日）
昭和３７年	秦山会再結成　墓前祭始まる　溝渕増巳知事会長
昭和４５年	墓前祭時、墓地山に念願の桜を植える（観光協会）
昭和４６年	お守り頒布始まる
昭和４７年	秦山墓所上屋及び玉垣復元工事
平成　９年	史跡の保存整備として墓石の屋根修理工事
平成２２年	墓所周りの秦山公園整備完工（香美市）
平成２３年	第５０回墓前祭を挙行　記念事業として桜、紅梅、白梅を植樹
平成３０年	没後３００年を記念して後世に引き継ぐ文献（学聖・谷秦山）を発刊して戴いた（香美史談会）

写真は昭和の頃の墓前祭の様子（石川祐一さんから提供）

秦山会では、谷秦山先生の功績を称え後世へと受け継いでいく意味で、毎年２月の第３日曜日に墓前祭を行っております。郷土の偉人として、多くの方々に関心を持っていただきたいと願っております。

■ お守り頒布所

土佐山田町北本町２丁目　八王子宮
土佐山田町北組西　山本幸雄
土佐山田町西本町２丁目　寺村　勉　(メモリアルサービス十季)
土佐山田町楠目談議所　三谷隆博　(ハチロー染工場)

■ 国旗販売所

土佐山田町北本町２丁目　八王子宮
土佐山田町西本町２丁目　寺村　勉　(メモリアルサービス十季)
土佐山田町楠目談議所　三谷隆博　(ハチロー染工場)

■ 役員(平成 29 年現在)

会　長　時久　惠子
副会長　寺村　勉
理　事　西内　政巳
〃　甲藤　榮一
〃　西村　芳成
〃　依光晃一郎
事務局　三谷　隆博

【連絡先】秦山会　副会長　寺村　勉
香美市土佐山田町西本町 2-2-20　株式会社テラムラ内
TEL：0887-53-5151　FAX：0887-53-5153

別表・資料

附録　谷秦山著作集

	著作時	著作名	備考
①	天和二	上敬義先生問目　写、二巻	
②	貞享四	譜法　刊、一巻	秦山集にも所収
③	元禄元	土佐遺語　写、三巻	元禄元年の序文あり。書中、宝永五年の記事見ゆ。
④	同	大学晩進録　写、一巻	書中、「辰二月朔日夜終」の記事あり。
⑤	同	小学晩進録　写、二巻	元禄元年酬月五日の跋文あり。書中に大学晩進録のこと見ゆ。
⑥	九	書二元亨釈書王臣伝論後一　刊、一巻	秦山集にも所収。
⑦	至自一七〇八	神代初問　写、九巻	神代温義にも所収。
⑧	一〇	神代再講　写、四巻	同右。
⑨	至自一七一〇	神代三批　写、四巻	同右。
⑩	至自一七一〇	天柱密談　写、九巻	同右。
⑪	至自不明七一	暦算問目	整理未完。
⑫	至自一三四	谷秦山手記	書籍講、出来算用帳。
⑬	一四	与二中村恒享一　写、一巻	秦山集にも所収。
⑭	一六	新蘆面命　写、二巻	
⑮	同	朱子伝来記　写、一巻	
⑯	宝永二	土佐国式社考　刊同、一附録巻	秦山集にも所収。
⑰	同	大神重遠先生手牘　写、一巻	櫂谷龍吉氏珍蔵。
⑱	宝永四	神代巻塩土伝　刊、五巻、四冊	出版は享保三年のことであらう。
⑲	同	中臣祓塩土伝　刊、一巻	同右
⑳	正徳二	秦山集　写、四九巻	年秦に山、谷、垣、千城守によって刷訂正増補が加へられ、明治四十三
㉑	至自三元	秦山門弟問目　写	土佐国群書類従、第一五一巻所収。
㉒	四	俗説賛弁　刊、三巻	正徳四年の序文あり、正徳六年刊行。
㉓	同	甲午日帳　写、一巻	
㉔	五	乙未日誌　写、一巻	
㉕	同	跋二学否弁論一　写	学否弁論は山内規重の著作。
㉖	享保二	丁酉日課　写一巻	
㉗	同	保建大記打聞　刊、三巻	歿後、享保五年刊。
㉘	三	戊戌日録　写、一巻	
㉙	同	麗沢簒会簿　写、一巻	
㉚	同	秦山書蔵　写、一巻	
㉛	同	鍋山懐珍　写、一巻	
㉜	同	俗説賛弁続編　刊、二巻	
㉝		秦山先生手簡	文政元年の稲毛実「秦山手簡集」を増補し、昭和十四年青楓会から出版。
㉞	不明	靖獻遺言師説	内容からして、晩年の講義と見ゆ。

谷秦山年譜（西内雅著　垂加神道の伝承）

谷秦山年表

年号	干支	西紀	年齢	時代区分	事跡	その他の年表
寛文三	癸卯	1663	一	家学	神兵衛重元の三女三男の末子として、土佐国長岡郡八幡村に生る（三月一一日午前六時）	前年、伊藤仁斎は京堀川に、古義堂塾を開く。野中兼山歿す（四十九才）
四	甲辰	64	二	家学		
五	乙巳	65	三	家学		
六	丙午	66	四	家学	一家、高知城下に移る。	
七	丁未	67	五	家学		吉川惟足、幕府神道方となる。
八	戊申	68	六	資承時代		
九	己酉	69	七	資承時代		山鹿素行「中朝事実」成る。ニュートン、微積分法を発明す。
一〇	庚戌	70	八	資承時代		林鵞峰、「本朝通鑑」成る。
一一	辛亥	71	九	資承時代	母方の伯叔父（島崎氏）に、「小学・四書」を学ぶ。	山崎闇斎、垂加神道を唱ふ。
一二	壬子	72	一〇	資承時代	常通寺に入れられ、「法華経」を通誦す。また、郷土先哲の事蹟を開く。	水戸光圀、彰考館を開く。保科正之歿　六十二才
二	甲寅	74	一二	資承時代	寺を辞して家居す。父の褒めで「太平記」などの野史、及び「経書」を読む。	関孝和、微積分法を発明す。
三	乙卯	75	一三	資承時代		
四	丙辰	76	一四	資承時代		
五	丁巳	77	一五	資承時代		
六	戊午	78	一六	資承時代		
七	己未	79	一七	資承時代	二月、上京し浅見　斎に従学す。次いで、山崎闇斎の門に入る（一〇月二一日）	
八	庚申	80	一八	資承時代	四月、郷に帰る。眼病を患ふ。落より仕官をすすめられしも辞して、九月上京遊学す。	
天和元	辛酉	81	一九	神儒並学時代	二月、郷に帰る。① 十月、山崎闇斎の訃を聞き、上京して弔ふ。十二月、郷に帰る。	山崎闇斎歿す（九月十六日）（六十五才）
二	壬戌	82	二〇	神儒並学時代	一家、城北二キロの秦泉寺村に移る（七月二日）九月上京し、十二月郷に帰る。	
三	癸亥	83	二一	神儒並学時代		
貞享元	甲子	84	二二	神儒並学時代		貞享改暦行はる。渋川春海、幕府天文方となる。
二	乙丑	85	二三	神儒並学時代	「日本書紀」等の考証を行ふ。	山鹿素行歿す（六十四才）。
三	丙寅	86	二四	神儒並学時代		
四	丁卯	87	二五	神儒並学時代	春、幡多郡に売薬行商し、初夏帰る。耳疾を患ふ。②	
元禄元	戊辰	88	二六	神儒並学時代	「土佐遺語」に着手し、「小学」及び「大学晩進録」成る。父重元（六五歳）歿す（一一月一日）。③④⑤	イギリスで名誉革命が成功し、近代化の発火点となる。契沖、「万葉集代匠記」成る。
二	己巳	89	二七	神儒並学時代	肺結核を患ふ。（秋）	露清の間で、ネルチンスク条約成る（ロシアの東侵）。
三	庚午	90	二八	神儒並学時代	母歿す（八月一一日）。喀血再発す（秋）。	林鳳岡、大学頭となる。
四	辛未	91	二九	神儒並学時代	浅見　斎に神書を読むの弁を質す。門弟知友と書籍購入の講を設く	光圀、湊川に楠公の碑を建つ。西鶴、「世間胸算用」刊行。
五	壬申	92	三〇	神儒並学時代	「拘幽操の跋」成る（歳朝）	芭蕉、「奥の細道」成る。
六	癸酉	93	三一	神儒並学時代	「私講膀論」を掲げ、私塾の綱領とす。	

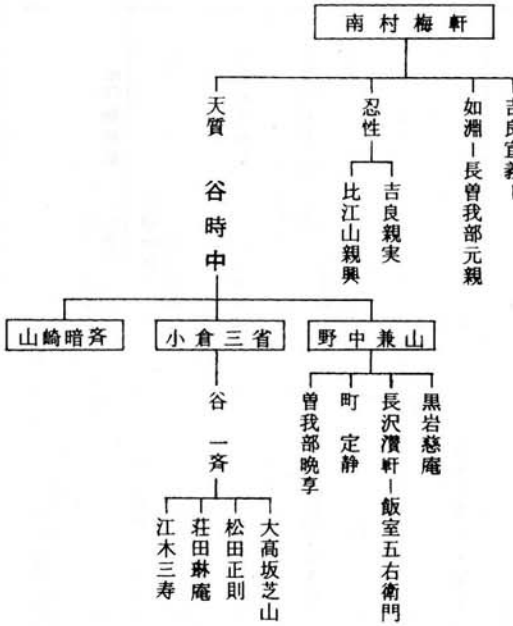
谷秦山年表

年号	干支	西紀	年齢	時代区分	事跡	其他の年表
七	甲戌	94	三一		渋川春海に書を以て入門し、爾後神道、天文暦学を学ぶ（二月望日）。	吉川惟足歿す（七九歳）。
八	乙亥	95	三二			
九	丙子	96	三四		「元享釈書王臣伝論の後に書す」成る。⑥⑦	
一〇	丁丑	97	三五		渋川春海から暦術印可を授かる（夏）土橋氏を娶る（四月二三日）⑧	
一一	戊寅	98	三六		嗣子垣守生る（七月二一日）⑨⑩⑪	
一二	己卯	99	三七		幡多郡渭南地方に遊ぶ（正月六日～二月五日）。渋川春海から中臣祓印可を授かる（一一月一日）。	
一三	庚辰	1700	三八		秦山一家は分家して、城東二〇キロの香美郡山田村に移る（四月二一日）。⑫	
一四	辛巳	01	三九		荒木由経晃から中臣祓の伝を授かる（三月一日）。⑬	
一五	壬午	02	四〇		谷氏の大神姓たることを考証す（二月一六日）。藩命により城下に移り神代巻を講ず（三月一三日）。渋川春海から神道印可を授かる（一一月冬至）。春秋の祭日を定む。	
一六	癸未	03	四一		致仕して山田村に帰る（一一月二七日）⑭⑮	
宝永元	甲申	04	四二		散逸していた家宝の大原真守の刀を入手（二月七日）。江戸の渋川春海に従学し、「東遊紀行」を著はす（二月一二日～六月一日）	
二	乙酉	05	四三		春秋の祖霊祭を厳修す（正月七日、九月二七日）。⑯⑰	
三	丙戌	06	四四		藩命により、京に吉田兼敬を訪ひ、「土佐国式社考」の校閲を得て、復命す（四月一六日～五月一七日）。「佐川藩主に与ふ」成る（一二月一〇日）。	
四	丁亥	07	四五		佐川支藩事件の冤罪により禁錮される（四月六日）―神代巻塩土伝（一〇月六日）」、「中臣祓塩土伝（九月一六日）」成る。⑱⑲	
五	戊子	08	四六		三男八蔵夭す（四歳）。	数学者関孝和歿す（七九歳）。
六	己丑	09	四七			
七	庚寅	10	四八		「西山遺事」を筆写す。	浅見　斎歿す（六〇歳）
正徳元	辛卯	11	四九		大神姓谷氏の祖霊社谷社を鎮斎す（九月二七日）五男、生後三日で夭す。「宮地介直に与ふ」成る。夢想により日少宮を悟り、土地を売り「六国史」等購ふ。	
二	壬辰	12	五〇		「秦山集」草稿成る。⑳	
三	癸巳	13	五一		四男久蔵夭す（六歳）。㉑㉒㉓	
四	甲午	14	五二			
五	乙未	15	五三		次男神内古道急死す（一四歳）。渋川春海の訃に接し、祭文を上り、五十日の心喪に服す。㉔㉕	
享保元	丙申	16	五四		「俗説贅弁」上梓（正月）	
二	丁酉	17	五五		左半身の中風を患ふ（三月二六日）―保建大記打聞」草稿成る（五月一四日）㉖㉗	
三	戊戌	18	五六		「俗説贅弁続編」上梓（六月七日）電乱にて急逝す（六月三〇日午後二時）㉘㉙㉚㉛㉜	将軍吉宗、測午機をつくり、自ら天体観測を行ふ。
四	己亥	19	歿後一			将軍吉宗、洋書の禁をゆるめる。
五	庚子	20	二		「保建大記打聞」上梓（正月）「土佐国式社考」上梓（一一月）	
嘉永元	戊申	1848	一三〇		孝明天皇御即位奉祝式に当って、前罰解除の恩命に浴す。	
大正八	己未	1919	二〇一		正五位御贈位の御沙汰を賜はる。㉝㉞	

代時成大　　諸家神道天文暦学兼学時代
後歿

南学学統図

谷時中門下



南学とは、近世初期に、土佐に発達した宋学（朱子学）をいう。

この地方における宋学の興起は、天文年間（一五三二～五五）、大内義隆（一五〇七～五一）－戦国末期、山口を本拠とした大内氏嫡統の大名）の御伽衆であった南村梅軒が土佐に移って、弘岡城主吉良宣経に朱子学を教えたことに始まる。宣経の死後、梅軒の学は

宗安寺の如淵

吸江庵の忍性

雪蹊寺の天質（天室）らの禅僧によって受け継がれ、さらに天質門下の谷時中によって世俗世界にもたらされた。その後、時中門下の

野中兼山

小倉三省

山崎闇斎の手によって、南学は禅から完全に離れ、現実社会の実践的指導理念として土佐藩で力をもつに至った。

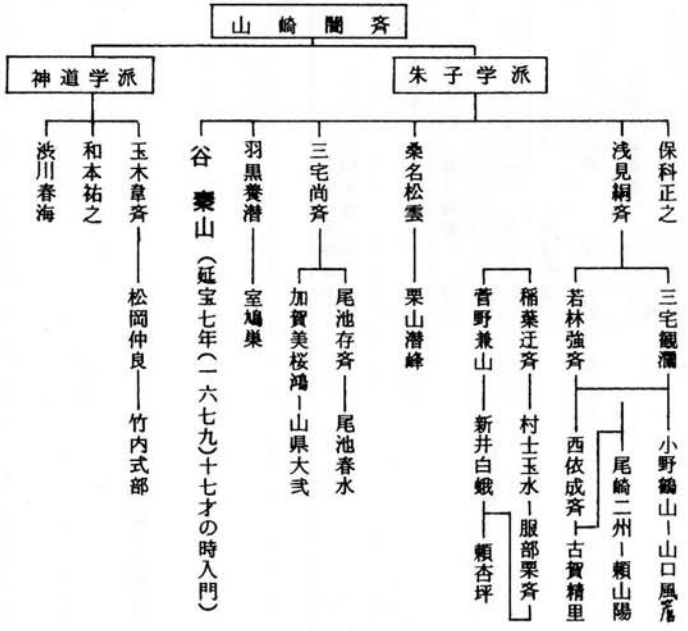
小学や文公家礼の重視という点に日本の他の朱子学にみられない特色がある。

兼山の失脚後はこの学派の人々は四散したが、谷秦山が出るに及んでまた土佐の地によみがえった。

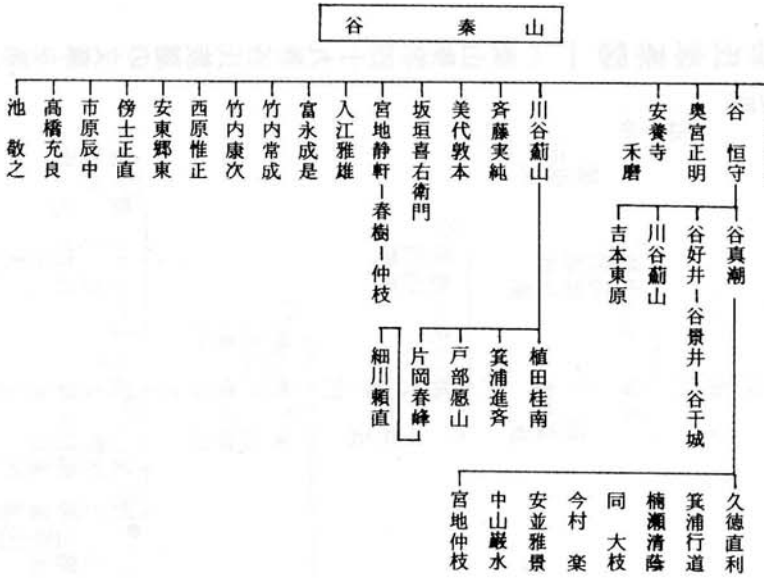
※芝山は、再校を願って「南学伝」を書いた。

南学学統図

山崎闇斎門下

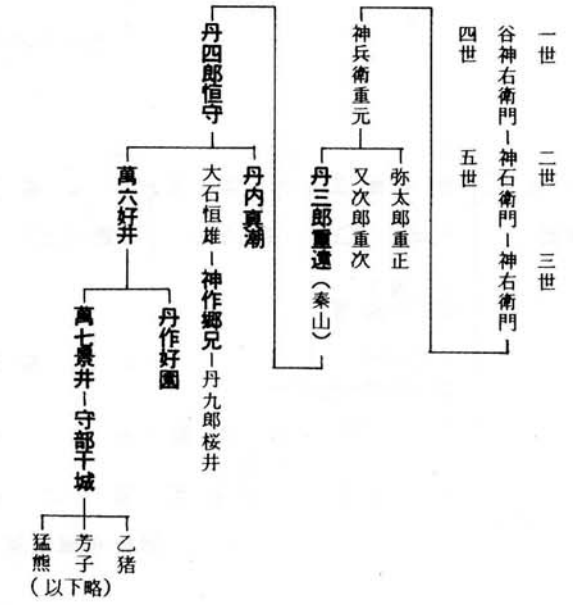


谷秦山学統

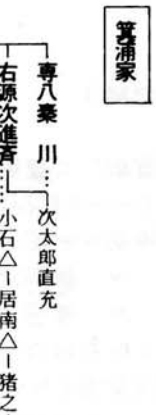


※谷門の学として、恒守－真潮らに伝えられる。

谷氏系図



谷家



※秦山の家学は、恒守・真潮・好井・景井・干城の子孫が継承した。

宮地家

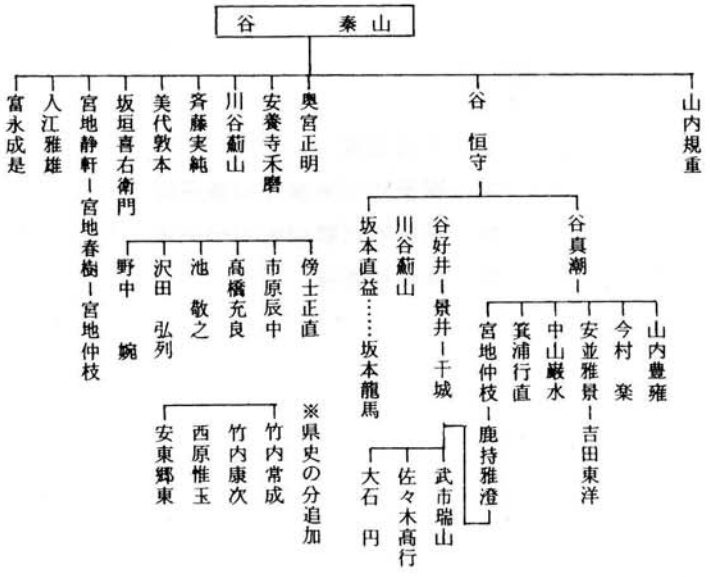
※宮地家では、為斉・水渓が家学を継いだ。

箕浦家

※箕浦家では、秦川・進斉兄弟が崎門の流れを汲み、一門に耕雨・小石・居南が輩出した。

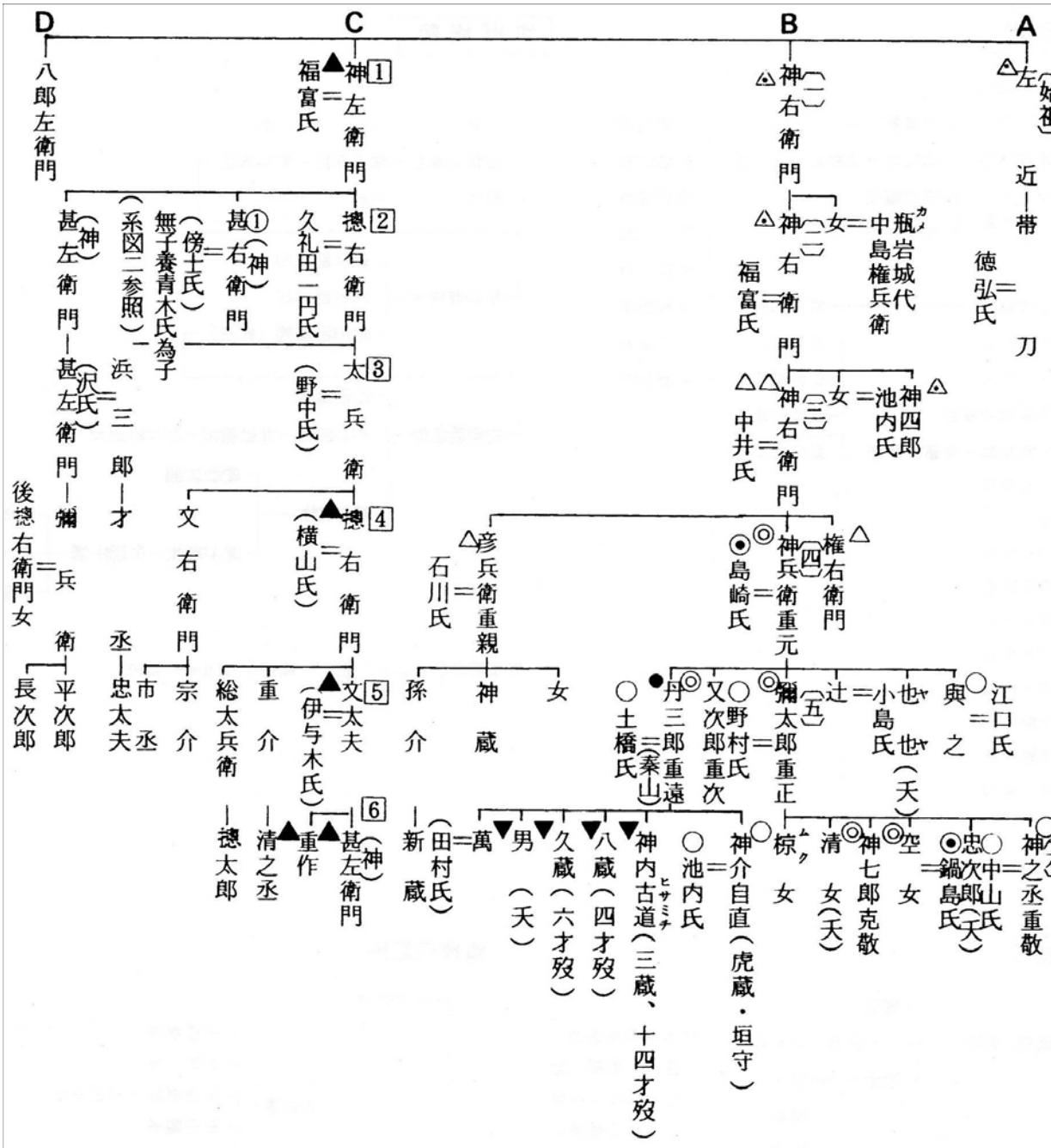
○谷・宮地・箕浦の三家は学門の家筋として重要な地位を占め、藩学の中心として明治維新の頃まで続いた。（資料は県史による）

谷秦山門下



※県史の分追加

谷氏家系図一（秦山集第四十九巻谷氏族譜の文章を系図化す）



凡例（墓所位置）

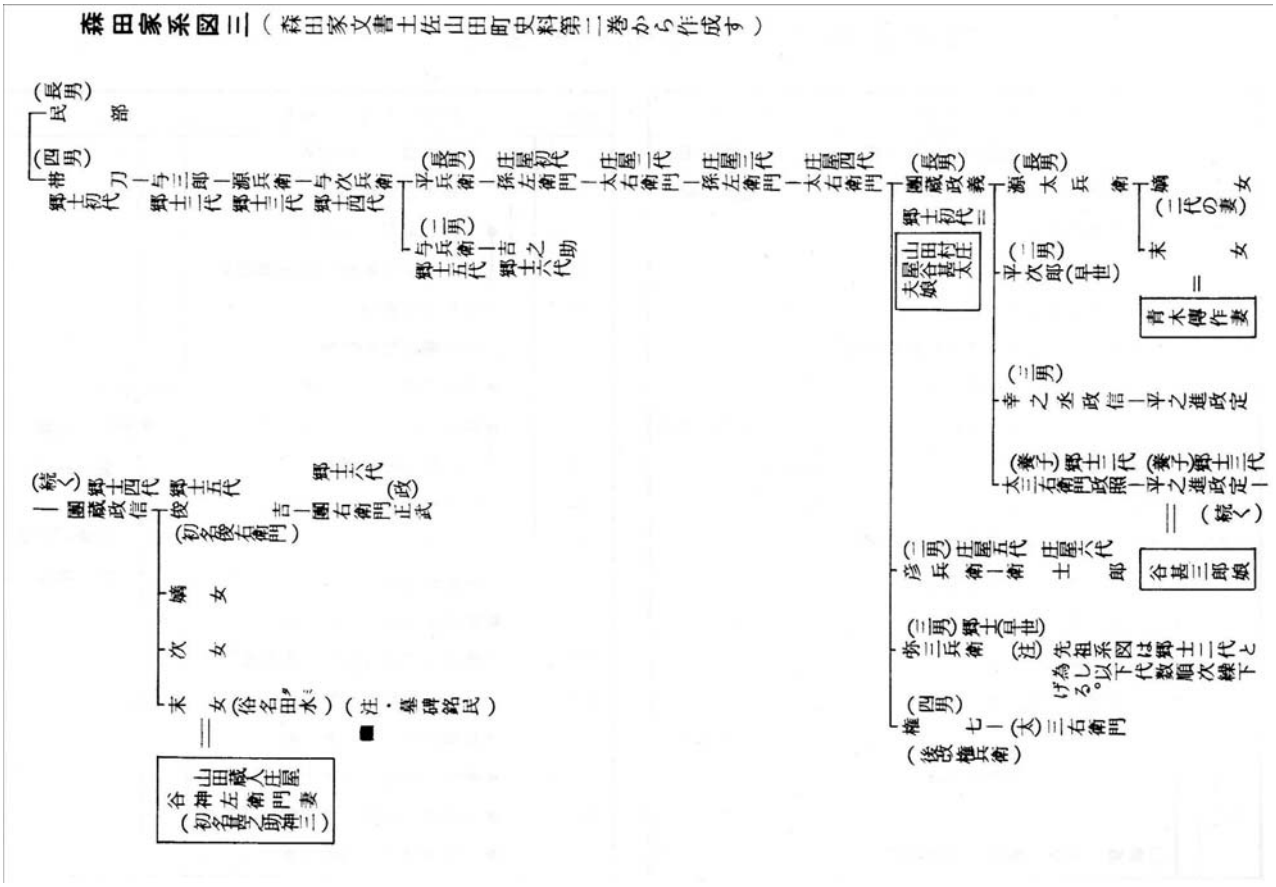
△ 南国市岡豊、八幡前山
◬ 〃（天王カ内から改葬）
◎ 高知市秦泉寺天馬山
⊙ 〃 〃 御前谷
○ 〃 〃 秦山
⊗ 〃 中久万久万山
● 土佐山田町植（グイミ谷）
▼ 〃 〃 北本町（鍋山）
▲ 〃 〃 植（マエヤマ）
■ 〃 〃 山田（車田）
◆ 〃 〃 山田（膳調口）

系図二、三についても同じ。

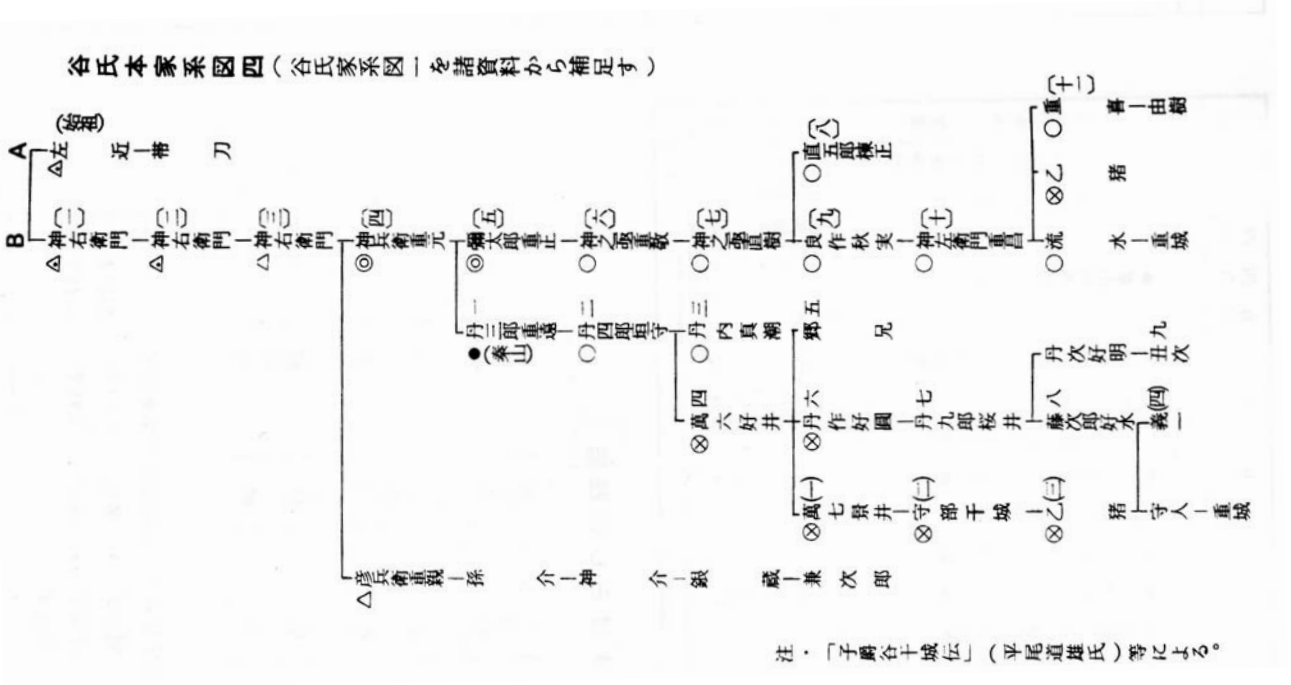
符号

A 谷氏始祖
B 高知谷氏本家系と秦山系
C 山田谷氏郷監系と庄屋系
D 秦泉寺城監

森田家系図三（森田家文書土佐山田町史料第二巻から作成す）



谷氏本家系図四（谷氏家系図一を諸資料から補足す）



注・「子爵谷干城伝」（平尾道雄氏）等による。

いばらの道をのり越えて大成へ

年号	学問の歩み　著書	備考
	寛文三（一六六三年）重元の三男	
四	△記憶力抜群　神童と呼ばれる△	八幡村出生
九	○小学四書を学ぶ	高知へ転居
一〇	○法華経を覚える	
一二	○大平記等野史経書を学ぶ	
一七	○山崎闇斎門に入る…病気や学資の都合で帰郷上洛をくりかえす	
二一	○秦山と号す	
二二	○日本書紀考証	貧困不幸病気とのたたかい
	●譜法刊　一巻	
二四	△貧困極致に至る　困窮は生涯つきまとうが超越して学究に励む△	耳疾
二六	●小学晩進録　写二巻	
	●大学晩進録　写一巻	父死す
	●土佐遺語　写三巻	
二八		秦泉寺移転
		母死す
二九	谷秦山手記　神書を読む	
三〇	○神道　天文　儒学　暦算問目	

年号	学問の歩み　著書	備考
三三	○天柱密談　写九巻	
	○暦法伝授許状	
	神代初問　写九巻	
三四	書元亨釈書王臣伝論語刊一	
三五	○暦術印可得る	
	○日本書紀代巻講義	
	●神代再講　写五巻	ささやかな幸わせ　結婚
三六	神代三批　写四巻	
	○学問上の大論争	恒守生る
三七	○中臣抜印可	
三八	○十一曜印可	
	○中級抜の伝	
四〇	●興中村恒亨　写一巻	
	○藩臣に日本記神代の巻講義	分家して山田へ移住
四一	○三種の神器故実授ける	
	●新蘆面命　写二巻	
	●朱子伝來記　写一巻	
四三	●土佐国式社考　同付録　刊一巻	
	●大神重遠先生像　写一巻	

年号	学問の歩み　著書	備考
四五	●神社巻塩土伝　刊五巻四冊	
	●中臣抜塩土伝　刊一巻	
四六		貧困不幸病気無実の罪とのたたかい
四九	●秦山門弟問目　写	
五〇	●秦山集　写四九巻	四男死す
五一	●甲午日帳　写一巻	
五二	●乙朱日誌　写一巻	二男死す
五三	●贅学否弁論　写	
	●俗説贅弁　刊三巻	中風疾
五五	●丁酉日課　写一巻	
	●保健大記打聞　刊三巻	三男死す　五男死す
五六	●戊戌日録　写一巻	
	●秦山書蔵　写一巻	
	●鍋山懐珍	
	●俗説贅弁続編　刊二巻	
不祥	●靖献遺言師説　ほか	没す　享保三（一七一八年）

著作の全てを掲載したものではありません。

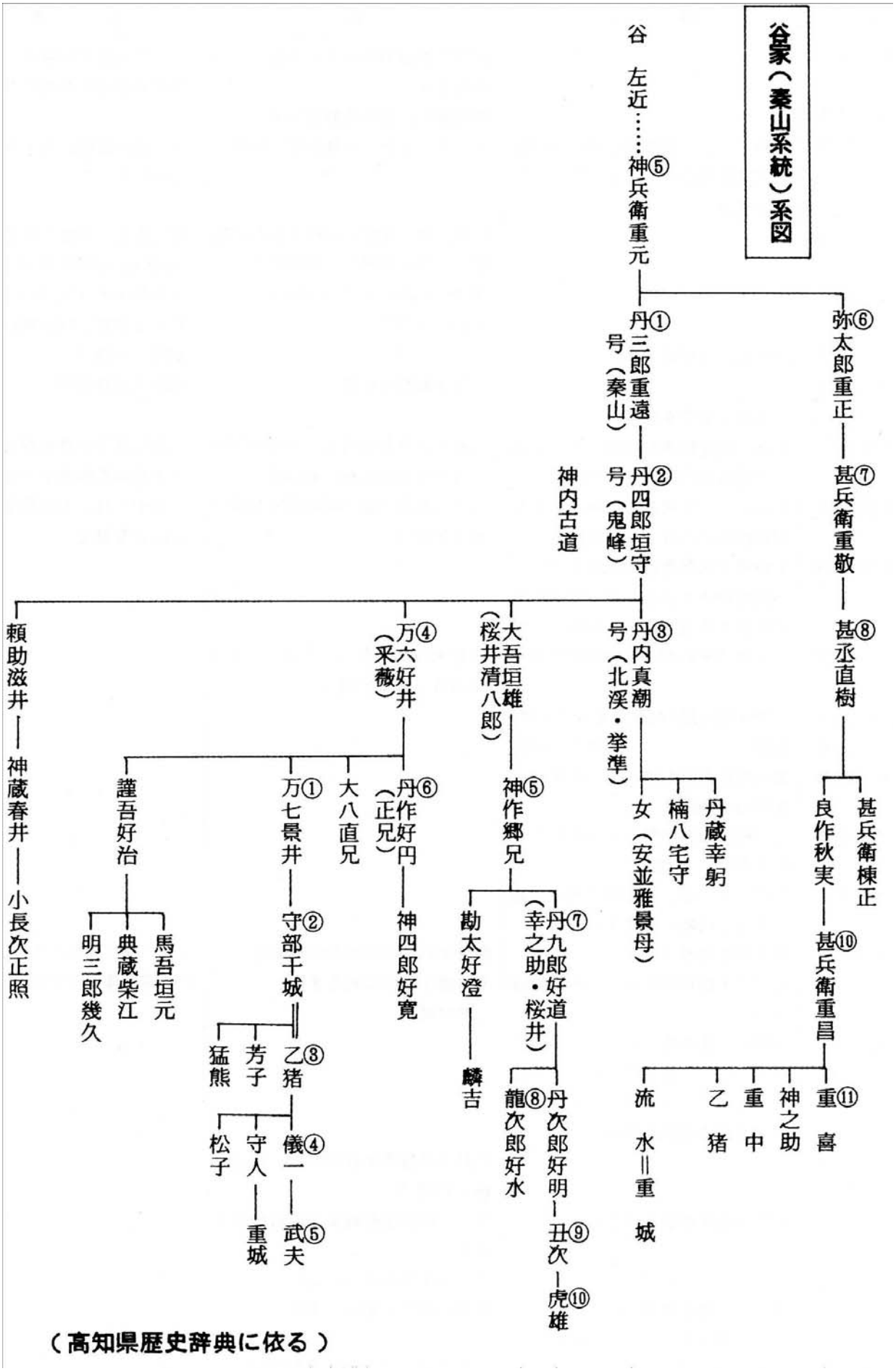
すばらしい頭脳

意志力	執着心	追究心	向学心	？
父の訓	忍耐	判断力	努力	
内助の功	信念	情熱	研究心	

目に諸の不浄を見て　心に諸の不浄を見ず

耳に	聞いて	聞かず	•	鼻に	かいで	かがず
口に	言ひて	言はず	•	身に	ふれて	ふれず
意に	思ひて	想はず				

谷家（秦山系統）系図

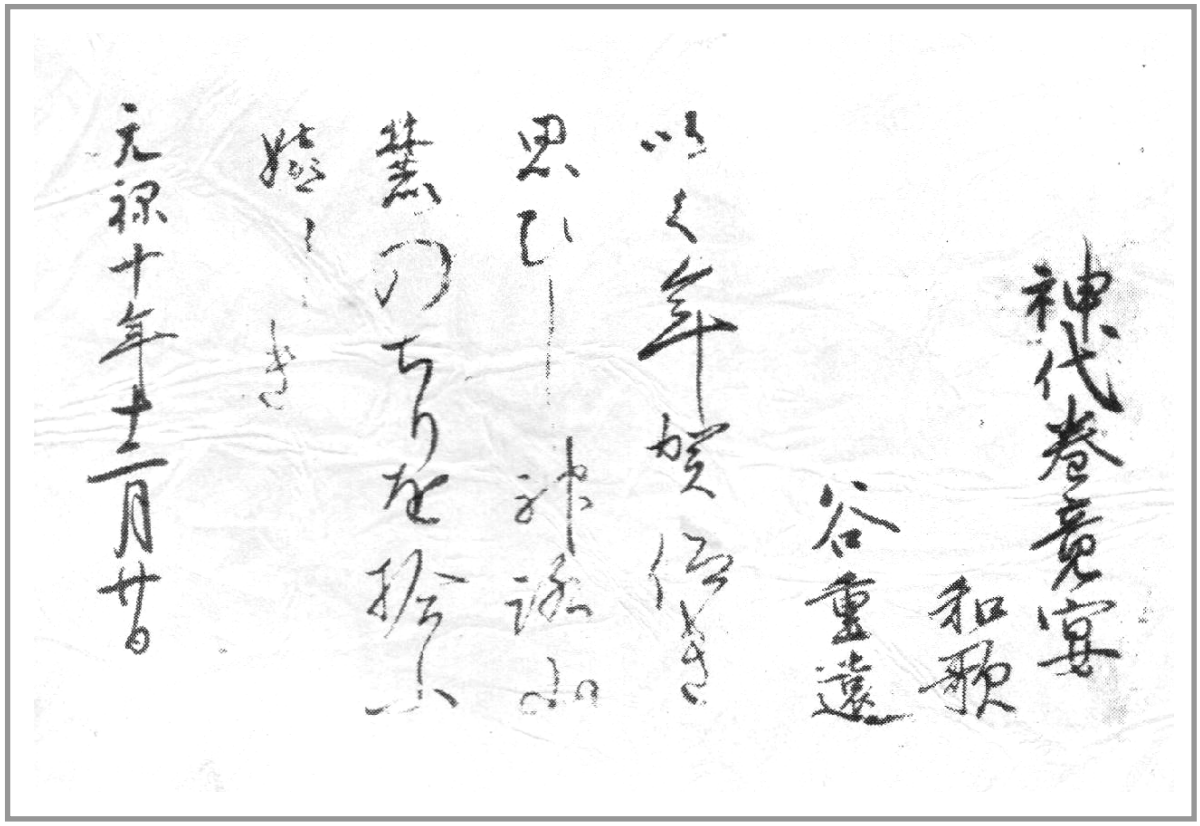


（高知県歴史辞典に依る）

時　の　つ　な　が　り

西歴	年号	秦山	婉	参考
1661	寛文元年		婉野中兼山第四女として誕生、母は池まさ	三月津呂港さく竣工、四月二十五日万治を寛文と改元
1662	〃 二年		妹将誕生、母は美濃部つま	
1663	〃 三年	三月十一日、長岡郡八幡村の神職の家に生まれる（郷士）神兵征重元の三男	十二月十五日、父兼山没（49歳）	八月兼山退職、寛文の改替行われる。
1664	〃 四年		三月二日、兄清七一明と宿毛に追放、山内佐衛門佐（安東節氏）に預けられる。（70人扶持）（計二十二名）	長兄清七（16歳）次兄欽六(15歳)三兄希四郎(8歳)弟貞四郎(5ケ月)次姉よね(18歳)三女寛(7歳)婉(4歳)妹将（3歳）
1666	〃 六年	高知城下に移る（4歳）		
1667	〃 七年		五月よね没（21歳）	幕府巡見使来国
1671	〃十一年	（9歳）小学を読む		
1679	延宝七年	上洛、浅見絅斉の門に入り、更に山崎闇斉の門に入る（17歳）	六月十三日長兄清七一明没(31歳)（36人扶持に減、婉19歳）	六月七日室戸港浚渫竣工一木権兵衛殉職す（63歳）
1683	天和三年	七月二日、一家をあげ城北秦泉寺村に移住（21歳）秦山と号す	九月二日次兄欽六明継没（34歳）婉（23歳）	一月十八日、土佐馬を領外に出すを禁止
1686	貞享三年	（24歳）初夏西遊一幽居を訪れる一獄吏にさえぎられる一野中氏寓居に寄す（五言語）を詠む		
1687	〃 四年	（25歳）希四郎に述懐の辞を寄せる	三兄希四郎と秦山の文通はじまる（31歳）婉（27歳）	
1688	元録元年	父神兵重元没(65歳)秦山（26歳）		
1690	〃 三年	母没　秦山(28歳)		
1691	〃 四年	秦山浅見絅斉と神道説合わず交りを絶つ（29歳）		
1694	〃 七年	江戸渋川春海の門に入り神道天文暦学を学ぶ（32歳）		
1697	〃 十年	四月二十三日、弓術家土橋六兵衛の次女と結婚（再婚）（35歳）		
1698	〃十一年	書を婉に寄せて弔す 七月二十四日長男誕生（丹四郎垣守）	四月十六日三兄希四郎継業没（41歳）秦山に知らす （婉37歳）	十月六日高知城下大災、十一月家中建築令発せらる。
1700	〃十三年	分家して香美郡土佐山田村に移住		
1702	〃十五年	浪人の身分、藩主豊房に好学を認められる。－十人扶持－城下に住み学徒に古神道を講義		
1703	〃十六年		六月十八日季弟貞四郎没（41歳）婉（43歳）	
		赦免を祝する辞を送る	九月十四日生存婦女子六名赦免される 九月二十四日秦山へ返信	
		妻女と子息を朝倉へ挨拶に。 十一月藩学を辞し山田に隠棲	朝倉に移住－秦山へ手紙	
1704	宝永元年	二月十二日江戸、畿内をまわる旅に出る（42歳）	十月二十一日生母正運院(池まさ)没、婉（44歳）	

西歴	年号	秦山	婉	参考
		江戸 － 渋川春海 － 貞享歴 － 瓊矛拾遺の奥義 － 天文神道の口伝 － 帰途伊勢 － 度会延佳より教をうける － 六月帰郷		
1706	宝永三年	「土佐国式社考」藩主に献上、使者として京都吉田家に校閲を乞う		五代藩主豊房六月七日没（35歳）
1707	〃 四年	罪状不明のまゝ山田に執居を命ぜられる		
1708	〃 五年		九月二十二日香美郡西野地、（現土佐山田町上野）に祖廟を造営す（48歳）	
1711	正徳元年	三月四日四男誕生、二日後没		
1713	〃 三年	六月二十八日三男没（6歳）		
1715	〃 五年	一月十二日次男没（14歳）		
1718	享保三年	六月三十日秦山没（56歳）	恩師秦山没し祭文を贈る	
	〃 六年	七月二日、山田ぐいみ谷に埋葬		
1721	〃 六年		七月二十七日妹将（母美濃部つま）宿毛に没す（60歳）	三月江戸大火
1725	〃 十年		十月二十九日婉朝倉で没す（65歳）	
1848	嘉永元年	六月二十八日釈罪 没後１３０年	仝日、宿毛で病没した兼山の遺族六名赦免 一明、明継、継業、行継、市女、よね	
その他		炳丹録、小学大学晩進録、拘幽操、土佐国式学、中臣祓塩上伝、俗説贅弁保建大記打開、秦山集等、貴重な著者を残す。	教養高く医者であり学者でもある婉。	



神代巻竟宴

和歌

谷　重遠

以く年賀仰き
思いし神路山
麓のちりを拾ふ
嬉しき

元禄十年十二月廿日

高知新聞社出版
『土佐の書より』

◇あとがき

○本冊子は谷秦山先生没後 300 年を迎え、特集号として香美史談会が編纂、発刊しました。
○本冊子は昭和 63 年 3 月発行土佐山田史談第 10 号、平成元年 9 月発行同第 12 号に掲載された先輩諸氏の論考等を底本として校訂しました。
○本冊子編纂に際しては、依光晃一郎様よりご援助をいただきました。さらに出版費は香美市による補助金制度の活用及び秦山会様からご援助をいただきました。
○本冊子発刊に際し、香美市長法光院晶一様、時久恵子教育長様より、お言葉をお寄せいただきました。秦山会からは副会長寺村勉様より活動内容をご紹介していただきました。

多くの方々のご援助ご協力に感謝とお礼を申し上げます。まことに有難うございました。谷学研究は深遠であり、先輩諸氏の論考等に比して編纂担当者自身の研究が不十分であることを痛感しています。そのため、上梓出来なかった部分が多くあり、申し訳なく思っています。本冊子が学聖谷秦山先生研究の今日的意義を再認識し、市民の方々と共に我が香美市発展の心の糧となればと切に願うものです。

平成 30 年 1 月吉日
香美史談会谷秦山冊子編纂委員会

学聖・谷秦山　－その生涯と秦山学大成への道－

平成 30 年（2018）2 月 15 日　第 1 版 1 刷発行

編纂　香美史談会谷秦山冊子編纂委員会
編纂委員　上村敬介・宮地幸雄・髙田俊祐・
福留信敏・森田拓男・為近初男

発行者　上村敬介

発行所　香美史談会
〒782－0078
香美市土佐山田町大平 473　髙田俊祐宅
TEL／FAX　0887-52-2139
携帯　090-7780-2599

印刷・製本　有限会社　小松印刷所
〒782－0032
香美市土佐山田町西本町 1-3-24
tel　0887-53-2040